

## 南里有隣関係歌集

日高 愛子

### ①『本教館詠草（一）』

（表紙） 嘉永七年寅九月ヨリ

本教館詠草（一）

安政二年卯五月迄

嘉永七年寅九月

秋動物

武行

1 秋萩の花咲比は足引の山辺に鹿の鳴ぬ日そなき

定常

2 秋霧の八重立こめし大空の姿はみえす雁鳴わたる

有隣

3 高砂の松の秋風さよ更て尾上の鹿の声聞ゆなり

竹弘

4 よひ／＼にしも安くねす鳴鹿は秋風寒み妻やこふらん

常従

5 久方の雲み遙に鳴つれて月にとわたる天つ雁かね

竹寿

6 秋の野に霜置初てうら枯の草はは駒もすさめさるらん

夕薄

有隣

7 門を出て見やれはいとゝ夕風にさひしき招くしのゝ小薄

朝露

吉胤

8 朝日さす千くさに置く白露はつら貫とめし玉とこそみれ

庭萩

常従

9 外に又友なき宿は朝夕に独そめつる庭の糸萩

秋風

武行

10 旅人の行きの岡にはふ葛のうら淋しくも秋風そふく

峰月

定常

11 立田山みねの紅葉も色付ていよ／＼月のかけさやか也

夜虫

竹弘

12 秋のよは声のあやめも分ぬ迄草村しけく虫のなく也

秋夜寒

竹寿

13 露しけれ風さそひ来て小夜深き手枕寒く身にそ覚ゆる

野分

龍種

14 行雲の姿あやしとみしほとにやかて野分の風立にけり

川辺月

孝詮

15 大井川清き流の水底にかけ澄わたる秋のよの月

竹弘

16 秋のよは清滝川の清き瀬を心と澄てやとる月かな

有隣

17 川水にうつろふ月のかけみれは浮共みえす沈む共なし

龍種

18 佐保川の堤伝ひに見つる哉波にやとれる月の光りを

独聞萩

19 さむしろに独打ぬるさよ更て聞も身にしむ萩の上かせ

龍種

20 打わひて独ぬるよのつれ／＼ととふとや萩のそよく成らん

竹寿

21 しられしと独住ぬるいほりにも秋は来にけり萩の音して

古郷

維足

22 住捨て年をへぬれと古郷は軒の忍ふのしのはれそする

月照草花

有隣

23 物は皆昼こそ見れと白きくの花は月にそ色増りける

擣衣

保道

24 玉川の流の末も水上も夜寒や同じ衣うつこゑ

田家待雁

竹弘

25 植置し門田の色に成しより待るゝものは初雁のこゑ

野外草露

竹寿

26 かや野姫かさしの玉かと斗りに光りて見ゆる草のはの露

竹弘

27 秋の野の千種の花の色よきもあするも露の心也けり

雲間雁

竹寿

28 越のねに懸りし雲の絶間より頭はれ渡る天つ雁かね

29 つく／＼と声のあたりを詠むれは雲間に雁の頭はれにけり

30 雲間より頭はれ渡る雁かねの嬉しき声に聞えけるかな

時雨

有隣

31 神代より神や定めて神無月しくるゝ物としけれ馴けん

龍種

32 最上川早せの音にまかへつゝのほりくたりてふる時雨かな

竹弘

33 天地の時知かほにけふよりは神無月とそふるしくれ哉

竹寿

34 神無月しくるゝ事をいつの世のたれに習ひて忘れさるらん

露結為霜

竹弘

35 昨日迄露の置たる籬をはけさ初霜や結ひかゆらん

樹上霜

有隣

36 松に見る霜の寒さは白かねの針を身にさす心地こそすれ

朝霜

龍種

37 うら枯の軒はの萩に霜さえて朝戸出寒く成にける哉

夜霜

竹寿

38 やれまより霜置閨の床さえてすかきの竹のふしかての夜や

鹿声幽

竹寿

39 庵べし野への秋萩散果て鹿はかすかの山遠き声

異船来湊

有隣

40 したひてそゑひすの舟はよる浪のこともなきさに何さはくらん

初冬嵐

41 吹初るけさの嵐を世中に冬の来るといふにや有らん

茶碗

42 もとはこれねやす古をはやき返しかへりて今は目を覚す哉

対月思古

43 ともすれは昔のみこそ忍はるれ心を月のいかなすらん

44 さやかなる月に向へは思ひ出て昔も見ゆる心ちこそすれ

九月十三夜

45 長月の中のかけを待わひてたか見初にしこよひなるらん

泰平年久

46 治まれる君か代久に馴／＼て恵みそとしも覚えさりけり

茶出の銘

47 月花も是かなかりし古へはいかに淋しき心ちしつらん

48 姨捨になくさめかねて見し月は是かなかりし昔也けり

49 世中には是かなかりし古への月花いかにさひしかりけん

50 是なくはいかに淋しき心ちせん花の木かけも月の端居も

51 いかすみいかに匂へる月花も是しあらずは淋しからまし

年内立春

52 くれ残る年の日数を残し置いて独やさきに春の立らん  
藤

53 我宿の藤のしなひの長ければ春より夏にかけてこそ見れ

落葉

広雅

54 山姫の染て色こき紅葉はを今は嵐にまかせ果けり

維足

55 立田姫また下染の紅葉までつれなく風のさそひ来にけり

孝詮

56 山川に錦とみえて流るゝは嵐にちりしもみち也けり

有隣

57 朝清め今そ果つる庭の面に心もしらすちる木のは哉  
さも心なく

竹寿

58 山風に木々のこのはのさそはれていつくを果とさして行らん

寄煙恋

維足

59 うき人をまつほの浦のゆふ煙よそになひくを見るも恨めし

山時鳥

広雅

60 ふるほとはもらて時鳥の後瀬山松の雫に袖ぬらしけり

氷初結

忠順

61 昨日迄紅葉流し池水のけさは早くも氷初けり

冬朝雲

孝詮

62 けさも又雲のけしきに見ゆる哉吹出ぬへき風の寒さは

枯野

全

63 打つれて若なつみつる春日野も霜かれわたる冬そさひしき

冬川月

竹寿

64 さゆる夜の氷閉たる淀川に月のみ舟はよとまさりけり

冬夕風

有隣

65 夕霜の寒き門田を吹風に暮ねと里の戸はさしにけり

寒草

孝詮

66 なかめつる萩も薄もかれはてゝ淋しく見ゆる野への色かな

広雅

67 秋に見し千種も分す冬枯て匂はぬ霜の花そ寒けき

竹弘

68 冬かれの枯葉に秋の面かけも残りて見ゆるしのゝをすかき

維足

69 いっしかともえ出る春を冬枯の草はも霜の下に待らん

竹寿

70 招きつる尾花もふして人目さへ枯野の原はさひしかりけり

維足

- 71 置霜のひとつ色にそ成にける野への千くさの花の千くさも  
名所市 竹寿
- 72 こそうつる袖散々に成にけり夕立雨のふるの市路は  
暁恋 孝詮
- 73 たま／＼に逢て嬉しく思ふ間に別をいそく暁のかね  
竹寿
- 74 諸手して千夜もあかしと暁のかねつきならす人は恨めし  
時雨過 竹弘
- 75 我さとを時雨は過て夕月のかけ淋しくもほのめきにけり  
暁水鳥 孝詮
- 76 難波江を暁かけてこく舟に浮ねのかもや立さはくらん  
落葉 有隣
- 77 まてしはし染尽す迄山風<sup>は</sup>とても残さぬ木葉也とも  
関屋灯 広雅
- 78 守人の道とは見えてまはらなる不破の関やの灯淋しも  
湊千鳥 竹寿
- 79 汐や今遠の千方にみちぬらん湊に近く千とり鳴也  
炭竈 孝詮
- 80 大原や小塩の山に焼炭の烟さひしき冬の夕くれ  
狩 有隣
- 81 百敷の大宮人のかり衣かた野のふかき心してふけ  
暮天霜 竹寿
- 82 冬枯の草のは白き色そへて霜こそさゆれ野への夕暮  
風 有隣
- 83 いきまきて声の聞ゆる風は梢に何をいかる成らん  
竹弘
- 84 さそふへき木葉はちりし後も猶梢にさはく風の風

- 85 遠方の松の梢をとよもらてやゝ近く成風のかせ  
須賀雄 維足
- 86 落葉せぬ常盤の森をねたしとや分て烈き風の音  
竹寿
- 87 風といふそむへなる吹からに木々の木葉は散果にけり  
初冬 竹寿
- 88 更る迄月に上たる半蔀もさし籠るへき冬はきにけり  
遠村雪 全
- 89 今朝見れば夜の間の雪に埋もれてそこ共分ぬ遠方の里  
祈逢恋 全
- 90 我方になひく今宵そゆふ懸て祈る命の正しかりける  
古寺鐘 全
- 91 いらかふく軒は朽ても古寺のかねはふりせぬ響なりけり  
冬月 維足
- 92 小雀の埒も寒く見えにけり置霜白き月よみの森  
絶恋 全
- 93 通路の浅ちを人の心とは絶ての後に思ひこそしれ  
久恋 有隣
- 94 人しれす思初にし下染の色はかはらて年もへにけり  
朝落葉 須賀雄
- 95 朝鳥の埒を出る羽風にも散て乱るゝ木々のもみち葉  
千鳥 全
- 96 朝風の軒はを渡る庭の面に霜の上なる紅葉をそみる  
水鳥 竹寿
- 97 月かけの明石の浦の浦浪の浪路遙に千鳥鳴なり

- 98 さよ更てさゆる嵐に水鳥の羽たゝく音は霜やたへうき  
水郷寒蘆 有隣
- 99 おし分て汲けんものを難波女か桶にさはらぬ岸のかれ蘆  
水鳥 全
- 100 水鳥の水に浮ねやいか成んかつくふすまもしたさゆる夜を  
網代 竹寿
- 101 いか成ん網代の床の寒きにもひとのよる／＼守明す身は  
尾上霰 全
- 102 木葉かと聞し板屋のひまとめてこほるゝ見れは霰也けり  
水鳥 須賀雄
- 103 あしか敷難波入江の水鳥の夜深き声を聞はさひしも  
野径霜 全
- 104 分行ん道やいかにと迷ふ哉霜のみ白きむさし野の原  
林雪 全
- 105 村竹の枝をたはめてふる雪に鳥のねくらや尋ねわふらん  
風 久世
- 106 遠きかと聞は程なく近付て梢をならすこからの声  
水鳥 全
- 107 さよ更て岸の氷や閉ぬらん淵にそさはく水鳥のこゑ  
風 広雅
- 108 ちりつくす紅葉のみかは木からしに野への千くさの色も残らす  
冬恋 竹寿
- 109 重ねきるなこやか床もいたつらにあはてぬる夜は寒けかりけり  
松雪 全
- 110 ふりつもる雪いたゝきて高砂の尾上の松も今朝老にけり  
寄道祝 有隣
- 111 木々こめしかみの道こそとけ初れ仏ののりややゝ離るらん

- 112 ひな迄も君か恵を敷島の道ひろくなる御代そうれしき  
変恋 全
- 113 かれにけり千世やへぬらん松のはのかはらしとこそ契り置しを  
広雅
- 114 色に出てみえぬ物からいつの間に下にはかはる心なるらん  
網代 維足
- 115 外に又世を渡るせやなかるらん寒さにたへて網代守身は  
朝氷 全
- 116 起出てかけ見る池の水かゝみくもれる今朝や氷初らん  
薄暮松風 須賀雄
- 117 夕月のかけはかつ／＼頭はれて音立初る峰の松風  
山家 須賀雄
- 118 べゆひし垣の一重に事しけき浮世へたつる山かけの庵  
網代 久世
- 119 更行は月かけさえてうら川の川音高しせゝの網代木  
竹霰 全
- 120 霜結ふまかきの竹の竹のはに霰こほるゝ音のさやけさ  
網代 広雅
- 121 うら川の川風さえて網代守袖やよひ／＼氷る成らん  
冬祝 竹弘
- 122 武士のさけはく太刀ゆさやの内に冬籠する君か御代哉  
網代 有隣
- 123 守人の網代にかゝる命こそよるひをよりも哀也けれ  
山霊 維足
- 124 都には木々の紅葉の盛にて深山は雪のふり初にけり  
竹寿
- 125 白妙の衣きたりと見ゆる哉天のかく山雪に埋れて

126 浅間山消ぬけふりはふりつみし雪の下にもゆる成らん  
 江天欲雪 維足<sup>孝詮</sup>  
 127 空寒く雪けの雲の立出て玉江の月のかけ曇けり  
 寒雁明月 維足  
 128 おくてかるほにも逢て霜冴る田つらの月に雁渡る也  
 寄国祝 仝 孝詮  
 129 万代に榮へゆ<sup>く</sup>らん武士の治むる弓のやまと島ねは  
 有隣  
 130 とり分てきぬくひ物にあきつすの民と生れし事そ嬉しき  
 131 嬉しやなうゑもこゝへもしらぬひの此御国にも生れつる身は  
 都雪 竹寿  
 132 久かたのあまきる雪も都路は人のゆきゝにつもる間もなし  
 133 山里を思ひこそやれ都さへ雪のふる日は寒けきものを  
 幽居雪 竹寿  
 134 雪白し人にかくれて住庵のほそき煙も頭はれやせん  
 古郷雪 仝  
 135 さゝ浪や志賀の古郷ふりかくす雪こそ玉の都なりけれ  
 羈中雪 仝  
 136 都にもつもりやすらんふる雪を払ひわひぬる旅の衣手  
 冬山 維足  
 137 八度置霜にはさすかあらそはて冬枯わたるうねひ耳なし  
 冬朝 方盈  
 138 明たては夜はにつもりし白雪を誰か手すさひに丸はしにけん  
 冬雨 武行  
 139 晴るかと思れはしくるゝ我庵はかねてより猶さひしかりけり

140 結はんとすれは嵐にくたかれて氷りかねたる冬の川つら  
 冬川 竹弘  
 141 うる声を聞すは夫と白雪を荷ひつれたる冬の市人  
 冬市 有隣  
 142 浦風の袖さゆる日にうる酒はにこりもよしやすみよしの市  
 早梅 喬安  
 143 白雪のまたふる年の庭の面に春待梅の匂ひこそすれ  
 冬野 広雅  
 144 紅葉はをさそひつくして今は又枯野の原に嵐吹なり  
 杜頭雪 竹寿  
 145 片そきの行合の間も見えぬ迄夜半につもりし今朝の白雪  
 田家雪 維足  
 146 風のためゆひし門田の小柴垣雪はよきすもうつみ果けり  
 竹寿  
 147 はきもせぬわら屋の庭も門田にもちり一ツなき雪の白妙  
 冬野 有隣  
 148 果もなき果迄今は冬かれていとゝはるけきむさしのゝ原  
 冬梅 維足  
 149 埋火のあたりはかりそ春め<sup>く</sup>雪の下にも梅咲にけり  
 名所雪 竹寿  
 150 渡し舟待袖白くなりけりすみた川原も雪のつもりて  
 七十六といふ年の暮に 仝  
 151 七ツつゝ十と七ツを重<sup>み</sup>ね<sup>なる</sup>年ことふかん春をしそまつ  
 閑居水 定常  
 152 うつせみの世に遠く住奥山の谷の懸樋の音はさやけし  
 杜頭雪 武行

- 153 千早振神の心やいかならん雪おもしろき朱の玉垣  
古郷雪 全
- 154 みよしのゝよしのゝ都跡さへもふりにしうへにふれる白雪  
熙芳
- 155 さらにぬたに昔の跡は見わかぬを猶しのへとや雪のふるさと
- 156 冬深み雪さへに又ふるさとは道うつもれて問人もなし  
社頭雪 全
- 157 払ふへきちりさへもなき神垣やけさ白妙に雪のつもれは  
冬旅 広雅
- 158 けさこえし山路を今やしくるらん<sup>かへり見すれは</sup>雲懸る也  
年内立春 竹寿
- 159 暮るゝへき日数も待す年の内に何を急きて春のきぬらん  
厚道
- 160 冬籠る年の内にも長閑さを覚えて春のけふや立らん  
除夜 全
- 161 老の坂越ることしの一夜をは引とゝめてん閑守もかな  
歳旦 全
- 162 立春の空はさゆれと咲花の匂はんほとを待そ長閑に  
竹寿
- 163 きつにはめんくたかけなから其声に明て嬉しきけさの初春  
子日 厚道
- 164 霞立春日の野へに思ふ同士千世の<sup>ね</sup>日の小松引なり  
竹寿
- 165 子日して祝ふ千年の姫小松ともしひかは万代をへん  
有隣
- 166 君か為子日の松のねもころに祝ふ千年はたかはさらなん

- 167 もてはやすけふの小松や春の野に心引るゝはしめ成らん  
広雅
- 168 若なつむ野に出て見れは鶯もけふの初子に初音なく也  
橋若菜 有隣
- 169 野をひろくあさる若なのたまらぬを身につむ年のかゝらましかは  
早春雪 維足
- 170 春たてと猶消かての雪の上に今はた雪のふりかさねつゝ  
鶯告春 松根
- 171 朝日かけ立出て聞は大かたの世は春なれや鶯のなく  
梅始開 広雅
- 172 鶯の初ねをつくる朝窓に梅もおくれす咲初にけり  
寄鶴祝 竹寿
- 173 千世をへん鶴の毛衣徑緯にをりはへてなく声の長閑さ  
白梅 維足
- 174 かつきつる雪消てこそ白梅のをのか色をは人に見せけれ  
竹寿
- 175 春のよの月や匂ふと庭の面に下立見れは白梅の花  
紅梅 維足
- 176 江に洗ふ錦と是も愛はやな水にうつろふ紅の梅  
竹寿
- 177 朝日かけさし渡しては其色も弥増匂ふ紅の梅  
梅風 維足
- 178 吹す共風はあらなんをのつからかほるそ梅の心なるへき  
竹寿
- 179 手枕にかよへる風はいつくより梅のにほひをさそひ来ぬらん  
梅盛 維足

- 180 盛なる梅の木かけに立よれば手折ぬ袖もかに匂ひけり 竹寿
- 181 道のへの梅の盛の此比はゆきゝの袖を引とゝめけり 軒梅 維足
- 182 尋来て見る人もなし今年より軒はの梅は咲初れ共 竹寿
- 183 窓の戸の破間もよしや軒にさく梅かゝ通ふ道となれゝは 帰雁 久世
- 184 古郷の契りわすれず行雁の心しらるゝ春の夕くれ 山吹 孝詮
- 185 吹風の払ふにちりて庭もせにこかねを敷る山吹の花 余寒月 方盈
- 186 山風に霞は晴て更に又くもる雪けの月のさむけさ 松上霞 全
- 187 松か枝のみとりも夫と分ぬ迄霞むは春の深きなるらん
- 188 朝な／＼山の尾上に立霞薄きは春や浅きなるらん 春雨 孝詮
- 189 もえ出し若なを見れば春さめのふるたひことに色増りけり
- 190 梅の花散を惜むか春雨にぬれつゝもなく鶯の声 春月 全
- 191 木間よりもりくるかけもほの／＼と花に霞める有明の月 若草 有隣
- 192 尋つゝつみし若なも春の野の青むはかりにもえ出にけり 花 厚道
- 193 言の葉の匂ひもそひていとゝ猶光り争ふ花の夕はへ

- 194 春風はふけとふかねと此比はそことしもなく花のかそする 広雅
- 195 川上の流はるかにくむ水も心からにや花のかそする 有隣 竹寿
- 196 植置し宿の一木をあかす見てよその花をも尋さりけり 名所花 全
- 197 みよし野の山分衣かほるらん雲にたくへる花の盛は 関花 全
- 198 心なく散しつる哉春風をなこそその関も名斗りにして 子日 有隣
- 199 子日する野への小松を引分て君と親との千代を祝はん 橋若菜 全
- 200 かへるへき老ならなくにもしやとてつめと名のみの若な也けり 庭花 竹寿
- 201 庭もせに植し花こそ思ひなれさかぬ間は待ちれば惜みて 連峰花 全
- 202 峰つゝき帰りし雲とみえつるは咲みちにける花の夕はへ 花下集会 全
- 203 老にける身の嬉しさはけふことに花見て斗り日をくらしつゝ 朝花 全
- 204 起出て砌を見れば朝風にこほれて匂ふ花の下露 生野氏香焼行餞 全
- 205 浪風の荒き島わの旅枕つゝかなかれとおもふはかりそ 遊糸 定常
- 206 世はなへてのとけき春の大空にひとりみたる野への糸ゆふ 落花 方盈

207 宵の風に思ひし事よけさみれは梢さひしく落散にけり  
 遅日 有隣  
 208 散果ん後をはいかてくらさまし花見てたにも永き春日を  
 野外春風 全  
 209 思ふとちそこしもなく振はへて袖に吹する野路の春風  
 山花 広雅  
 210 のとけしなみ山隠のさくら花散も散ぬも人のいはねは  
 柳交花 全  
 211 枝かはすむつひ思はゝ散花をぬきてとゝめよ青柳のいと  
 古郷春月 全  
 212 古郷の軒はに霞む月見れは忍ふ昔もおほる也けり  
 遅日 竹寿  
 213 春の日の永きをいかてくらさましよるにし限る枕なりせは  
 春田 全  
 214 もえ出る苗代小田の春の色青人草の命なるかな  
 215 かへり見よ返す春田の鋤鍬のくはいくそはくつくす力を  
 維足主の庭の五葉の松を見て 全  
 216 末遠く五葉の松のいつ迄か宿と共にし榮ふなるらむ  
 花雪 有隣  
 217 よしや又雪とまかはゝ桜花うつろはぬまに消よと思ふ  
 218 うつろふを惜む思ひも忘る迄まかひはてゝよ花の白ゆき  
 筑後桃会翁八十賀に 全  
 219 めてゝ見し花の其名のもゝといふ齡も君やかそへしるらん  
 向燠火 全  
 220 年ふれは老も寒さのそふまゝに埋火のみそしたしまれぬる

221 桜花散ての後そ春の日を永きものとは思ひしりぬる  
 遅日 全  
 222 永き日をうみてや山も打霞ゆふへは眠るさまにみえけり  
 春海 全  
 223 わたつみの神のかさしの花にさへ匂ひをそへて霞む浪哉  
 224 難波かた秋なき浪の花の色も春は有とや打霞むらん  
 卯花 有隣  
 225 白妙の衣ほすかと見ゆるかな夏来にけらし垣の卯花  
 更衣 全  
 226 名をたにとせめてき馴し花衣夫さへやけふぬかんとすらん  
 227 花衣いつ迄きんと思ふらんおしむまに／＼まかせはてなは  
 竹寿  
 228 夏来ぬとぬきかへぬれは涼しさを身に知初る今朝の衣手  
 首夏 喬安  
 229 打向ふ外山の霞けさ晴て青葉すゝしき夏は来にけり  
 230 あつさ弓春の名残の藤つゝし夏の日永く咲よしもかな  
 新樹 維足  
 231 蟬のはの衣にかへしきのふけふ軒の柏は葉をかさねけり  
 232 有とたにみえぬ斗に成にけり青はさしあふならの下庵  
 閑居 方盈  
 233 花ちりし跡はいよ／＼問人のうとく成行わか庵かな  
 残花 竹寿

234 山深み春の過しも知ずして若は変りに花そ残れる  
 235 夏山の青葉のおくは吹風もかよはて花の散残るらん  
 236 暮て行春におくれて夏山のしけみか中に花そみえける  
   待郭公 広雅  
 237 時鳥うかれ出へきけしきかな村雨はるゝ夕月のかけ  
   卯花 貞通  
 238 うは玉の闇にも白くみえつるは卯花咲る垣ね成らし  
   首夏郭公 竹寿  
 239 三日月と伴なひ出て鳴声も忍ひてほそし山時鳥  
   残鶯 有隣  
 240 鶯も老にし声や恥ぬらん若葉かくれに忍ひてそなく  
   螢 全  
 241 夕日かけ隠れし山の桼川岸の螢や出はしむらん  
   方盈  
 242 よる光玉かと見てやうなひねかりの川への螢とるらん  
   貞通  
 243 昼の間は串<sup>人</sup>の見るめや忍ふらん暮て螢の思ひみたるゝ  
   有隣  
 244 声立は螢は何をなけきてか我のみ身をはこかす成らん  
   御民  
 245 里の子の眠る待てや出つらん川へにすたく夜はの螢は  
   窓の外の杉村<sup>に月のあたり</sup>にけれは 竹寿  
 246 逢坂の関過しよそ思ひ出る杉の木間をもる月を見て  
   寄卯花祝 有隣  
 247 精<sup>△</sup>けたる米のゆたかに見ゆる哉里毎に咲庭の卯の花

248 五月雨のふしの裾野にふり出て名乗箱ねの山郭公  
   時宗 全  
   西行上人 武行  
 249 身をさへに捨つるものを白かねの宝の猫も何にかはせん  
   平景政 龍種  
 250 うたすしてやまん物かは片目をはあたのいるやに貫ぬか<sup>れ</sup>るとも  
   俊寛 維足  
 251 終に身を<sup>は</sup>あはと消けりさつまかた島ねの浪の立も帰らて  
   為朝 広雅  
 252 肥の国のあその高ねに立煙高くも立し君か御名かな  
   千鳥 方盈  
 253 有明の月も入江の霜冴て妻とふ千とり声々になく  
   新樹妨月 竹弘  
 254 昼の間はめてし若はも宵／＼の月にはつらきくまと成けり  
   里郭公 竹寿  
 255 住にける己か山をやあきぬらん里に落来て啼時鳥  
   長祥  
 256 一声を聞せて過る時鳥幾たの里を鳴めくるらん  
   遥聞郭公 長祥  
 257 ね覚する枕さひしき夏のよに遙に聞ゆ山ほとゝきす  
   巖上<sup>（こ）</sup>莓 方盈  
 258 まくらたに通はぬ道と知れけり苔生しける谷の岩かと  
   卯花似雪  
 259 白雪を袖寒からす見ることは咲卯の花の垣ね也けり  
   草庵雨 貞通  
 260 浮雲の晴間もみえず此比は雨にこもれる草の戸の内  
   久明

261 みしめ縄なひく青葉のかけ深み吹風涼し神の庵前  
 川水流久  
 262 賀茂川の水の流もにこりなくすめる御代こそ久しかりけれ  
 山家松 宗貞  
 263 たまさかにくる人もなき山里は軒はの松を友となかめん  
 契不遇恋 有隣  
 264 初めよりつらきまゝにはつらからて更に恨をます契哉  
 雨中早苗 全  
 265 ふる雨にぬるゝ袂も寒からて今や取らん小田の若苗  
 名所早苗 竹寿  
 266 夜をこめて急き取すは山鉾の竹田の早苗ふし立やせん  
 267 幾筋に細谷川を引分てきひの山田の早苗取らし  
 雨夜思 有隣  
 268 夜もすから雨の雫のつく／＼と思へは思ふ事も有けり  
 寄卯花祝 全  
 269 里毎に咲卯花はゆたかにもしらけてつめる米かとそ見る  
 契不逢恋 全  
 270 かひもなき契り斗りになからへて恋しなさりし身をそ恨むる  
 271 なからふる命もあたの契にて恋しなぬ身そ今はくやしき  
 梅薫風 全  
 272 枕とるひまこそなけれ梅の風ぬる間は風にかほらさらなん  
 273 人もなきいつこ迄にかさそふらんあたらかほりを梅の下風  
 財 全  
 274 蔵の内につむはくつれとくちせぬは我身に入したからなりけり

275 宝とはすくなき物の名にこそ有けれ米を置て金も玉も銭は助けす  
 水上蛭 全  
 276 己かとし小川の水の一筋を道と定めて飛蛭かな  
 金 全  
 277 植まほしこかねの花のさきてこそ功も富もなるといふなれ  
 278 皆人の仰くこかねの光こそ月日に次て尊とかりけれ  
 279 散やすきこかねの花をいかにせんふるゝ我手は風ならねとも  
 樟葉三十六歌仙  
 左 頼屋御蒼生撰  
 280 日かけさす春の野沢の薄氷とくるかたより若なつむ也  
 沢若菜 鍋島備前守藤原朝臣 直條  
 281 今迄は法のともし火かゝけんと身をも忘れてつとめきにしを  
 述懷 黒髮山 潮音  
 282 落花 矢沢黙翁 沖菴  
 282 桜花とても散なはおもかけを人の心に残さすもかな  
 廬橘薫枕 勝光寺 竹隠  
 283 そことなく老の枕にかほりきぬ昔しのふの軒のたちはな  
 秋雨 百武善左エ門兼久入道 良印  
 284 日にそひて梢に秋やいそくらんけふも外山は雨にくれつゝ  
 古寺鐘 蓮生寺 梅江尼  
 285 長き世の夢もさめなん初せ山あかつきふかきかねのひゝきに  
 思往事 重松卯大夫菅原 道雄  
 286 いとけなきむかしをかけて思ふにもうき事知ぬ程そ恋しき  
 幽栖秋来 副島嘉膳 昭賢  
 287 八重葎しける門は道もなしにかに分てか秋のきつらん

祝

今泉六大夫藤原 千春

288 君か代は斧の柄くちし仙人の千度帰らん時もかはらし

忍恋

江口伊十貞真入道 是推

289 忍れと色にや出ん恋衣つゝむにあまる袖のなみたは

遊糸

岡本源右エ門貞永入道 維鳩

290 行はかつ遠さかりつゝ武蔵野の果なき空に遊ぶ糸かな

山花

鍋島撰津守直与入道藤原 雲叟

291 世をすつる身とな思ひそ山桜花ゆへ入しみよしのゝおく

温泉岳に登りける時

諫早兵庫室 愛子

292 雲とのみなかめし山もきて見れはかはらぬ人の栖なりけり

依花待春

鍋島山城藤原 直章

293 暮て行年の余波は惜けれと花をたよりに春そ待るゝ

田上月

真崎半左エ門 道定

294 夢人の伏見の里にかけふけて鳥羽田の面に月うつろふ

初春霞

古川久兵衛入道 不言

295 梓弓春きにけらしものゝふの八幡の峰に霞たなひく

仏狼密の軍船長崎の湊に來りし時長刀岩の陣にありて

羽室平之允 貞風

296 松かねに鎧の袖をかた敷て幾夜か見つる浪の上の月

詠史

古川与一 松根

297 うちぬ名を千代にとゝめてみよしのゝ若木に桜根に帰つゝ

右

寄笛恋

百武志摩守 賢兼

298 一ふしに思ひこめつる恋の音をよそにもらすな閨の笛竹

山本伝左衛門 常朝

関路花

宝珠菴 梁山

299 尋ね行末もわすれてくるゝ迄花にやすろふ足からの関

寄雲述懷

恩田 一信

300 我のみか空行雲もゆふへ／＼うきて思ひの有世なりけり

名所若菜

富本 竹徳

301 春日野はけふを待えて皆人に若なつめとや雪の消らん

羈中夢

永渕武兵衛 有武

302 ゆくもうし一夜伏見のかり枕けさは都の夢に別れて

謹

山領主馬平 利昌

303 ちからなく見ゆ物から吹風に露もこほさぬ朝かほの花

社頭郭公

堤主礼 範房

304 ゆふかけし松のしめ縄くり返しなくや八幡の山ほとゝきす

重く煩ひていまいと思ひける比

峰伴大夫 矩当

305 かき捨て身は消にしをうたかたのあはれ共みよ水くきのあと

怨恋

古賀五兵衛 常規

306 うき人を恋るなみたの袖の上にやとれる月のかけもうらめし

夏虫

野口十御左エ門 喬樹

307 葉かくれにとまるこてふは夕顔の花の数にも入にけるかな

月前神楽

鍋島大隅敬文入道 坦叟

308 御火白き庭に立舞袖の上に神代の俛の月そうつろふ

思往事

鍋島周防室 綏子

309 玉かつらくり返し見るよしもかな忍ふにあまる世々のむかしを

早春霞

鍋島主水茂延入道 一心

310 立そむる霞の衣うすはたの衣笠山に春はきにけり

寄虫述懷

盲人 要一

311 打なけく身は春の田の虫なれや千々にくたけて物を思へは

雪

南里十蔵源 元壽

- 312 野も山も雪ふりつみてちりもなき玉の都と世は成にけり  
寄河恋 中島利兵衛 利載
- 313 なみた川〇ふちともしつむ水上やつれなき人のこゝろ成らん  
詠史 南里伝作源 有隣
- 314 黒髪のみたれし道はなかりけり一度くしのとき分しより  
右之次編追而続出
- 郭公遍 御民
- 315 今はとて声もおします成ぬらし百千遍なく山ほとゝきす  
夕郭公 熙芳
- 316 橘のにはへる里の夕くれに名乗てすくる山ほとゝきす  
五月雨久 全
- 317 けふいく日かきくらしふる五月雨に人の心も晴やらぬ哉  
江五月雨 全
- 318 三島江や蘆の末はに水こえて舟さしわふる五月雨の比  
山家五月雨 全
- 319 五月雨に人は問来て谷水の音のみ増る山かけの庵  
谷水 全
- 320 流ては世に出るとも我ありと人になつけそ谷の下水  
子規末遍 全
- 321 さばかりや声惜むらん時鳥また聞人の数そすくなき  
雨中子規 全
- 322 雲とちて日をふる雨の淋しきになれもうしとや鳴子規  
夜待子規 全
- 323 忍ひても一声はなけ子規いをもねられすわれは待けり  
対月待子規 全
- 324 夏のよの月は霞もへたてねと子規ゆくものうかるかな

- 325 ほとゝきす待夜の空に思はすも傾く月のかけを見る哉  
夕待時鳥 竹弘
- 326 一声は忍ひねもらせ時鳥幾夕くれを待としりなは  
里早苗 貞通
- 327 くまもなき月をは三輪の里の子か暮てもいまた早苗取也  
急早苗 須賀雄
- 328 夕日さす水田の面に下立て植残さしと早苗取なり  
沢辺早苗 方盈
- 329 露さへもいまたかはかぬ沢の辺にけさも早苗をいそぎ取也  
雨中早苗 貞通
- 330 ふりつゝく雨にぬれても後れしと早苗植女かきほふ声／＼  
山田早苗 広雅
- 331 今をせに早苗取とて山彦の答へする迄調ひつれつゝ  
春山 竹弘
- 332 越行も心のとけし春の山つゝし山吹きさきはしつゝ  
山吹 広雅
- 333 行春のとまらぬ水にかけとめてしからみ懸る峰の山吹  
藤 孝詮
- 334 吹風によする浪とはみえなから折袖ぬれぬ藤の花かな  
春神祇 維足
- 335 引わたすしめの永きを心にてあかすも花の咲にほはなん  
春海 広雅
- 336 梓弓磯山かけにちる花の花の名を負ひひろふ見ゆ  
わらひ 方盈
- 337 朝ことにもゆるとすれと都人来てはかつ／＼手折るさわらひ  
春海 有隣
- 338 夕くれの哀や秋に増るらん雁かね霞む春の海つら

339 関路郭公 全  
 逢坂の関にとゝめぬ御代もうし一声鳴てゆく時鳥  
 橘 全  
 340 年をへは昔の香とや成なまし我袖ふるゝ庭のたちはな  
 聞時鳥 全  
 341 いつ迄か聞にあかれぬ時鳥きのふにかはるこゑもなけれど  
 夕待時鳥 全  
 342 夕くれを契るとなきに時鳥まつもあやしき我心かな  
 時鳥遍 全  
 343 ほとゝきす待時過て村雨の雲のあまねく鳴わたる也  
 名所時鳥 全  
 344 小夜更る淀の渡の時鳥舟よふこゑにこたへてそ啼  
 行路夕立 貞通  
 345 笠からん里はそなたに近けれとしはしも待ぬ夕立のあめ  
 江蘆 全  
 346 三島江の蘆の村たちしけゝれは出入舟もこき迷ふらん  
 旅宿雨 全  
 347 いとゝさへ旅ねの床のわひしきに今はた雨に哀催す  
 夕立晴 熙芳  
 348 夕立の名残の露の玉すたれかゝけて秋の心ちこそすれ  
 雨中待露 全  
 349 さひしくもふりくらしたる雨そゝきかゝる時にそ人とはなん  
 樵夫 全  
 350 柴人の通ひ馴てや岩ねふむ谷のかけちもくるしとはせぬ  
 鶏告曉 全  
 351 ね覺してまた夜深しと思ひしに曉つくるくたかけのこゑ  
 郭公 有隣

352 宵々に声はしたしく馴ぬれとしらすいつくの山時鳥  
 海夕立 全  
 353 ふく汐に見えまかふらし鯨よる平戸の海の夕立のあめ  
 野外旅宿 竹寿  
 354 古郷にかくとはしらしぬしもなき草の野中に結ふ枕を  
 五月雨久 全  
 355 天の川水上いかに深ければふりてつきせぬ五月雨のあめ  
 夜五月雨 広雅  
 356 今宵又ね覺てきけと五月雨の軒の雫の音は絶せず  
 市五月雨 貞通  
 357 五月雨のふるもいとはてあき人の何をうるまの市に立らん  
 五月雨晴 有隣  
 358 偽りと思ひなからも嬉しきは五月雨晴る夕くれの空  
 川五月雨 泰通  
 359 名にしおふ清滝川も日をふれは水濁り行五月雨のころ  
 山家 定常  
 360 世中に遠さかりたる山里はすみうきゆへにすみよかりけり  
 千鳥 全  
 361 霰ふるかしまの浦のあら浪にねられすとてや衛鳴らん  
 祝言 熙芳  
 362 市人の世渡るわさの多かるも治る御代の命とそ見る  
 五月雨晴 全  
 363 五月雨の晴行まゝに舟人はぬれしとまをやほさんとすらん  
 松辺納涼 有隣  
 364 松かけの此涼しさに我も又千年へぬへきこゝちする哉  
 365 時しらぬみとりの松の下かけは誠に夏のなかりける哉

五月雨

全

366 皆人の是事しらぬ心にも此五月雨をあかさらめやは

367 しつのおか干間もあらぬ五月雨の日をふるみのはくちんとすらん  
五月雨晴 全

368 あらはるゝふもとを見れば五月雨の雲は山より晴そめにけり  
帰雁 全

369 見初ては立うかるへしよしや今花さかぬ間にいそけ雁かね  
述懷 竹寿

370 世中にありとも人の知ぬ身を老は何とて尋ねきつらん

371 今しはしなからへてもと思ふ哉かはり行世を見まくほしさに  
桃会翁八十の賀に 全

372 千年川八十瀬の浪の玉の数かそふにつきぬよはひ成らん

373 八十へ<sup>て又行すゑの年／＼も</sup>に飽す聞らん山ほとゝきす  
尾上の小まつ 信武

374 高砂の尾上の小松いつしかも誰か植けん今は老たり  
翫月 貞通

375 空にのみ人の心は在明の月もてはやす秋の夜な／＼  
薄 喬安

376 絶間なきゆきゝの岡の花すゝき心多くも誰招くらん  
毎夜待郭公 方盈

377 月に待雨に待つゝ時鳥幾夜かきかて明し馴けん  
野辺霞 全

378 すみれつむ声はすれとも野へことに霞そ深く立隠しける  
別恋 御民

379 心のみ跡に残して帰る哉鳥か啼ねに催されつゝ  
なを卯花の 竹寿

380 時鳥聞こそあかねあすの夜も猶卯花の宿にきてなけ  
撫子 全

381 朝ことの目さましくさは春秋の花の中なる床夏の花  
蓮露 熙芳

382 墨染の夕涼しく吹風に池の蓮の露そこほるゝ  
蚊遣煙 竹寿

383 声たつる蚊を追んとてふすふれは煙に我そ先なかれける  
ほとゝきすさへ 有隣

384 待といへは時鳥さへつらき哉いさ試にねてや聞まし  
氷室 広雅

385 時分す嵐<sup>も</sup>さゆる松か崎むへそ氷の常盤なるらん  
蓮露 竹寿

386 蓮はのうてなに遊ぶ露の玉涼しき国の物とこそ見れ  
夏山 広雅

387 夕立の雲より上にあらはれていよ／＼高きこしの白山  
松蟬 熙芳

388 ときはなる松のよはひをうつ蟬の羨ましとやねには鳴らん  
猿 全

389 人しらぬみ山隠れの猿すらも飼は手馴し物にさりける

390 物ことに覚えなき身をさるといへと猿も教のむちにこそまへ  
夕顔 久明

391 待出る月と契や結ふらん暮日をいそく夕顔の花  
夕立急 全

392 夕立は一村雲を姿にて急く行衛を人に見すらん

う川

竹寿

393 もかみ川闇夜は数のかゝり火の上り下るやう舟成らん

夕顔

全

394 誰彼を己か時とや粧ひてほの見え初る夕顔の花

夏夕

全

395 終日も水田の草を取袖の濡てそ宿に帰る夕ぐれ

夏夜

全

396 独ねの手枕なから夢をさへ結びもあへず明る夏の夜

照射

全

397 哀也声をも立ぬ鹿のねの照射のかけによると思へは

夏月

全

398 秋にのみ何かきるへき夏の夜も涼き月をあかんものかは

照射

貞通

399 夏鹿のやすきふしとやなかるらんこゝにかしこにともしさす夜は

夏川

全

400 風吹て浪の立田の川水は音も流も涼しかりけり

納涼

有隣

401 しなかつの神もこゝにや遊ふらん松かけ清き水の川風

(佐賀県立図書館所蔵図 991/911.1(1) 45-155)

## ②『本教館詠草(二)』

(表紙)

安政二年六月

本教館詠草(二)

(見返し)

佐賀人々か詠歌集

安政二年卯六月ヨリ

雲峰

竹寿

1 鳩の海にかけ満あまる雲の峰都のふしを麓にはして

扇に書付ける

有隣

2 うらになしおもてにならて見たれ共扇にこもる風ぞ知れぬ

杉野屋の遣水の本にて

竹寿

3 引入し此流こそ暑をはわすれ水ともいふへかりけれ

山家泉

貞通

4 なつくと風と風の涼しき山里も昼間は結ふ庭の真清水

竹村

全

5 宵々の蚊遣の煙しけれとすゝけもやらぬ軒の村竹

水辺夏月

竹弘

6 結ふ手に取こゝちして涼しきは流れにやとる夏夜月

夏野

定常

7 出て見る夏野の草の涼しきは夕の露のをけは也けり

漁父

熙芳

8 釣の糸のほそに筋もてはかなくも命をつなくすまのあま

平相国

御民

9 平らけく安らけき世をいかなれは風ふく原に思ひかへけん

夏獣

方盈

10 谷川に通ふ跡こそみえにけれ鹿もあつさやしのきかぬらん  
露 竹寿

11 玉かとしてとれは消けり白露は只草のはに置いてこそ見め  
樹蔭夏月 全

12 若葉ふく風はなけれど木間よりもりて涼しき夏夜月  
江夏月 全

13 難波江の月すむ比は蘆つゝのみしかき夜こそうらみ成けれ  
田夏月 全

14 限りなき稲葉の露の玉毎に光りをそふる月の涼しさ  
狸 全

15 祝子もつかへまつらぬ古宮にならすつゝみや狸成らん  
七夕 竹寿

16 てりつゝき水かれぬれは天の川渡るに安き今宵成らん  
関山三五月 有隣

17 まとか成月見て行は逢坂の関の岩角かとも覺えす  
清野月

18 所からすかのゝ菅の長きねの永き夜あかて月も灯らし  
九月十八日通題

19 みやまには今や千しをに染つらん庭の楓は色つきけり  
庭紅葉 竹寿

20 染尽す色こそうかれけふよりは散や初なん庭の紅葉  
有隣

21 野らとなる庭の籬の蔦かつら紅葉してこそあらわれにけれ  
維足 竹弘

22 ひともの庭の紅葉におのつから秋の山路さまそこもれる  
方盈

23 紅葉はの散りこふころは庭の面の石もよそひて錦着にけり  
吉胤

24 わかやとの庭の紅葉に千しを<sup>立田の山を</sup>なるおもひこそやれ  
貞通

25 露霜をわきていとふかことはよりまつ色そむる庭の楓は  
秋浦 竹寿

26 船さへも霧にかくれて何にかはこゝろをやらん浦の夕暮  
暮秋山 有隣

27 暮て行夜の袖かし山なれや時雨の雲のかゝり初つる  
秋山家 維足

28 かねてよりおもひつれとも淋しさのやるかたもなき秋の山里  
山家暮秋 竹弘

29 紅葉はもかつ／＼散て山郷の秋の暮こそさひしかりけれ  
暮秋月 同

30 宵／＼に月のかたふく影見ても暮行秋のをしまるゝ哉  
田家暮秋 吉胤

31 もりすてしを<sup>小</sup>田のかり庵かたむきて夕淋しき秋風そ吹  
秋動物 方盈

32 明行は山にそかへる宵の間は野へに聞へし棹鹿の声  
椎 貞通

33 しろしめす国治まりてをちたるをひろわぬ世にもひろふ椎哉  
秋雨 全

34 露時雨ふるき軒はのいと水のいとゝ淋しき秋のゆふくれ  
秋霜 全

35 朝戸出の庭そ小鳥の跡つくは秋より霜の降初にけん  
水辺菊 維足

36 駒とめてこのかやいさや水飼ん菊のかけゆく野ちの玉川

竹為友

全

37 生初るきりの竹よ友にせん世のうきふしはならはすもかな

岡紅葉

貞通

38 秋風に夕霧はれてあらはるも見ゆるは岡の紅葉也けり

夜鶴

貞通

39 哀にも聞ゆるものは鳥羽玉の夜深くわたる鶴の一声

井紅葉

有隣

40 山の井の水浅けれと紅葉ゝのしつむは深き色に見えけり

山家竹

全

41 山家の竹はいかなるふしならん嬉しきふしもうきふしもなく

招宿紅葉

竹弘

42 紅葉ゝの色こきかけに招ゐして都のつとの言葉にせん

菊花逢久

熙芳

43 限ありて秋くるゝとも白きくはうつろふへくも見えぬ色かな

遠山紅葉

宗貞

44 紅葉にや今そめつらん山とふくたつうす霧も色に匂えり

九月廿八日兼題

九月尽

定雄

45 おもひきやいとひし秋の悲しさを美しもあかておしまれんとは

九月尽

46 うき秋の袖の涙やあすよりは時雨のあめとふらんとすらん

全

竹弘

47 けふまでとおもへはいとゝ袖の露置こそわれ秋のゆふ暮

全

方盈

48 我園は菊はなかはも咲かぬまに秋ははてとも成にけらしな

全

豪濬

49 うきのみまきれくらしして秋もはやけふに貫なる入相のかね

全

貞通

50 何かたをさして行とはしらねとも秋のかた見に露を残せり

全

熙芳

51 ものことにたかひのみ行世中にいつわりなくも暮るゝ秋哉

全

有隣

52 うき秋もけふを限りのゆふへそときけよや袖の濡れ増るらん

全

竹寿

53 あきといふ長月なるもつきにけりみそかの日さへ入相のかね

全

久明

54 けふまでを秋のかきりと鳴虫もよりはりはてたる夕暮の声

当座下同

菊露

豪しゆん

55 置露もいろ／＼にこそ匂ひけれ植ましえたる菊の籬は

落葉増風

有隣

56 ふけはちり吹ねはしはしととまるも風に木葉の身やまかすらん

鐘声送秋

貞通

57 初瀬山暮行秋の夕風にひゝきを送る入相のかね

久恋

方盈

58 逢すして年月ふれと面影のなとて身にそふ思ひなるらん

初冬

熙芳

59 いつの間に冬やたつたの川霧もけふは時雨とふりかはりけん

初冬川

定雄

60 おし鳥の浮寝もさにそさむからめ立田の川の今朝の初霜

川水流久

竹寿

61 水垣の久しき世よりいすゝ川みつと共にそ名に流れける

社頭紅葉

同

62 稻荷山杉の木間の蔦紅葉あけの鳥井も色そへにけり

山家初冬

竹弘

63 山里は軒端の松に風のおとの時雨そめてそ冬は来ける

霧

宗貞

64 伊勢の海浮きり深く立こめて蜚の小舟や漕迷ふらん

山家松

熙芳

65 山住はうらやすけなり庭の面の松の落葉を薪にはして

旅夕

竹弘

66 野辺にいさ草の枕やかりよらん宿り定めぬ旅の夕暮

旅夢

定雄

67 草枕旅の長路を行暮てかりねのゆめに妹を見しかな

霞

有隣

68 猛きつめ尖ききはも有なから波ゆへとらは捕られつる哉

寄松祝

貞通

69 十かへりの花や幾度咲ぬらん神の植つる住吉の松

田家初冬

維足

70 もすの鳴田つらの里の朝戸出におく霜見えて冬は来にけり

71 かり積しおく手<sup>中の</sup>稲もとりあけて田つら淋しき冬は来にけり

島

72 人もなきひとつ小島は飛鳥の翅やすむる所なるらむ

十月三日兼題

初冬雲

竹寿

73 山を出る雲のあしなみはしる也ふゆ来し空の風の寒に

樵夫帰月

同

74 月にうたふ声のふもとに聞ゆるは樵や山を帰る成らん

市

同

75 都なる市の立るはしるしらす西に東に行合ひの袖

初冬雲

定雄

76 空寒みたゝよふくもは山のみの時雨の雨に成初にけり

初冬時雨

同

77 紅葉ははちりて淋しき我宿に時雨と共に冬は来にけり

初冬雲

熙芳

78 冬の来る朝けの空の浮雲ややかて時雨の雨となるらん

月前時雨

同

79 晴る／＼と見れは時雨て月さへも影をさためぬ冬の空かな

田家初冬

維足

80 かり積しおく手の稲もとりあけて田つら淋しき冬は来にけり

島

同

81 人もなきひとつ小島は飛とりの翅やすむる処なるらん

初冬雲

久明

82 冬のくる朝けの風に山のみの時雨の雲そ立初にける

初冬雲

貞通

83 降かとも晴るゝかとしもさたまらて冬立空の雲そまよへる

嵐吹寒草

全

84 宵の間の風に今朝の霜さへていとゝかれふす庭の八千種

初冬雲

有隣

85 山姫もくもの衣をかけてけり肌寒くなる冬そこぬらし

十月八日兼題

有隣

86 けさみれはよはの落葉の上にのみほのかに置る庭初霜

初霜

有隣

87 朝ぬする人しるゝめや蓬生の葉末はつかにむすふ初霜

全

維足

88 手枕のよはの寒さも草の寒にあらはれ初る今朝の初しも

全

竹弘

- 89 散しける落葉のみかはこと草も寒き花なる今朝の初霜 全 貞通  
行路しくれ 維足
- 90 行向も降らんものをみな人の時雨の雨に道いそくなり 貞通  
名所しくれ
- 91 むかひ見しかつらき山もきのふけふ時雨やすらんかゝる浮雲 竹弘  
浦しくれ
- 92 浦つたひめくる時雨に幾度かゐさめしつらん須磨の関守 遠蔭  
山家時雨
- 93 打むかふみねよりおろす夕日かけ<sup>くもる</sup>やかても降時雨かな 定雄  
渡しくれ
- 94 おきつかせあかしのわたり渡る日は海路よりこそ時雨<sup>き</sup>初<sup>は</sup>けれ 有隣  
田家時雨
- 95 かりたてし小田のかり尾は人もなし時雨の雨のするに任せて 須賀雄  
朝霜
- 96 風さえて夜たゝつもれる紅葉にはたれふり置今朝の霜哉 全  
不二
- 97 たくひなき不二の高山うへしこそ神とも神とたゝへきにけれ 竹寿  
朝時雨
- 98 朝日子のかけにさはらす村しくれ北山風そさそひきにける 全  
初霜
- 99 冬来ぬと夜の間の露の氷てや草のは白きけさの初霜 竹寿  
残紅葉
- 100 いなり山風に梢はちり果て杉の木間に残るもみち葉 維足  
全
- 101 すへ／＼に残るをみれば秋更て遅く満にし紅葉也けり 有隣  
全

- 102 秋暮し露に時雨のゆつられて染るもみちや散残るらん 全 貞通  
全
- 103 夙も庭の梢をふきわけて秋をしはしとのこす紅葉 竹弘  
全
- 104 冬までも散らぬ紅葉は夙の心有りては吹のこしけむ 竹寿  
霜
- 105 月入りて猶も光の残るかとかまふ斗の霜の色かな 有隣  
雨中落葉
- 106 ふりくらす時雨のあめに打しめりちる木のわさへ音せさりけり 貞通  
千鳥
- 107 宵々にいかに聞らん風さへて千鳥しは鳴浦の蜚人 全  
灯
- 108 いはしめて独すむ身は夜な／＼の灯を只友とこそ見れ 竹弘  
行路雪
- 109 休はんかたもなければ降雪の袖打はらふ野路の旅人 竹寿  
淀
- 110 淀川のとむまもなくさす舟に上り下りの人そ絶せぬ 久明  
田家時雨
- 111 八束穂の足り穂の稲もとりあけて田つらさひしくふるしくれ哉 全  
冬雨
- 112 なかめよき紅葉のいろも冬のきて時雨のあめに散はてにけり 全  
閑居
- 113 世を捨て我すみなれし宿はたゝ軒はの風の音のみそする 貞行  
夙
- 114 山さとのまきの板戸のひまさへて夢吹さますこからしのかせ 厚道  
残菊
- 115 霜置てうつろふ菊は老か身に同しゆかりの色と社見れ

- 116 霜結ふ垣ねに秋のかたみとてうつろひ残る白きくの花 竹寿  
豪濬
- 117 昨日迄老せぬ色に見し物を霜をいたゝく白菊の花 貞通
- 118 宵々の霜をかこひしかひ有て枯なて残る庭の白きく 厚道  
寒草霜
- 119 秋に見し花の千くさの色々も霜枯わたる野への哀さ 全  
寒松
- 120 霜さえて花も紅葉も冬枯の中に緑の松そさひしき 竹寿  
松下落葉
- 121 山風の己かやとりの松かけによその木葉もさそひきにけり 全  
風
- 122 いかにせん置霜さやく榎の戸のすきまの風にねられさるよを 貞通  
初雪
- 123 足引の山には早く見つれ共けさこそ己か庭の初雪 全  
江天暮雪
- 124 あま小舟こく手やいかに寒からん難波入江の雪の夕暮 豪濬  
霰
- 125 真木の立荒山中に栖鷺も飛立斗りふるあられ哉 維足  
残菊
- 126 冬きても枯ぬものゆへきくの花千世の種とは人のいふらん 全  
冬雨
- 127 やかてしもみそれと成んあらしを身に知斗り降しくれかな 定雄  
残菊
- 128 露霜にぬれても色のうつろはぬ菊こそ秋のかたみ成けれ 全  
寒蘆

- 129 霜枯て浦さひしくも見ゆる哉難波入江の蘆の一むら 熙芳  
残菊
- 130 冬の深く成ても匂へ菊の花秋のかたみと人も見るゝに 全  
竹間霜
- 131 有明の月の光りを竹のはにさなから残す霜の色哉 広雅  
残菊
- 132 心有て霜や置らん白きくのうつろふからに色のまされる 全  
橋霜
- 133 川せみの翅はらひし跡みえて朝霜寒き前のいたはし 全  
島雪
- 134 かきくらしふりつむ雪をいたゝきて重けに見ゆる笠ぬひの島 竹弘  
残菊
- 135 行秋を庭の色にゆひこめて冬迄きくの花を見る哉 全  
寄道祝
- 136 いやましに栄へゝて万代も絶る事なきことのはの道 兼群  
残菊
- 137 己れのみ独残りて冬かれの笹にたてる白きくの花 全  
山家霰
- 138 山里は昼さへ明ぬまきの戸に音すさましく霰ふる也 有隣  
残菊
- 139 下葉よりかつ枯なからいつ迄か霜につれなき白きくの花 全  
夕落葉
- 140 木葉さへ夕の霜をいとひてや暮日をまたてねに帰るらん 竹弘  
田家夕
- 141 ゆふくれはゆきかふ人も稀にして田つらの庵そさひしかりける 維足  
祝
- 142 鶴亀の齢あはせてかそふとも君かしの世や尽せさるらん

143 霜風に庭の木のはゝ散はてゝ独咲出るしらきくの花 残菊 貞幹  
 雪中鳥 全  
 144 村鳥の啼尋る声寒しふる雪しけき夕くれのそら 虎 全  
 145 霜寒み野に臥虎も吠る夜は簞さはき風やたつらん 山家雪 全  
 146 峰々も皆白妙につむ雪にとふ人絶し山里のくれ 楠正成 全  
 147 湊川尽せぬ浪に赤坂のあかき心の名を流しけり 有隣  
 148 圀つる雲をもれすは赤坂のあかき心もかひやなからん 氷停水声 厚道  
 149 夜を寒み谷の流れの氷れはやけさは簞の音絶にけり 竹寿  
 150 遣水の流の音の聞えぬは夜はの氷やとちし成らん 浦時雨 全  
 151 さらてしもかはかぬあまか衣手に浦の時雨の間なくふるらん 山旅 全  
 152 岩ねふむ山路を遠み行暮て苔のむしろに一夜ねにけり 閑庭落葉 厚道  
 153 ふり埋む庭の落葉をふみ分てくる人もなき庵のさひしさ 風破旅夢 全  
 154 古郷の夢を嵐の吹絶て見果ぬあとの名残をそ思ふ 暁千鳥 有隣  
 155 浦千鳥暁深くみつ汐に見はてぬ夢やおしと鳴らん 氷留水声 貞通

156 谷川のはやき流れも氷らし岩ふれ水の音たにもせず 落葉 全  
 157 むら鳥の啼にさわく羽風にも散はならひと落る紅葉は 氷留水声 維足  
 158 これをのみ友とおもひし山住の水も氷りて音信そなき 寒樹交松 全  
 159 花の時おもひいつれは松かけに枯て淋しくみねの桜木 氷留水声 竹弘  
 160 松かせに音をゆつりて山川の水はこほりに音絶にけり 寒流帶月 全  
 161 うきしつみ浪まに影のきらめきてやとり兼たる月の寒けさ 田家路 全  
 162 君か代は民のかまともにきわひて田つらの道も往来絶せず 寒草霜 久明  
 163 朽残る野への薄に霜さえて冬は人をもまねかさりけり 橋上霜 全  
 164 橋の上のよの間の霜の其俣に昼迄きえぬ松の下かけ 冬恋 全  
 165 我恋は谷の氷に結ふれいつ打とけて人におほへき 氷留水声 全  
 166 松風の声斗りして谷川の水は氷に音せさりけり 松風の声 忠倫  
 167 冬寒み氷結ひて昨日今日谷の縁も音絶にけり 冬寒み氷 貞行  
 168 夜を寒み谷の縁や氷るらむ岩打水の音絶に絶 夜を寒み 須賀雄  
 169 谷河の縁の氷とちはてゝひゝくは松の嵐也けり 谷河の縁 須賀雄

- 170 風寒み笥の水の氷るよはいとゝうつけき山の下庵 須賀守  
松色浮水 貞行
- 171 ちきりなる千歳の松も色そへて水の緑に影写し梟 全
- 172 散つもる落葉に今は逢坂の関の岩門踏もなつます 全  
閑居水声 忠倫
- 173 人とはぬ山下かけの隠家は水の音こそ友には有けれ 全  
寒草霜
- 174 朝毎に置そふ霜の深ければのへの薄も枯果に梟 須賀雄  
河落葉
- 175 もみち葉のたえす濁るゝ立田河みねの嵐の止時や無 全  
夜帰恋
- 176 小夜深く忍ひてかへる袖上にしるくも宿る月の影哉 貞幹  
氷留水声
- 177 谷河の水も氷や結ふらむ岩門そゝく声幽也 全  
暁鳥
- 178 故郷の夢たに結ふひまもなく暁告る小鳥の声 全  
十月廿八日
- 179 冬こもる始なりとや風さそふ木葉に埋む谷の下庵 豪濬  
落葉深 有隣
- 180 払はねとあくたもちりも無りけり庭の落はのけさは埋みて 貞通
- 181 払はねはつもるか上につもりけり風に木葉のふるの山道 竹寿
- 182 木葉しくそこに流の音せすは谷の小川も道とこそ見め

- 183 うつし見る鏡にとかはなきものを老にしかけを恨みつる哉 全  
鏡 櫛
- 184 待人は夢にもみえずあかつきのくしのはかなく夜は明にけり 豪濬  
独聞時雨
- 185 独ねの夢をいつこにさそひてか時雨のあめのめくり行らん 兼群  
落葉深
- 186 払ひ行庭に嵐の音さえて跡より又も埋むもみち葉 有隣  
葉落水紅
- 187 もみちはの流るゝ見れば立田川水も液の染る也けり 竹寿  
月前千鳥
- 188 汐さいに干潟の千鳥むれ立て月に一筋くさをなしけり 維足  
落は深
- 189 せにわけし流も見えず成にけり庭の落はのつもるまに／＼ 竹寿  
浪
- 190 むつましくいかに契れは吹風さそへる俚に浪の立らん 貞通  
ね覚聞千鳥
- 191 小夜深くね覚て聞は浦千とりうら淋しくも鳴渡る也 全  
野
- 192 いつかたに心さためて野を分ん千種の花や松虫のこゑ 厚道  
関
- 193 いたつらにあたら月日を過し来て未だ越見ぬ逢坂関 全  
山家霰
- 194 寂しさをなくさめかほに山里の板の底に霰音なふ 全  
落葉深
- 195 山里の往来の道もまどふ迄落はか上に落はしてけり 熙芳  
落葉深

- 196 紅葉の時雨とふるの山里は雪よりさきに道そ絶ぬる
- 197 我宿は木葉埋ておのつからふかぬ軒端も露洩らぬまで  
月照落葉 全
- 198 散積る庭の落葉の霜の上にかさねて氷る月影かな  
山中滝 全
- 199 鳴神のとはにとゝろておとす也空より落る御熊野の滝  
荒屋落葉 全
- 200 あれはてし槇の板屋に音たてゝ洩らぬ時雨や木葉なるらん  
名所千鳥 全
- 201 おもふことありその浦にうらふれて友なし千鳥夜をふかくなく  
落葉如雨 維足
- 202 村時雨晴てし後にふるものは軒の木葉の雨にそ有ける  
海辺朝 全
- 203 夜をこめて漕や出けむ朝ほらけ浪間に浮ふ鰻釣舟  
老見寒月 竹弘
- 204 老か身の白髪に霜の降そひていとゝさむけく照月夜哉  
川水久澄 全
- 205 千早振神御代より隅田川澄し流れは濁るともなし  
落葉深 全
- 206 風騒く庭の梢は散はてゝ積る紅葉そ山をなしけり  
月前水鳥 兼群
- 207 水鳥の騒く羽風のさゝ浪も月の光<sub>も</sub>にさへ増るらむ  
磯 全
- 208 白浪廻与勢而碎流荒磯盤松吹風乃音茂聞須  
山家霰 竹寿
- 209 里人は時雨の雲と見つるらし山はあられのふりけるものを

- 210 あしろもるかゝりはいつか消はてゝほの／＼しらむ水のみな上  
網代 方盈
- 211 年月をこの山さとにすきの木のひととき二木を我友にして  
山家杉 全
- 212 これやこのしるもしらぬも辰市にあさより何をうりさはくらん  
市 泰通
- 213 沖つ風吹にまかせて蘆の屋にふるや霰のいや増るらん  
海辺霰 全
- 214 いく度かかきはらへとも庭面に木々の落葉は積りこそすれ  
落葉深 定雄
- 215 よもすからおくしもさえて片岡の椎の下葉や色替るらん  
椎柴 同
- 216 ふるさとに通ふ夢路もたゆるまで音すさましきすまの浦風  
泊船 同
- 217 行通ふ跡たに見へぬ山路は落る木の葉に埋もれにけり  
落葉深 貞幹
- 218 かゝけてもおくらき夜半の灯の心ほそさを誰に語らん  
旅宿灯 全
- 219 かる萱の乱つる世のあととへは稲葉にさわく秋風の音  
古戦場 貞幹
- 220 散つもる木々の落葉の深ければ往来の道も見分さりけり  
落葉深 忠倫
- 221 この比のあらしにつれて紅葉のちりて龍田の川辺そむらん  
落葉水江 同
- 222 夜もすから降ともしらてけさ見れはあかし<sub>の</sub>屋<sub>に</sub>積る白雪  
積雪 同
- 深夜霰 同

223 鳥のねに寝さめてきけは枕への軒に音してふるあられ哉  
十一月八日

川千鳥

厚道

224 さ夜深きさほの川原の川千とり友よひかはす声の寒けさ

竹寿

225 寢覚する枕に近き川千とり夜深き程を声にこそしれ

冬雁

貞通

226 後れ来て霜のふる野にさひしくも友なき雁の声の哀さ

雪

竹寿

227 昨日迄時雨し雲の風さえてけさは雪とそふりかはりける

海辺眺望

全

228 和田の原浪しつかなる朝なきに見えてくまなき沖の八十島

雪埋竹

厚道

229 けさみれは緑の色も埋れて雪に折ふす園の呉竹

山家

全

230 人問ぬみ山のおくは花鳥の色音に聞の時をこそしれ

雪中鳥

維足

231 おりたゝむ道もなき迄降雪に竹のはかくれ雀なく也

霰

竹弘

232 槇の屋にさはく嵐に音そへて霰そ夢を打覚しける

雪埋竹

竹寿

233 軒に啼雀や埒尋ぬらん窓のくれ竹雪に枝折て

十一月十三日

雪中鳥

全

234 かきくらし雪のふる日は梢なる鳶も白ふの鷹と見ゆらん

松上雪

方盈

235 ふる雪に松の梢はうつもれて今朝はあらしの音たにもなし

紅葉忍恋

維足

236 恋ころもかさねもあへす諸共にいつまでつゝむ袖のなみたそ

老人

竹弘

237 年ことにかしらの雪そつもりそふ心は本のこゝろなれとも

祝

貞通

238 治れる御代のしるしとしられけり朝ゆふなひく四方の煙は

十一月廿二日

水鳥

竹寿

239 ふりつみて水はいつくか白雪の内に啼也をし鳥の声

松上雪

全

240 住吉の小松も雪いたゝけは幾世ふるとか人の見るらん

241 ときはなるみとりの松も夫とたに見分ぬ斗りつもる白雪

月前千鳥

有隣

242 有明の月かけ白き霜の色に声迄さえて千鳥鳴也

水鳥

竹弘

243 寒さをは知すかほにも池水の氷の上に眠るをしかも

埋火

全

244 埋火に炭さしそへて向ふ夜は冬の寒さもよそに成けり

水鳥

維足

245 厚衾重ねてたにも寒きよに声寒からぬ池の水鳥

思恋

全

246 中／＼に渡り初すは思ひ川思ひにうつむ身とはならしを

水鳥

貞通

247 宵の間に声せぬをしの声するは浮ねの床や氷成らん

有隣

有隣

248 いか斗り毛衣あつく重ぬらん寒さを知す遊ぶ水鳥

互 中忍恋

花守

249 重ねてそねなまし物を泪のみつゝむかたみの袖や朽なん

老人

全

250 世のうさの聞えぬ程に耳うとく成てそ老のうら安けなる

商山四皓

有隣

251 独りして百とせつゝを定めけり四の翁は世の柱にて

水鳥

熙芳

252 朝日さす岸ねに眠る水鳥のつはさの氷今やとくらん

水鳥

花守

253 さ夜風のむな毛吹まく寒をも知らてや眠る池のをしかも

寄雲恋

貞通

254 浮雲は朝夕風の払へ共ふさかるむねはいつか晴なん

祝

方盈

255 治りて久しく成ぬ君か代は八千代の末もかくそ有へき

水鳥

定雄

256 冬のよの寒き浮ねや忘るらんつかひ離れぬ池のをし鳥

社頭祝

全

257 瑞かきに引しめ縄の絶せぬや君か八千代の守り成らん

炭竈

有隣

258 世の人の身をあたらむる炭やきはつもれる雪の中にこそすめ<sup>みけり</sup>

十一月廿八日

霽

竹寿

259 さえ増る嵐のかせにさそはれてしくれと共にみそれふるなり

260 浮雲の山をめぐりてきた風のとはけしくもみそれふるなり

霽

貞通

261 雪になるしるしを見せてきのふしもけふもみそれのふるの山里

厚道

262 冬草の枯葉の上に音たてゝふれはみそれはおほえさりけり

朝埋火

維足

263 更る夜の寒さに堪すさしそへし炭やけさまで残る埋火

鷹狩

全

264 よそめにも猛くそみゆる梓弓矢田のゝ雪にきはふ鷹人

遠山雪

御民

265 朝日子の登るまに／＼白ふ也遠山松につもるしらゆき

薄氷

貞通

266 朝日さす浅水沼の薄氷かつみるうちにはや解にけり

冬月

厚道

267 空の海にこほるはかりの冬の夜は月のみ舟もこきやわふらむ

暁雪

全

268 しらむかと見つるは雪の色にして猶夜を残すあかつきの空

霽

竹弘

269 ふる雪を雨とひとつにこきませて霽になすや嵐なるらむ

竹風如雨

須賀雄

270 足引の山下おろしさえ／＼と小雨ましりに雪そ降くる

竹風如雨

須賀雄

271 打つけに小雨の音と聞つるは園ふの竹のそよく也鳧

筆

全

272 のほすへき言の葉竹のかす／＼を筆の返に書尽してむ

樵路雪

忠倫

273 柴人のしはとる山の往かひも絶るはかりに積る白雪

遊女

忠倫

274 なよ竹のなけかぬ方やなかるらむよこと／＼の風に任せむ

霽

忠倫

275 奥山の雪はかはかりつもるらむ吾住里に霰ふらるは

貞行

276 風さえて暮行まゝに呉竹の伏見の里に霰降也

早梅

貞行

277 春もやゝ近く来らむ我宿の南面は梅咲に覺

述懷

貞行

278 しはしたに浮世はなれて隠れなは老の心の安けかるらむ

松知春

貞行

279 松の葉はいつも春成色なれと春を知てや緑そふらむ

霽

宗貞

280 今朝見れば高根に積るしら雪やふもとにふりしみそれなるらん

閑居恋

全

281 うき世をはさか野のおくにのかれても恋てふ物はわすれさりけり

原雪

全

282 かれのこる千草も雪にうつもれて隈なくしろき武蔵野の原

冬恋

竹弘

283 うちとけてあわんと斗思ひつゝ積る雪をもいとほてそとふ

磯松

有隣

284 岩かねに千代を契りて磯の松さそふ浪にはつれなかりけり

古寺雪

竹寿

285 古寺のいらか破しも白雪の花の老と成にけるかな

286 入相のかねの響に古寺の軒はの雪も花と散らん

庭松

全

287 庭の面に小松をうへて十返りの花を見ん社樂しかりけれ

288 十返りの小松を庭にうへ置て榮そ知き万代の宿

十二月三日

網代

竹寿

289 篝火の消ぬ光りに知れけり網代の床をもり明す夜は

山家嵐

全

290 山さとの夜はの嵐の寒ければ破れし壁のぬるひまそなき

滝氷

全

291 やま姫の引はしさらす滝のいとは夜の氷や結ふ成らん

夜終

維足

292 ふく風の葉分にもるゝ炉火は誰か住らんだかむらのおく

網代

竹弘

293 冴夜もいとふへきかは大君の御贄の為にあしろ守身は

山月照雪

全

294 しろたへにふり積峰の雪の上に光をそへてて月夜かな

旅行

全

295 草枕岩かね枕たのむ夜の旅の哀をたれかしるらん

橋霜

厚道

296 朝またきまた跡つけぬ板はしの霜のしろさは見るも寒けし

寄浦祝

全

297 ここのはもさかえそふらし住吉の浦の松風しつかなる世は

網代

貞通

298 ひるまさへ氷てさゆる川の瀬に夜やあかすらん網代守らは

寒夜月

全

299 花咲し草も枯野となりはてゝ霜にさへたる月のさひしさ

海辺雪

有隣

300 浪の色とひとつにしろく雪ふれは海にそたてる浦の松はら

松雪

常雄

301 立かへり又もきてみん積雪の色おもしろきわかのうら松

302 聞霰 熙芳  
 閨の戸にさはく霰の音きけは夜すから夢も結はれぬ哉  
 網代 貞幹  
 303 宇治川の瀬々の網代におく霜の寒さ弥増暁の空 全  
 秋柳 全  
 304 春風に糸くり出す青柳も今朝おく霜に影まはら也 全  
 神楽 全  
 305 千早振神も岩戸をあけて見んふる鐘の音も澄渡也 全  
 夕烟 全  
 306 夕風にあし火の烟たなひくはすまの浦わに塩やたくらん  
 十二月八日  
 山雪 竹寿  
 307 見馴へるみねも尾上も雪積てともに埋るゝ檜原慎原 定雄  
 全 宗貞  
 308 おしなへて雪より外の色もなししろきや不二の姿なるらん 貞通  
 全 貞通  
 309 常盤山松のみとりもわかぬまで高ねは雪に埋もれにけり 貞通  
 全 貞通  
 310 鳥の音も松のありしも絶果て山しつかなる雪のあさあけ 貞通  
 全 貞通  
 311 夕はへの花をめてつる色よりもよし野の山の雪のあけほの 貞通  
 全 貞通  
 312 白妙に雪降りしけは見なれつる軒の外山もおもかわりせり 貞通  
 全 貞通  
 313 里遠き深山のおくにつむ雪消るまもなくふりかさねけり 貞通  
 関雪 有隣  
 314 ゆるしをく君か御代ともしら雪や戸さしこむらんあふ坂の関

315 海辺雪 竹寿  
 あかねさし出る日かけに雪つもる沖の小島の数もみえけり  
 野 全  
 316 人里をへたてゝ遠き野中にも沢水のみやひとりすむらん 有隣  
 野 有隣  
 317 にけ水のにけてはてのすみ田川こや武蔵野のかきりなるらん 竹弘  
 早梅 竹弘  
 318 うくひすの声さへあらは梓弓春咲梅におとらましやは 定雄  
 関雪 定雄  
 319 うまやちの鐘の音さえてきこゆなり雪よりしらむ大坂のせき 熙  
 炬火 熙  
 320 埋火にむかへは春のこゝちして炭の桜もはにゝほひけり 忠倫  
 暁千鳥 忠倫  
 321 山の端に暁月のかけ落て明行空にちとりなくなり 宗貞  
 名所雪 宗貞  
 322 めつらしとたれかみきらん玉くしけ箱根の山につもるしら雪 貞通  
 山居早梅 貞通  
 323 山住の窓の南にほえるは春まちなねし梅にそありける 貞幹  
 寄橘祝 貞幹  
 324 君か代の千代にならひて常盤なる緑かわらぬ庭の橘 貞通  
 安政三年正月十三日初会 貞通  
 梅有喜色 竹寿  
 325 嬉しとや多みひらけたる門の梅けふはあまたの人に問れて 定雄  
 326 君か代の八千代の春の初めして梅もよろこぶ色に咲けり 貞通  
 327 待かねし春を待えて梅の花ほゝ多む色に咲初にけり

熙

328 君か代の春をよろこぶ色に出て軒はの梅の咲初めけり

竹弘

329 吹風もさはかぬ春ののときさにゑみひらけたる軒の梅かえ

厚道

330 よろこほぶ色こそ見ゆれあら玉の春を迎ふる梅の初花

兼群

331 君か代の春を迎てうらゝかにゑみ開きたる庭の梅かえ

維足

332 長閑なる春を待えてよろこひの色みえにけり梅の初花

宗貞

333 かに匂ふ梅もうれしと思ふらん枝を鳴さぬ御代の春風

有隣

334 幸のくへき春なり梅の花よろこぶ色にかねて知しも

社頭早春

貞通

335 年は早あけの玉かきへたつれと門外もいまた寒き春風

早春霞

厚道

336 春きにし命を峰の雪消て霞初たる空ののときさ

早春鶯

有隣

337 鶯の鳴ね永きにさそはれて日ものとかにや成んとすらん

早春雪

維足

338 春来ても猶白雪のふるさとは今いく日有て長閑かるらん

早春松

重遠

339 ふりつみし雪をこほしてみとりそふ色を見せたる春の松かえ

早春氷

美啓

340 み島江にとちし氷もきのふけふとくるかつ／＼春は来にけり

早春衣

定雄

341 春くれはあかつき衣ぬきすてゝ賤か袂もあらたまりけり

早春柳

兼群

342 むすほれし氷吹とく春風に柳の糸もなひき初けり

早春風

竹寿

343 窓の戸をあくれは早く春めきて音するとなき風ののときさ

早春月

宗貞

344 春のくる命を空に三日月の月のかつらも霞初けり

山家早春

竹弘

345 山里の松の嵐もたゆむなりけふより春の命覚えて

早春祝

熙

346 武士の弓矢も今はうなる子か春のすさひと成し御代哉

正月廿三日

山家鶯

維足

347 鶯のたかね早くも聞初ぬこや山住のかひには有らん

暁鶯

厚道

348 明わたる空をも待は鶯のよをこめて鳴声の長閑さ

初聞鶯

美啓

349 鶯の初ねを聞は我さへも春の心になり初にけり

夕暮

有隣

350 入日かけさすかに春の心とていそかしけなき鶯の声

正月廿八日

出谷鶯

竹寿

351 谷の戸を今朝出初てうつるなる梢も高き鶯の声

美啓

352 のとけしと里に出ても谷の戸にこゝろ残して鶯やなく

維足

353 都さへまた霞まぬをいかにして春と知けん鶯のこゑ

354 世の人のうとまぬうちと梅の花憎まれながら散やしつらん  
 落梅 全  
 折梅 竹寿  
 355 森の内にかくれし梅もおのかゝに有と名のりて折れける哉  
 有隣  
 356 谷を出て今朝そ都に鶯のひなひぬ声はいつ習ひけん  
 熙  
 357 大かたの世は春なれや谷の戸を匂ひ出たる鶯の声  
 全  
 水辺梅  
 358 峰に咲梅の色かにつなかれてくたし怠たる春の川舟  
 有隣  
 古郷梅  
 359 古郷の梅はわかさくわか色にむかしの春を思ひ出らん  
 美啓  
 庭梅  
 360 あかてのみ見なれよとてやけふも猶砌の梅の咲匂ふらん  
 定雄  
 鶯出谷  
 361 谷の戸の雪はきえねと鶯の出て鳴音はのとなりけり  
 全  
 野梅  
 362 今日も又袂にとめて帰るかなのとけき春の野路の梅か香  
 重遠  
 梅花盛久  
 363 雪に咲き深き霰に匂ひつゝ梅の盛そ久しかりける  
 二月三日  
 山路鶯 竹寿  
 364 鶯の鳴ねをつゝむ袖ならは帰る山路のつとにしてまし  
 有隣  
 365 山路にて啼古世とも鶯の都に出は初ね成へし  
 竹哀鶯  
 366 ふしよきをねくらの竹にならひなはときはにもなけ鶯の声

367 遠かたの山はもとよりかすかにていと霞の立かとそ見る  
 遠山霞 美啓  
 368 あかねさす朝日にそれとしられけり霞のうちの春の遠山  
 花問鶯 美啓  
 369 あかす見るこゝろは我に替らてや花の木間に鶯のなく  
 雨中鶯 熙  
 370 降つゝく雨に色そふ青柳を。見<sup>出て</sup>よとかうくひすのなく  
 371 紅のこそめの梅の美笠<sup>は</sup>きつゝも雨を鶯のなく  
 隣家鶯 全  
 372 中垣のと成りの竹のよをこめて我寝屋にきく鶯の声  
 遠山霞 竹寿  
 373 烟かとまかふは遠き浅間<sup>アサマヤマ</sup>山朝またき立霞成けり  
 374 遠方の山の姿もみえぬ迄幾重霞の立へたつらん  
 二月十三日  
 山家朝 竹寿  
 375 軒近きねくらの出る鳥のねに朝みせられぬ山里の庵  
 遠煙 全  
 376 山深くたか庵しめて夕暮のけふりに見する哀なるらん  
 見山花 全  
 377 山ふみにたれもうかれて世の中の思ひなけなる花の下かけ  
 隔山恋 有隣  
 378 恋すてふ名のみそ早く立田山妹とわかあふ中はへたてゝ  
 寄雲述懷 全  
 379 消ぬ間は猶中空に迷ふ哉思へは雲もうき身也けり

野霞 全  
 380 いつも野は若竹のつまこめに八重垣つくり立霞哉  
 若草 厚道  
 381 春雨のふる野にもゆる若くさははれてみとりの色まさりけり  
 峰雲 全  
 382 心なき立ぬを風にまかせつゝゆくゑやいつこ峰のしらくも  
 若竹 維足  
 383 春雨の降日かさねて深みとり若くさ山の色そまされる  
 峰雲  
 384 夜をこめて谷はいてゝも明るをや待てやすらふ峰のしらくも  
 早蕨 重遠  
 385 山桜咲ぬ其間の手すさみにおれとや萌る野への早蕨  
 春駒 全  
 386 もえ出る野への若草敷ねして心ゆたかに見ゆる春駒  
 薄暮雲 厚道  
 387 明て見はいつこの山に懸るらん峰に消せぬ夕暮の雲  
 二月余寒 全  
 388 一度はぬきし衣を二月の空さえ返り淡雪そふる  
 古寺夕 維足  
 389 分迷ふこの山かけの寺ならし入相の鐘の声聞ゆ也  
 若くさ 方盈  
 390 種をまく人しなけれと野へことに春を忘れもゆる若くさ  
 峰雲 全  
 391 柴の戸にたつる烟の行すゑや峰にたな引雲と成けん  
 峰雲 美啓  
 392 めになれてけふもこそ見れをち方の峰にかゝれる夕暮の雲  
 春月 美啓

393 はるの夜の月はむかしにかはらねと老て見るこそあはれ成けり  
 二月十八日 董 竹寿  
 394 春雨のふる野にさける葦草つみて帰らん袖はぬるとも  
 夜春雨 厚道  
 395 ゆめ絶<sup>レ</sup>老か枕におとつれてふるも淋しき夜半の春雨  
 山家春月 美啓  
 396 山里はたゝこれのみや友ならん軒端に霞む春の夜月  
 春駒 竹弘  
 397 若草の萌出るより春の野の野飼の駒や猶いさむらん  
 旅山 熙  
 398 分まよふ道そわひしき行ききをとほんとすれは口なしの山  
 春懷旧 維足  
 399 花見つゝ春を長しといたつらに四十年余りも今は過にき  
 全 英清  
 400 古をしのふ袂のかはかぬははるのなかめのふれは也けり  
 送別 久明  
 401 君かゆく都の花の盛をは共にきて見ぬ事そ悲しき  
 春駒 全  
 402 もえ出し若草しけくちりぬらし淀野ゝ駒の声いさむ也  
 野蕨 定雄  
 403 春日野の野<sup>春</sup>の遊びの楽しきはもゆるわらひを折<sup>レ</sup>は也けり  
 二月廿三日 竹寿  
 寄浪恋  
 404 人こゝろ秋風さはく荒磯の浪のよるひる袖そぬれける  
 花盗人 全  
 405 ぬすみとる人に花<sup>や</sup>をゆつりみんぬしに成ても惜まさるかと

406 独対花 維足  
 常くしくひめもす花をなかむれは物やおもふと人はみるらん  
 水上花 竹弘  
 407 咲花のしたに流れてよしの川色なき水も色にナリけり  
 寄江恋 厚道  
 408 としをへて頼むもはかな住の江のすみのきかたき人の心を  
 林間鶯 豪濤  
 409 呉竹のしけみか奥は明やらてねくらなからの鶯の声  
 古寺 全  
 410 よのつねの天地ならぬ天地は山ふところの古寺の内  
 草庵 美啓  
 411 としをへて住とはすれと山かけの草の庵はとふ人もなし  
 風前花 英清  
 412 風をのみいかてうらみん吹すとてちらてやむへき桜ならねは  
 寄沼恋 全  
 413 東路のいかほの沼のいかなれはみこもりにのみ物おもふらん  
 河上花 久明  
 414 大井川霞晴行水の上に匂なかるゝ山さくらかな  
 古寺 全  
 415 入相の鐘のひゝきのなかりせはそこもしらし志賀の古寺  
 都霞 須賀雄  
 416 打ましる柳桜はものみえて都の大路霞棚引  
 柳辺花  
 417 青柳の糸のみとりの色そひてひもときそむる花桜哉  
 行路花 貞行  
 418 八重ひとへ色々にさく道の辺の桜の花をたをりてそ行  
 終日対花 全

419 今日も又苔をむしろに小倉山桜のかけに日を暮しけり  
 折花贈人 全  
 420 春の日の友ともなれる桜花一枝をりて君に見せまし  
 二月廿八日  
 水辺花 竹寿  
 421 咲花の下に流るゝ川水を結はゝ袖も匂ひこそせめ  
 尋花 全  
 422 山遠み白きを夫と尋来し花は高ねの雲にそ有ける  
 全 有隣  
 423 咲花は命の杉もなかりけり霞める方やさして尋ん  
 月前花 厚道  
 424 大空は霞める月のさなからに曇りも果ぬ花の木の本  
 落花多 美啓  
 425 けさ見れば夜の間のかせやさそひけん梢まはらに花散にけり  
 花下送日 須賀雄  
 426 なれてきし山分衣立かへてあすは磯辺の花を尋ねん  
 惜花 全  
 427 ありはてぬ物とはかねてしりながら猶をしまるゝ山桜かな  
 三月八日  
 野蕨 竹寿  
 428 春日のゝ飛火のゝへのやけ跡に煙とみえてもゆる早蕨  
 429 道もなきやけ野を人の行かふはもえし蕨を折きや有覧  
 春木 方盈  
 430 色かへぬときはの杉も一しほに緑をそへて春は見へけり  
 春獣 厚道  
 431 つれ／＼とふりくらしぬる春雨に手かひの猫も猶眠る也

春曉 維足  
 432 霞たつねくらをいつるむら鳥の冬ものときき春の明ほの  
 春海 全  
 433 長き日やうみに発つらん釣もせずくとも見えぬあまの小舟は  
 春曉 有隣  
 434 鶯の声聞ゆ也咲花のあたりや先にあげほのゝ空  
 全  
 435 春のよの月の光はかすめとも声はくもらて帰る雁かね  
 山春雨 厚道  
 436 峰にさく桜も雲もおしなへてひとつにかすむ夕暮の雨  
 三月廿八日  
 春鐘 宗貞  
 437 鐘の音も霞の内に聞ゆなり花山寺の夕ぐれの空  
 名所花 有隣  
 438 吉野山花さく春ののときさにそむかぬ世をはすてゝこそいれ  
 三月廿八日  
 岸柳臨水 厚道  
 439 打なひき岸の柳のいとさへも絶ぬ流の水のまに／＼  
 焼野雉 竹寿  
 440 夕暮に焼野の雉の声するはわか床をは尋てや鳴  
 三月廿三日  
 春日 厚道  
 441 見渡せはすまの浦浪うら／＼と夕日に霞む淡路島山  
 宇治恋 美啓  
 442 のとかなる春日のかけにみよしのゝ吉野ゝ花も匂ひそふらし  
 443 人はたゝあさかの沼の浅くのみ思ふ心を何頼むらん

春鐘 竹寿  
 444 春の夜は夢にも花を見る物をつき驚かす曉のかね  
 風前花 広雅  
 445 散へくはまたみえね共桜花打とけかたく春風の吹  
 四月三日  
 新樹露 竹寿  
 446 若葉さす山路を越て今朝くれば木の下露に袖しめりけり  
 首夏蝶 厚道  
 447 卯花の咲や待らん夏来ても庭の垣ほを去ぬこ蝶は  
 448 若葉さす梢に蝶の遊へるは花の名残や猶したふらん  
 新竹節露 維足  
 449 ほころふる程さへまたて今年生の竹のより葉に結ふ白露  
 更衣惜春 熙  
 450 ぬきかふる花の袂の惜まれて暮にし春の猶そ恋しき  
 首夏風 有隣  
 451 かへてきし麻の衣手吹かへしうらめつらしき風の涼しさ  
 首夏山吹 久明  
 452 暮て行春にしられぬさとなれや八重山吹の咲残りけり  
 首夏 全  
 453 霞立天の香久山打晴て衣ほすへに夏は来にけり  
 早苗 有隣  
 454 早苗とる袖の綻いとなきにきのふもけふもぬはてきにけり  
 泉 竹寿  
 455 松かけの岩もる清水手にくめは流れし汗も流れいにけり  
 夏草 厚道  
 456 夏草のしけりそひにし此比は庵の戸さしそをのつからなる

標

維足

457 卯花の垣ねはあれと夕風に軒はの標ちるも涼しき

458 すみれ草つみし春こそ忍はるれ軒はの標咲につけつゝ  
送別 貞幹

459 手折なる柳の糸の長からは別るゝ袖を契んものを  
寄雲恋 英清

460 そらにきへ風たへても浮雲の立帰りつゝ物おもふかな  
蓮花 全

461 いつはりを教へし法の花なれは蓮の露も玉とあさむく

462 咲色もにほひも深し蓮花すかたの池に影をうつして  
四月十三日

垣卯花

竹寿

463 山賤か結はぬ垣の卯花は己か俛にそ咲満にける  
貞幹 維足

464 きて帰る袖の錦を旅衣けふ立日よりまたれこそすれ  
卯花似雪 厚道

465 朝戸出の袖ふく風は寒からて垣ほにつもるうの花の雪  
山家卯花 御民

466 谷かけにさらせる布と見ゆるかな卯花さけるしか垣根は  
古郷卯花 竹弘

467 ふる里の草のなかなる卯花はあれし垣ねのあとにやあるらん  
同十八日

遥聞郭公

須賀雄

郭公何方

竹寿

468 時鳥のかに鳴し一声はかたふく月のあたりなるらし

469 橘のかほる宿をはよそにして鳴はいつくそ山ほとゝきす  
終夜待郭公 厚道

470 待あかす心もしらていつ迄かつれなく忍ふ山ほとゝきす  
雨中待郭公 方盈

471 小雨降る此夕暮は時鳥おなし心に人のまつらん  
毎夜待郭公 維足

472 おろかもまたれつるかな時鳥契もをかぬ夜をかさねつゝ  
遥聞郭公 須賀雄

473 郭公ほのかに鳴し一声はかたむく月のあたり成らし  
四月廿三日

名所聞郭公

竹寿

474 啼絶て過行空は明方の月も入さの山ほとゝきす

475 郭公声をしのひの岡の名も忘れてやなく村雨の空  
闇夜待子規 維足

476 うは玉のやみこそよけれ忍はねは今もらしてよ山時鳥  
独待時鳥 厚道

477 さよ更て人もねにけり今こそ忍ひねもらせ山ほとゝきす  
卯花蔵門 英清

478 柴の戸は有ともみえす白妙の卯花垣の花にうもれて  
始聞郭公 全

479 人はよも誠とはせし時鳥聞といふともまたき初ねは  
夜待郭公 全

480 なくまでは枕はとらし時鳥よしやすからおきあかすとも  
卯花似雪 豪濤

481 茜さす日はてりなから消あえぬ雪かとまかふ垣のうの花  
暁待時鳥 熙

482 有明の月出るまでまたせつゝ猶もつれなきほとゝきす哉  
 夜卯花 全  
 483 卯木さく垣ねつゝきの山里は夜のゆきゝもおとらさりけり  
 四月廿八日  
 郭公遍 竹寿  
 484 一年にふたゝひはなき五月とや声のかきりをなく時鳥  
 尋郭公 有隣  
 485 橋に宿をかりてや待てまし尋ねわひたる山郭公  
 依橋客来 厚道  
 486 古郷を人もとひけり橋の昔の袖の香をあるしにて  
 子規遍 竹弘  
 487 ほとゝきすめつらしからすなりにけり残里なくなきふるしては  
 夜橋 同  
 488 妹とねしこゝちこそすれ夏のよの枕にかをる軒の橋  
 待客聞郭公 方盈  
 489 契りおきし人はとひこて時鳥思はぬかたになのる一声  
 羈中郭公 同  
 490 古郷の夢おとろかす時鳥うしとやいはんうれしとやいはん  
 古寺時鳥 熙  
 491 更る夜の鐘のひゝきに声そへて鳴や初瀬の山時鳥  
 植橋 同  
 492 軒ちかく橋うゝて今年よりまたてきかはや山時鳥  
 五月十三日  
 五月雨晴 維足  
 493 この度は誠なるらん五月雨の晴る梢の蟬の初声  
 旅泊五月雨 竹弘  
 494 五月雨はいつか晴なんみなと江の浪のうきねそいとゝわひしき

閑居五月雨 方盈  
 495 たまきかに見つる行来もたへはてゝ庵淋しき五月雨の比  
 橋五月雨 熙  
 496 日数ふる五月の雨に浪こえていまそ名におふ水底の橋  
 山中五月雨 竹寿  
 497 岩かねにもりつる苔の雫さへ川に流るゝ五月雨の比  
 初五月雨 有隣  
 498 ふり初るけふよりかねて五月雨の日数思へはわひしかりけり  
 六月八日  
 梅雨 竹寿  
 499 しける葉もみも重くなる梅の雨今幾日ふらは枝や折なん  
 瞿夏 全  
 500 そたてにしかひはみえけり夏の日にひとり咲ちるなてしこの花  
 古恋 厚道  
 501 月花のかけのかこともいくとせそ思へは久し忘はかりに  
 納涼 維足  
 502 むすはねと涼しかりけり音たてゝ松かねくゝる水のなかれば  
 祈恋 方盈  
 503 朽はてはまたかけかへんしめ縄の絶てやむへき思ひならねは  
 夏月 熙  
 504 隈もなき光に船やかよふらむ月夜はなつも涼しかりけり  
 早苗 宗貞  
 505 軒先にうたひかわして妹とせの山田の早苗とるもむつまし  
 恨恋 須賀雄  
 506 塩竈のうらみはて鳧松のはのつれなき色をおもひ侘つゝ  
 507 山深き岩ねにはへる鳶のはのうらみけりとも人はしらしな

夕立 有隣  
 508 里ことに今日もまたれて夕立の今いそかしくさわき行らん  
 六月十三日  
 雪 厚道  
 509 ふりつみし雪の光りにみかゝれて心に曇る世のちりもなし  
 菫 竹寿  
 510 いささらはつます共よし菫さく野守よゆるせ一夜ねてみん  
 卯花 有隣  
 511 卯花の盛りはけふの色なれやまかきの山を越る白浪  
 不逢恋 竹弘  
 512 つかはさるをしのあはれもしられけり逢ぬなけきのいくよ積りて  
 六月十八日  
 行路夏草 竹寿  
 513 来しかたも又行ききもみえ分す心そ迷ふ野への夏草  
 風前荷露 厚道  
 514 蓬葉に置ゐる露の白玉もこほれぬほととの夕風そ吹  
 垣夕顔 熙  
 515 笹垣のひまよりしろく見えたるは内をやのそく夕顔の花  
 山中蟬 全  
 516 風通ふ山路の松になく蟬の声のしくれは涼しかりけり  
 遠村蚊遣 有隣  
 517 ゆふへ／＼夕は春に立帰る霞やさとの蚊遣りなるらむ  
 六月廿三日  
 久忍恋 有隣  
 518 逢すしてくつる底の久しきに枯ぬ忍ふもつれなかりけり  
 後朝恋 竹寿  
 519 別にし後のあしたの袖見れは染るなみたの色あらた也

山家鳥 厚道  
 520 世をいとひ入しみ山の柴の戸に又も聞うきふくろふの声  
 不逢恋 了俊  
 521 逢坂の関路を越て鳥かねをつらき物とはいつか聞らん  
 七月三日  
 海辺秋来 有隣  
 522 常盤なる松のひゝきも住よしの浦めつらしき秋の初風  
 初秋夕 熙  
 523 穂に出ぬ一むら薄ゆふ風になひくや秋の気色なるらん  
 草花秋近 熙  
 524 秋は早垣ね間近く成ぬらんほころひ始し朝顔の花  
 立秋 全  
 525 ふく風の物に涼しきゆふへそと思へは秋の来るなりけり  
 暁立秋 全  
 526 暁の寢覚のまくら露そおく夢のうちにや秋のきつらん  
 七月廿三日  
 立秋 豪濬  
 527 秋来ぬ伊勢の浜萩声たてつさかのゝ鹿もなかとすらん  
 月下擣衣 全  
 528 秋もはやふくる夜さむの月かけに霜なからうつ賤かさ衣  
 古寺残月 竹寿  
 529 さひしさの限り成らし古寺に残るも薄き有明のかけ  
 野月露深 有隣  
 530 露ふかき野へにすめはか大空の月もぬれたる色に見ゆらん  
 月前松風 久明  
 531 高砂のまつふくかせもさよ更て光りしつけき月の影かな  
 深山暁月 全

532 深山木の梢にまよふ風絶て露にやとれる有明の月  
 山月 全  
 533 一村のくもりのこらぬ鏡山みかきて出る月のさやけさ  
 七月廿八日 竹寿  
 534 花の枝に置露しけみたへかねて折伏やせん野への秋萩  
 山月 豪濬  
 535 さやけしな夕霧晴てふもとより月に見上るは山しけ山  
 秋朝 全  
 536 真萩咲朝草風も心せよ夜半のしら露枝なからみむ  
 暁惜月 全  
 537 横雲のみねに別るゝきぬ／＼も猶おしまるゝあか月のつき  
 虫声幽 標清  
 538 うら枯の野への千草に霜置て幽になりぬなくむしの声  
 月前擣衣 貞通  
 539 たゆみつるひまこそなけれ衣擣音羽の里の月の夜な／＼  
 八月三日 有隣  
 初雁  
 540 帰りつる夫やきにけん初雁の此春きゝし声にかはらぬ  
 初雁 貞通  
 541 をりぬへきところをしらす初雁はかたゝを過ていつく行らん  
 全 竹弘  
 542 はつ雁のまたすみつかぬ声す也なれしとこよや忘れさるらん  
 全 久明  
 543 一すちの雲かと見れは初雁の天の戸渡す声聞ゆ也  
 浦松 貞通  
 544 幾夜かも明石の浦に舟とめてうきねの夢をくたく松風

545 汐かせに色は重て幾年か吹れ来つらん浦の松か枝  
 全 竹弘  
 546 詠むれは旅<sup>タビ</sup>の思ひもなくさみぬなくさの浦の松の村立  
 八月八日 久明  
 547 霧こむる山のはつかに初雁のかすかなるねのめつらしき哉  
 初雁 熙  
 548 きくからにすゝろ<sup>に</sup>なら物のかなしきは枕に渡る初雁のこゑ  
 549 寢覚して哀れもことに深夜のまくらに近き初雁のこゑ  
 浦松 全  
 550 住の江の浦の姫松幾千代の契りをこめて誰か植けむ  
 551 深みとりさかゆく若の浦松は君にや千世を契るなるらん  
 552 ひとつとても松の烟の深ければ焼ぬ日わかぬ塩かまの浦  
 八月十三日 竹寿  
 川月似氷  
 553 淀川の月の光は氷かとみえても舟の棹はさはらす  
 古寺残月 有隣  
 554 起出てくめは濁しあかの井のふたゝひすめる有明のかけ  
 雨後月 竹弘  
 555 雨晴し梢の霧にうつり来て月の光そいと照そふ  
 湖上月明 熙  
 556 暮るゝ夜の浪の浮霧かつ晴て月影清し鳩の海面  
 秋朝 久明

557 山田守賤か袂にもる露も身にしみ初る秋の朝風  
八月十八日

秋田 竹寿

558 秋の田のゆたけき御代に富足てくちを争ふ民くさもなし

秋野 有隣

559 野といへは若なすみれの春もあれと千種の花に虫の鳴秋

鹿 熙

560 きくまゝにかたしく袖のぬるゝかな鹿の鳴音に露やそふらむ

561 ふくる夜のあらしに月の霜さえて山陰寒く小鹿鳴也

独見月 全

562 なか／＼にはぬもよしや我ひとりこゝろのまゝに月をこそ見め  
九月三日

岡紅葉 貞通

563 あひともにならひの岡の紅葉はは松をのこしていかにてそめけん

菊露 全

564 千代程にきくに置たるしら露ははかなきものと思わさりけり

残菊 全

565 うつろふも又一しほのなかも冬初の露のしらきく

夕鹿 宗貞

566 小倉山みねのもみちはふみわけてを鹿鳴也秋の夕暮

月前擣衣 全

567 賤の女か衣打也照月のかけもよさむの夜の山里

夕擣衣 熙

568 夕月の影さへいとゝさむしろに衣うつ也秋篠の里

秋夕 全

569 門を出て見れとなくさむかたそなき我住里の秋夕暮

九月廿三日

暮秋時雨

570 吹かせにまねくを花はうらかれて秋のすゑのに時雨ふる也

安政四年

正月十八日

571 門の戸を立出てみれば朝日かけ霞む岡へに鶯のなく

霞中鶯 熙 竹寿

572 八重霞すかたは深く立こめて声のみもるゝ野への鶯

厚道

573 春の野は深き霞にうつめ共うつみもあらぬ鶯のこゑ

豪濬

574 春をしる峰の柳の打けふる霞を分て鶯のなく

維足

575 鶯のふしある声は霞立あなたや竹の林成らん

有隣

576 うら／＼と霞む奥より梅かゝにたくひて匂ふ鶯のこゑ

春祝 豪濬

577 君か代は神代のまゝの御代なれば幾万代もかひわかれ

初春 有隣

578 門ことに引しめ縄をなひかせて春来にけりとこち風そ吹

山家 竹寿

579 都人<sup>はれにきて人は</sup>もかよさひしと思ふらん馴てしつけき山かけの庵

柳露 豪濬

580 置余る露をこほさぬ青柳は糸もて結ふ玉かとそ見る

梅風 維足

581 おしなへて咲やみつらん風ふけは花なき宿も梅かゝそする

582 よし野山見捨る雁の常世には桜に増る花や咲らん  
 帰雁 厚道  
 朝霞 有隣  
 583 朝な／＼霞深めて深<sup>色</sup>く<sup>そ</sup>なる<sup>ふ</sup>る山のみとりそ薄く成行  
 春恋 竹寿  
 584 さかほもし問もやすると頼まれて君故花そいとゝ待るゝ  
 羈旅 厚道  
 585 宵々に帰る夢路は近けれと日に遠さかる古郷の空  
 若菜 熙  
 586 我宿の垣ねのみ雪むらきえぬいさ野に出て若なつみてん  
 春恋 全  
 587 春霞妹かあたりをへたゝては我も雉子のねこそ鳴るれ  
 残雪 全  
 588 煙のみ霞とみせて春はまた浅間の山に雪に残れる  
 霞中鶯 定雄  
 589 太閑に霞こめたる春日野のかなたこなたに鶯のなく  
 春雨 全  
 590 広沢の池の春雨ふるまゝに古ねの葦やもえんとすらん  
 首夏 宗肅  
 591 卯花の垣根に立て郭公はつねまつへき夏は来にけり  
 郭公 全  
 592 人伝の後にしきかは郭公はつねもかくはうれしからめや  
 有隣  
 593 夏山に今年すたちの郭公またれてなけと親やをしへし  
 夏月 全  
 594 すゝしさとけふの日暮ししるしにて夜とも分ぬ夏夜の道  
 菅雄

595 やかてよ<sup>し</sup>は明なて物を山端にまた出やらぬ夏の月影<sup>よ</sup>  
 橘 有隣  
 596 人々のしのふ袂やかはるらん花有国は同じ匂ひを  
 宗肅  
 597 しのふへき昔しらねと橘のかをる夕はたゝならぬかな  
 納涼 有隣  
 598 心有てかねて風をややとすらん涼みにくるを待の下陰  
 待恋 全  
 599 我心二つに成ぬ今宵そと待は嬉しく更行はうく  
 逢恋 菅雄  
 600 うれしくも逢坂山を越にけり心つくしに又なかへりそ  
 契恋 有隣  
 601 別れての後の霞と成にけり誠かしらぬ契なからも  
 社頭松 宗肅  
 602 ひもろきの近き守と蘿草かけていかきに立る松かな  
 寄弓祝 菅雄  
 603 事し有て引へき真弓徒にいくはに遊ぶ君か御代かな  
 有隣  
 604 矢さけひの声も聞えず梓弓引のまに／＼君になひきて  
 新樹 全  
 605 みつえさす梢の古葉散はてゝ楠は夏こそ改りけれ  
 郭公数声 孝詮  
 606 ほとゝきす五月をおのかかきりとや声をおします鳴尽すらん  
 寝覚郭公 定雄  
 607 ね覚してかならすまつとなけれとも有明の月になく時鳥  
 撫子 全  
 608 うつくしく見<sup>ク</sup>えにけりかなかくはかりたかねにかけて撫子の花

松下納涼 孝詮  
 609 たへかぬる夏の昼間のあつささへ忘れてすし松の下風 常従  
 610 夏衣袖吹返す夕風にあつさわする松の下かけ 全  
 寄草恋  
 611 夏の野に生そふ草の数よりもしけさそ増る我恋しくは 全  
 名所山月  
 612 くるゝかと見るほともなく月かけは昼川山に立のほりけり 有隣  
 採早苗  
 613 早苗とる門田の水は濁れともみとりの色はけかれさりけり 全  
 郭公数声  
 614 時鳥今を時とや村雨の軒の雫のおちかへりなく 全  
 寄神祝言  
 615 神守る君か代はたゝものゝふの弓をかくらのとり物にして 全  
 寄忘草恋  
 616 妹とわか住の江にこそ植てみめあはぬ日比のうさ忘れ草 菅雄  
 暁郭公  
 617 山端にかけしらみゆく有明の有か無かになくほとゝきす  
 618 ほとゝきす待にしかひは有明の月にほのめく一声の空 夏恋  
 619 短夜をもえて明すは草むらにすたく螢と我と也けり 夢後恋  
 620 今より<sup>なか</sup>は<sup>こ</sup>夢てふものはたのましなうつゝのうさの種と也にき 遠蔭  
 短夜月  
 621 難波なるみつともいかて人にいはん入江の蘆の短夜の月 竹風如雨

622 深みとる竹の下風打さわきしくるゝ音にちるふるは哉 寄風恋  
 623 吹かせにくすのうらはのかへるより露の敷<sup>も</sup>のきへんとすらん 田家蚊遣火 維足  
 624 いふせくもかやりたく也中／＼に田つらの雁は外面にやねん 夏旅  
 625 波風のやすしとききは遠くとも夏は船ちを行へかりけり 行路夕立 熙  
 626 行かたもかへらんかたもなかりけりはるけきのちの夕立の雨 海辺鶴  
 627 幾千世を松に契りて塩かまの浦やましくも遊ぶ友鶴 竹風如雨  
 628 雨そゝくおとかとききはそれならす竹のはわけの風に<sup>わ</sup>そ<sup>た</sup>有<sup>な</sup>ける 夕顔露  
 629 蚊やり火の煙いふせき賤か屋も涼しくみゆる露の夕かほ 山水室 竹弘  
 630 たてまつるけふしもなくは氷室山夏をしらてや過んとすらん 旅夕立 方盈  
 631 旅人のしはしやすらふ程もなくやかて晴行夕立の雨 夏風  
 632 庭の面に水そゝきつゝはしゐして袖にまちとる風のすゝしさ 山新樹  
 633 よしの山花さく春の時すきて青葉にしける夏はきにけり 海辺鶴 宗貞  
 634 いせの海の波もしつけき君か代はつるも千代とや鳴わたらん 氷室  
 635 鳴せみの声なかりせは風さむき氷室の山は夏をしらめや

636 秋のくるしるしをみせて我宿の垣ねのきひも穂に出にけり

吉胤

637 みな月のあつき日かけも白波に秋をよせくる川つらのやと

638 水きよくなかれすゝしき川つらの宿は夏なきこゝちこそすれ

夏述懷

639 生しける庭の夏草なかくに半なよりは浮をさへによの中をを立はてへたてなん

恋枕

640 別ての後のかたみとしきたへの枕にのみやうさをかたらん

林頭蟬

有隣

641 常盤なる松の林にすみながら春秋しらて蟬や鳴らん

642 かけしけき林のこのはかそへてや枝うつりして蟬のなくらん

夕顏露

643 今はやゝ夏も末葉に露かけて涼しくさける夕顔の花

林頭蟬

竹寿

644 あしたより絶す林にくれ竹の世を鳴くらす蟬の諸声

萩

有隣

645 移し植し庭の秋萩露そふはなれつる野への鹿や恋らん

646 山里のねこして植し萩か花鹿のねそへてさくよしも哉

647 秋のゝこ置露そふおもるの玉たま萩かえは風絶てこそ蕨ふしけれ

八月十八日

月前眺望

見なれてはめつらしからぬ野へなから月よは更に面白き哉

649 立のほる月と共にやさしかの声も高ねに澄渡るらん

寄山祝

650 動きなき御代のためしと神代より大内山はつくり置けん

八月十五夜、重遠の楼に登りて

651 門の外の珍らしけなき田つらたに月に見るよは面白き哉

八月十五夜

竹寿

652 から人はからうたをこそうたふめい<sup>ら</sup>つくもめつるけふの月かけ

月前鹿

高胤

653 世のうさも忘る斗の月かけに何を小しかのひとりなくらん

同

有隣

654 世中を知ぬみ山の月かけに何のうさをか鹿は鳴らん

655 山にても夜毎に鹿の鳴なるは月やうき世の光り成らん

656 さをしかはわか毛の星もかけ消て月すむ秋やうしと鳴らん

657 さをしかも禁の野へに忍ふ身を忘れて月に声や立らん

658 月もかく光りつくして照す夜は鹿も声をやおしまさるらん

659 さをしかも暮る契りの妻恋にはかなき月を恨みてやなく

660 そはたつる枕に遠く聞ゆ也小鹿も月にねさめてや鳴

寄山祝

661 君か代につみ重ねたるよろこひは富士の高ねも及はさるらし

662 動きなき南の山のよはひ迄引出しけり君かためしに  
 663 松山の栄を君に契りをけははてを白浪こゆる世はなし  
 664 限りなき君かよはひの高さには富士のねも猶禁成へし  
 665 さゝれ石の岩ほと成て君か代に山も幾らの高さそふらん  
 666 君か代は八百万代に動きなく天のかく山かくてこそへめ  
 667 君か代は御代の数とる塵<sup>ち</sup>の山とつもりて雲かゝるまで  
 月前鹿 武行 柴田宗九郎  
 668 くもりなき月の鏡にあさましき見る影みてや鹿のなくらん  
 寄山祝  
 669 うつりゆく春秋しらてときは山色もかはらす千代やへぬらん  
 月—— 忠郷  
 670 秋風の雲吹はらふ月影に鹿のなくねもすみ<sup>き</sup>りけり  
 寄——  
 671 ときはなる雪のふしのね時しらすすなからやちよをふるらん  
 月—— 忠順  
 672 立よらんかけもくまなく照月にかくれかねてや鹿のなくらん  
 寄——  
 673 足引の山をたのしむ心もてしつけき人や千代をへぬらん  
 月前鹿 宗貞 年田頼母  
 674 はつせ山嵐にすめる月かけを身にしめてなくさをしかの声  
 寄山祝  
 675 君かよを守るふたらの山風になひかぬはなきよもの民草

676 はた織の声はかりこそ烏羽玉のやみにかくれぬにしき也けれ  
 暗夜虫 有隣 嘉保  
 677 月影の入にし後も松<sup>も</sup>のなく音は庭にさやか成けり  
 維足  
 678 物はみなそれと見えねと鳴虫の声はやみにもかくれさりけり  
 待月 有隣  
 679 誰里も月をまつとていく人の心か山にむかふ成らん  
 維足  
 680 宵／＼にかけ薄らなる月なれと立ても居ても聞<sup>き</sup>たれこそすれ  
 紅葉深 有隣  
 681 いそくへき夜寒にいかて山姫のまた染あへぬ紅葉はの袖  
 嘉保  
 682 秋もやゝ夜寒に成て衣手の杜の木葉は下満にけり  
 朝霧 有隣  
 683 白波のよるはこえしと竜田山明てや霧ののほる成らん  
 嘉保  
 684 雨ときく軒の雫は山さとの明てこそみれ庭の朝きり  
 竹寿  
 685 やとりをはとく立出て旅人の行衛まとはん野への朝きり  
 維足  
 686 旅人の笠の雫にしられけりけさ越て来し路の秋霧  
 月前鹿 嘉保  
 687 月清みわかねられねは人にまて見よとすゝめて鹿や鳴らん  
 寄山祝  
 688 動なき岩くら山の岩ほたに君か御代にはなひかさらめや  
 月前鹿 定雄

689 秋もやゝ更る夜ことの月かけに峰立さらて雄鹿なくなり  
     寄山祝  
 690 手とせ山ちとせを君か齡にて松のときは色もかはらし  
     月前鹿 維足  
 691 夜をこめて宿りをたては有明のかたふく山にをしか鳴也  
     寄山祝  
 692 動なき山とはいへと君か代のためしには猶ひかれつる哉  
     月前鹿 厚道  
 693 更るよの月の哀を高砂の尾上の鹿も音にやなくらん  
     寄山祝  
 694 君か代の八千代と共にときは山ときはかきはにかけさかふらん  
     月前鹿 元壽  
 695 日はくれて猶もよるなき月かけにいねかて也と鹿やなくらん  
     寄山祝  
 696 今年をはふもとの塵の初めにて山としつもれ君かよはひは  
     有隣  
 697 山の名は多くあれとも亀の尾を君か代永きためしにはひけ  
 698 万代の亀のせにおふ山といへとこのたのしさにしかしと思ふ  
 699 足引の山の名高く聞えつる千年は君かよはひなりけり  
     月前鹿  
 700 照月の光さやけきかの岡や鹿の声する所なるらん  
 701 峰に入る弓張月の矢面にたてるか鹿の声のかなしさ  
 702 人ならぬ鹿も鳴也たか見てもかなしきかけや望のよの月

淀の水車の陰に  
 703 哀なりよとまぬ淀の水車いこふ日もなくやすむ夜もなく  
     月前眺遠  
 704 天か下かくこそ月は澄ぬらめ見渡す野へのかきりのみかは  
     古郷月  
 705 ぬるゝかと思ゆるは月も古郷の昔やしのふなみたなるらん  
     浦月  
 706 心なき海人も夜よしとこきつれて月にうかれぬうら人もなし  
     月前鐘 熙  
 707 山寺の鐘の響にさそはれて峰たち出る秋の夜の月  
     山家月  
 708 山深くおもひ入らすはちりもなき憂世の外の月を見ましや  
     故郷月  
 709 露しけき蓬か庭に影とめて月のみ灯る志賀の古郷  
     月前虫  
 710 月影は垣ねに落てきり／＼すやゝたゆみ行曉の声  
 711 隈もなく月のてれはめ浅茅原こゑも曇らす虫の鳴なり  
     月前風 遠蔭  
 712 秋のよの月のためにそ情ある風のすかたを雲にみるかな  
     山月  
 713 山幾重隔てたにもしかすかにへたてぬものは秋の月  
     月前雁  
 714 つらね来し雲井の雁の玉章もよむ斗なる月のかけかな  
     月前恋  
 715 宵のまにちきりし人をいつしかとまつに更行月の影かな  
     故郷月

716 いにしへの都を忍ふ涙にそ月の影さへやわれはてぬる  
 山家月 全  
 717 心とく入らさりしをはおもふかな静けき山の月にむかひて  
 范洛月 全  
 718 官人の錦のゝ袖を照すかな都大ちの秋のよのつき  
 花下忘帰 有隣  
 719 帰る夜を花も思はぬけふみれはわれさへ家を忘れにけり  
 月前述懐 遠蔭  
 720 かく斗清き月よを恥るかなくらき心の身をかへりみて  
 浦月 全  
 721 澄空のあかしの浦のあらゝ松あらはれ出し山の影かな  
 野月 全  
 722 行ゆけとかきりの遠し武蔵のゝ月は尾花か末にかゝりて  
 月前露 全  
 723 玉をしく野へとも露をみするかな草葉か上を月の照して  
 月前菊 全  
 724 ませ菊の色のちくさもよむ斗なるつきのかけかな  
 月前虫 全  
 725 夜もすから聞やあかささんうかれ出て月見る野への虫の声／＼  
 古郷月 有隣  
 726 何事もかはり果たる古郷に我身ひとつと月や燈らん  
 花路月 全  
 727 ゆたかなる都にすめは望月の光迄もやとみて見ゆらん  
 月前風 全  
 728 我かけに似よとて月やふかすらん心のちりを払ふ秋風  
 月前鐘 全  
 729 かねのをとを今宵斗りはとゝめ置いて更るを月に知せずも哉

730 逢坂の関の戸さして月かけを今宵は山にいらせずも哉  
 山月 全  
 731 友とみし月もつれなく我をのみ山に残して世に出る哉  
 月前述懐 全  
 732 侍人の俤たにもさそはなん今はかたみの有明の月  
 月前雁 全  
 733 やとる共とてもねられぬ月とてやよるしも雁の山路越らん  
 野月 全  
 734 いそく共月はみえねと武蔵野の遥けき野へに傾きにけり  
 山家月 全  
 735 浮世より澄てくれはや山にても物思はする秋のよの月  
 月前虫 全  
 736 月見んと昼やねつらん終夜朽木の松になく虫の声  
 月前露 全  
 737 月すめる空に消にし星を又草に置せて見する露哉  
 浦月 全  
 738 満汐のよひ／＼おそく成まゝに月をまつほの浦見をそそふ  
 月前菊 全  
 739 闇にこそしるは砌の菊ならめ月夜は月にまかひやはする  
 山月 竹寿  
 740 さなきたに悲しき秋を更科や姨捨山の月のさそふ  
 山家月 厚道  
 741 山里の花に霞みしかかけかへて秋は淋しくすめる月哉  
 月前述懐 全  
 742 更るよの月の光をやとしつる花のたもとそ露けかりける  
 月前恋 全

743 秋のよの月も更行閨の戸に契りし人はかけたにもなし  
     月前雁 全  
 744 くまもなき月の光に玉章もよむ斗なる雁の一つら  
     月前鐘 全  
 745 更行はいとゝさやかに月かけに声澄わたる山寺のかね  
     浦月 全  
 746 もしほやく煙の末もみゆる迄澄わたりぬる浦の月かけ  
     月前風 全  
 747 うき雲は払ひつくして秋風の空にさやけく澄る月かけ  
     野月 全  
 748 鳥がなく東の空を照しゆくかきりやいつこ武蔵のゝ月  
     月前虫 全  
 749 すむ月は庭の浅茅にかたふきて虫の音高き暁のころ  
     月前露 全  
 750 庭の面の浅茅か上に置露の玉かそふ迄すめる月かけ  
     山月 全  
 751 松風の音もさやかに更るよの空すみわたる峰の月かけ  
     古郷月 全  
 752 さゝ波や志賀の都の跡とはん昔なからの月をしるへに  
     花洛月 全  
 753 うち日さす都の空の秋のよは月もはへあるなかめ成らん  
     月前菊 全  
 754 くまもなく澄わたりぬる秋のよの月に薫へる白菊の花  
     山月 広雅  
 755 山のはを今こそ出れ月かけはいつか／＼と人にまたれて  
     野月 全  
 756 野を広みいつこを宿と定めかね露にたゆたふ月のかけ哉

757 宮人もかゆきかく行うかれけり都大路の秋のよの月  
     花洛月 全  
 758 捨ていにし人の心やいかならんかく斗りすむ古郷の月  
     古郷月 全  
 759 のかれ住山松の戸にあやしくも浮世に似たる月のかけ哉  
     山家月 全  
 760 心なきあまも夜よしとこき出て月にうかれぬ浦舟もなし  
     浦月 全  
 761 呉竹のは分の風も心して露にやとれる月なこほしそ  
     月前風 全  
 762 雁かねに唐ろのをとをまかはせて月のみ舟そ空にたゝよふ  
     月前雁 全  
 763 月見よと人に心をつけもせてなとかねよとのかねをつくらん  
     月前鐘 全  
 764 月見よと人に心をつけもせてなとかねよとのかねをつくらん  
     月前虫 全  
 765 薄原月もほに出て鈴虫の声のさやかにすめるよはかな  
     月前露 全  
 766 荒はてゝのとか成庭の白露も玉かとみゆる秋のよの月  
     月前菊 全  
 767 白きくの花にまかへて秋のよは月のかけのみ薫る也けり  
     月前恋 全  
 768 かく斗さやか成ける月かけも恋のやみ路はてらささりけり  
     月前述懐 全  
 769 植をも折はかりこそかたからめ思ふ事なく見る月も哉  
     橋霰 有隣  
 769 朝またきふるや霰の白玉のかさしみたるゝ宇治の橋姫

770 置渡す朝霜白き橋の上に色もまかはす散霞哉  
 771 人通ふ里の板橋いたまのみけさのあられや消残るらん  
     林霞 全  
 772 きにあられふるや林の竹のよのあなしかまし夢さむる迄  
 773 あられふる林あらはに落はして思ひしよりも音そすくなき  
     残紅葉 全  
 774 くれ果し秋は昨日の夢を猶さめぬ紅葉の色に見る哉  
 775 一枝はおくれて染し紅葉そとしりてや風のよきて吹らん  
     島千鳥 全  
 776 ふところを離れ小島のさゆるよに母なし千鳥父と鳴也  
     紅葉留人 全  
 777 ふり捨てちる物ならは紅葉ゝのさまては人をなととゝむらん  
     秋恋 全  
 778 鳴虫も声よはるまで秋更てなといや増る思ひなるらん  
 779 夕くれのさひしき秋にかこつけて来るかと門に立てみし哉  
     秋鳥 全  
 780 こゝよりもとこよのうさや増るらん秋しも雁の渡りきにけり  
     田霜 全  
 781 かりもせずひつちの稲を何とかもあしたの霜のむすふなるらん  
     述懐 全  
 782 何事を身の行末の心あてに頼みてくらす月日成らん  
     暁更鶏 全  
 783 しはらくは又ねの夢やむすふらんひま有てなく庭鳥の声

784 深きよにめさます鳥の声なくはわれ独とや思ひなさまし  
 785 つく／＼と独ねさめてかそふれは鳥もや声に成にける哉  
     山家冬 全  
 786 松ひとときかれぬ友とは頼ても人め恋しき冬の山さと  
     経年恋 全  
 787 夫をさへうらやまれつゝ七夕の逢よの数もかさなりにけり  
     歳暮梅 全  
 788 垣ほなる梅をさかせて来る春はあすを待てや宿に入らん  
     暁更鶏 全  
 789 けふ咲や軒はの梅の花の春あすくへしとの袂なるらん  
     花初開 広雅  
 790 あくるまつ心もしらて庭鳥のや声は今やなき初むらん  
     遠聞郭公 全  
 791 梓弓今迄我に待せにし恨もとくる花のひもかな  
     暁郭公 全  
 792 待たゆむ人は聞つや小夜更てほのかに名のる山ほとゝきす  
     毎夜待月 全  
 793 ほとゝきすうかれ出ても名のる哉淀のわたりの有明の月  
     雪俄深 全  
 794 待々てをす巻あけぬ宿もなし月は今夜の秋の最中に  
     山家払雪 全  
 795 帰らんとかへりみすれは雲方もまとふ斗に積る雪哉  
     独夜郭公 全  
 796 契おきし都の友やまつの戸も道一筋は雪払ひけり  
 797 誰里に行て鳴ける郭公夜ことにこそたのみおきしか

初雪

有隣

798 庭の面に落ては雨と成にけり散まはかりそけきの初雪

旅宿落葉

全

799 旅枕さゆるは風のわかとかをおほはんとてや落はきすらん

幽止七回忌

全

800 手向する水の氷に俤のうかふこのまゝむすひとめなん

801 俤の今も幽にとゝまるはわすれかたき其名也けり

江鴨

全

802 難はかた入江のあしの霜かれに残るは鴨の音羽也けり

幽止七回忌に雪

全

803 かゝる時とひし物と思ひ出て雪にも人のおもかけそたつ

竹庵翁の賀に

全

804 君すめは竹の庵の千代の色も又幾千代のみとりそふらん  
思ふ事有て

805 静かにと願ふを空に知らは梢の風よ心してふけ

雪先春花

806 かくさけとかねて桜に教へてや梢の雪のつみて見すらん

山田早苗

方盈

807 乙女子かあしたの露の玉すきかけて山田の早苗とる也

藤花写水

有隣

808 藤の花うつるをみれば池水の庭より浪はたつかと思ふ

野残雪

美啓

809 都には消しをしらて春日野の霞かくれに残るしら雪

水鳥蛙

維足

810 山吹の花さく時を待つて井手の蛙は今そ鳴なる

花下忘帰

有隣

811 散よなき桜なりせは木のもとに草むすかはねいとはさらまし

812 盃はとらても花に酔やせし帰らんことをわすられにけり

813 花みれば物を思はぬ習ひにて帰ることまで忘はてけり

814 我宿を見れば忘れつ花もいさ帰るへき根を思はすもかな

815 花ちりて後はいづくに身をよせん此まゝ宿を思ひ出すは

松下改色

816 幾ちとせかはらぬ色の松かえは君か御代をや習ふなるらん

江藤

817 なかれ江に流るゝ春は藤の花はひまつはれととまらさりけり  
春夜

818 ときはなる星の林のこのめさへけふるかくもる春のよの空  
田家春

819 花をみるとまなきをや恨むらん賤は田をのみかへすゝも  
人のわらひを送りければ

820 心さし深き恵に山里の春を居ながら峰のさはらひ  
藤花似雲

821 四方の海風静にて藤浪も御代を慶ふ雲と見えけり

蛭知夜

厚道

822 老か身の光はよるの物なりと昼ははたるの草にかくれて

蛭知夜

維足

823 烏羽玉のやみ夜斗を我世にて世にいてし甲斐もなき蛭哉

嘉保

824 いつかたに身を忍ひてか烏羽玉のよるはもえつゝ飛蛭哉

825 世の中の灯火を見て螢しもよるに成ぬと光る成らん  
竹寿

水鷄所々

826 こゝかしこくみななく也川つらの里しつかなるゆ<sup>ふ</sup>月のかけ  
夏夜待月 厚道

827 庭の面の青葉もにくるす<sup>ゆふかせに</sup>さそはせて待夏のよの月  
納涼到夜

828 川岸の松の木かけの夕すゝみおほえす月のさしのほる迄  
蜩知夜 有隣

829 姥玉の闇なき光身にそへていかて夜しる蛍なるらん  
水辺夏草

830 五月雨に増るみかさのまさらぬは岸ねの草やしけりそふらん

831 こゝまでは分へき野らと見せ置て行人はかる沢の夏草

832 いかにせん硯の海のあされともみるのもなみにぬるゝ袂を

833 とことはに神の恵のかはらぬはしける柳の色にこそしれ

834 年をへて今は老木と也にけりたか植おきし松にか有らん

835 川ならぬ谷の下道水こえて山路迷はす五月雨のあめ  
山路五月雨 竹寿

836 竹陰納涼 厚道  
水無月のてる日もらさぬ呉竹の葉かけは更に夏うくもなき

837 くれ竹の落葉にしはし夕立の名残の露のやとる涼しさ

838 黒雲の内よりふりて池の面にしら浪たつる夕立の雨

839 夕立は今や過らん鳴神の音羽の滝の末濁る也  
竹陰納涼 竹寿

840 かたふける日かけもやかてくれ竹のそよく夕への風そすゝしき  
有隣

841 星合の手向をまたて竹のはに早くも通ふ天の川風  
秋浦

富士山 842 初汐によりくる船のほかけまで薄にまかふまのゝうらなみ

843 雲迷ふふしの芝山しはらくももとの姿はとゝめさりけり  
籬夕顔

844 日くるれはまかきの外に咲出てすゝみかほなる夕顔の花

5  
はみな  
蚊遣火  
845  
ひるのまはまかきの山を越かねてくるゝや待し夕顔の花  
独やかひの庵に

84 賤のふは夕すゝみすと出はてゝ休屋の蚊火を独立らん  
籬夕顔

84 入日影へたつ中かきのこなたよりまつ咲にけり夕かほの花  
竹寿

849 ゆひ染るまかきの竹を便りにて咲懸りたる夕かほの花  
夏原獣 有隣

84 今  
花またきあたちの原の離駒秋まつ萩は心してはめ  
七夕 中

85 更になど朝ぬさきには帰らんしられてにし星合の空  
七夕雨

七夕虫

852 けふといへはくるゝを待てきり／＼す天の川舟させとなく也

顯恋

853 忍ひかねあらはれてもと思ひしはしらぬ前の心なりけり

854 我恋はまなく時なくよる浪に磯の松かねあらはれにけり

七夕後朝

孝詮

855 七夕のけさの別の悲しさを虫迄声を別てなく也

厚道

856 天の川渡りこし瀬も衣／＼の間にけさや渕と成らん

熙

857 この朝け置白露は七夕のあかて別し泪なるらん

有隣

858 別ては今朝より又や七夕の待夜遥にあらたまらん

定雄

859 七夕のけさの泪に天の川浅せも深く成やしぬらん

一枝

860 朝霧の立別てはあはぬ間のうきせにかへる天の川浪

嘉保

861 よひの間にいそきし天の川長も帰さの船は心してさせ

竹寿

862 七夕のけさの別のかなしさも又こん秋や楽しかるらん

竹弘

863 七夕にかしくる袖の露ければ別を惜む泪なるらん

豊苗

864 七夕のあふ夜は夢の心ちしてけさの現や悲しかるらん

風前薄

厚道

865 招く手もまたなよひかの初尾花心してふけ野への秋風

野女郎花

孝詮

866 誰を待もふけなるらん女郎花玉によそほふ野への夕露

垣朝顔

嘉保

867 野分せし庭の垣ほのやつれをも咲かくしたる朝顔の花

萩風

全

868 夕暮の萩の上はのそきより世の秋風や立はしむらん

露如玉

熙

869 月清く風治りて白浪の玉の花さく露の萩はら

萩露

一枝

870 糸萩にむすはれなから白露のもろきや己か心なるらん

恨恋

定雄

871 小夜更てかく迄までと問も来ぬ人のこゝろの恨めしき哉

古郷風

竹寿

872 たかうへし松にや有らん古郷を来て問ふ風の宿と成けり

山家雨

豊苗

873 山松のしけみかしたに住宿は落る雫に雨をしるかな

秋祝

全

874 打渡す田の面の稲のほに出て御代ゆたかにもみのる秋哉

閑庭秋来

有隣

875 風にまつ庭の浅ちをわけさせて道なき宿も秋はきにけり

876 さらにしも庭のむくらのわひしきに露さへ置て秋はきにけり

深夜擣衣

全

877 いかにして秋はきつらんわれたにも迷ふ斗の浅ちふの庭

深夜擣衣

全

878 今迄もおきてはうたし夜深きはたかねさめての砧なるらん

879 さよ更て空にきぬたの<sup>開ゆるは</sup>雲の衣を風やうつらん  
 野径露深  
 880 朝ことにかはく待てや絶ぬらん露深草の野路の行かひ  
 竹寿  
 881 置余る露分ゆけは村雨もとをらぬ野路に袖ぬらしけり  
 維足  
 882 風たにもまた分初ぬ程なれやのちに草はに余る朝露  
 厚道  
 883 宮きのゝ野への通路秋深み萩も袂も露にしほるゝ  
 萩盛  
 884 うつろはん後のかたみと萩の花今の盛を袖にすらはや  
 一枝  
 885 鳴虫の涙そへてや結ふらん草はに余る野ちの夕露  
 野萩  
 886 棹鹿のしからみふせぬさきにこそこのへの小萩はみるへかりけれ  
 庭萩  
 887 ことさらに移し植にし我庭のまかきの萩は露そしめたる  
 有隣  
 888 萩か花さけはかつゝおられけり行き絶せぬのちの玉川  
 有隣  
 889 かつゝにちるとはすれと萩か花けふはきのふに咲増りけり  
 月  
 890 月をみる外に心はなかりけり身をも思はす世をも忘れて  
 891 いとまなきよの中のみはみるといひて月みるよひは只こよひのみ  
 厚道  
 892 昔より幾世の人のなかめしもこよひの月にかはらさりけん

893 行水の早せにかけは乱つゝ空にしつけき秋のよの月  
 庭上月  
 894 庭の面にてれる月よの清ければかけはつかしき庵の灯  
 名月  
 895 幾人の詞の玉となりぬらん塵もきすなき秋のよの月  
 樹間月  
 896 長かれと思ふ月よも月かけのこのまの程はいそかるゝ哉  
 有隣  
 897 かつ隠れかつ顛れてこのまより見えすく月のおもしろき哉  
 898 おしみつる紅葉ちらせし秋風もこのまの月をみてそ嬉き  
 夜梅  
 899 いつこよりうかれきつらん月入て帰るさ迷ふよはの梅かゝ  
 籬菊  
 900 うつろはぬまかきの菊の色みれば花をよきてや霜の置らん  
 竹寿  
 901 菊みればまかきの山に仙人の千よふへき身となるこゝちする  
 有隣  
 902 呉竹のまかきの山に所えて千よをしめたる白菊の花  
 一枝  
 903 なれもまたかはらぬ色のかけしめて竹のまかきに匂ふ白菊  
 嘉保  
 904 今更になとか見すらんませの菊もとよりしめし宿のちとせを  
 維足  
 905 古里の庭のまかきはあれぬれと菊こそちよのあるし也けれ  
 定雄  
 野径露深  
 嘉保

906 昼さへも分行袖をしほりけり野ちのかやはら露深くして  
 名所松 有隣  
 907 万代の声さへそへて高砂の尾上の松に秋風そふく  
 初紅葉 全  
 908 初しほの初めよりして見る人の心は深く染る紅葉葉  
 月前雁 維足  
 909 初雁の声のさやかに聞ゆるはかならず月のあたりなるらん  
 遠山霧 嘉保  
 910 見渡せは薄霧立て墨染の夕山遠く成まさりけり  
 夜擣衣 一枝  
 911 遠つ人松の木のままの月更て夜寒の風に衣打なり  
 初紅葉 有隣  
 912 露こほす風の木のまに見ゆる哉初しほ染のけさの紅葉ゝ  
 不逢恋 定雄  
 913 幾年かあはてよるふる我恋の行末いかならんとすらん  
 恋涙 嘉保  
 914 敷妙の枕の海にみつ汐はみるめなき身の涙也けり  
 寄海恋 竹寿  
 915 青海も深さあさゝは有ものをなとか思ひの底<sup>みしらぬ</sup>~~しらぬ~~  
 名所松 有隣  
 916 さゝ浪のみとりの末に一しほの色はまきれぬ辛崎のまつ  
 祝言遍 一枝  
 917 たかりもわさほのかつら幾千よをかけていはゝぬ宿なかりけり  
 落葉多 竹寿  
 918 はつかなる一木の庭にいかなれは払へと尽ぬ落葉成らん  
 有隣  
 919 今しはし積るまゝにや何せまし払ふかひなき庭の落葉は

920 今朝はまた御めはてぬを梢より心なく散る庭の紅葉は  
 御民  
 921 散り来てもふもとの里のちり塚にふたひ山をなす木葉哉  
 景臣  
 922 吹あれし嵐のはてを今朝見れば軒端も庭も落葉也けり  
 熙  
 923 万代を願ふとなしに岩たゝむ南の山はとはに動かす  
 寄岩祝 竹寿  
 924 砂より天のは袖になておふす岩は尽せぬ齡なるらし  
 行路時雨 景臣  
 925 いそき行人のこゝろを木<sup>わりなくも</sup>の本<sup>あひてとむる</sup>にしむら村時雨哉  
 庭初雪 御民  
 926 あけ巻か玉をまたりしこゝろして袖にかけしる庭の初雪  
 薄暮述懷 熙  
 927 かそへしなこれもうき身に積りては我世くれゆく入相の鐘  
 契行末恋 熙  
 928 いつ迄か独歎の埋れつゝ逢熊川の名を頼むらん  
 月照寒草 有隣  
 929 霜より白<sup>も</sup>を見れば晴るゝ夜の月にや草は枯まさるらん  
 公広田 有隣  
 930 梅のはなひらく田つらにはゆるかなこゝろつくしの神の恵みは  
 千鳥驚舟 有隣  
 931 浪枕さはく千鳥の声す也磯<sup>わか</sup>辺<sup>のる</sup>に近く舟や行らん  
 932 ともすれは又よる舟に立千鳥あさりにあけるひまやなからん

933 難はかた出れはやかて入舟にあさるひまなく立千鳥かな  
 934 磯千鳥さはくや声の幾たひによりくる舟の数そしらるゝ  
 竹寿  
 935 磯によるあまの小舟のみなれ棹みなれながらも立千鳥哉  
 有行  
 936 明石かた出入舟のひまをなみ乱てさはくむら千鳥かな  
 冬恋 有隣  
 937 われにのみとちもはてなて思川残す氷もつれなかりけり  
 有隣  
 938 霜さへにさゆるそつらき待わひてぬれはねられしよはも有しを  
 古郷雪  
 939 松さへも生かはりたる古里に雪やむかしの色につむらん  
 940 八重むくらかるれは雪の古里や夏と冬とに埋みかやらん  
 941 かきくらし雪ふる里の此比は忍ひもらせるいにしへもなし  
 942 古里はもとより道もなき物を何をか雪のふりかくすらん  
 943 古郷はわか跡つくる庭の雪にとはれし昔思ひ出つゝ  
 944 荒はてし庭を埋て古郷を昔にかへす雪の色哉  
 945 古郷はかねてしつけく住なれて今更雪のさひしさもなし  
 946 中々に雪ふりかくせ古里は忍ふ昔の跡見えぬまで

春分隣  
 947 誰宿も垣の破れを結ふ也隣迄こし春をへたてゝ  
 千鳥驚舟 熙  
 948 難は江や出入舟のひまなきになれてもさはく浦千鳥哉  
 遠蔭  
 949 百舟のつとふ難はの浦ちとりうら安くすむ時やなからん  
 よする 維足  
 950 夜をこめてこき出る舟のうちの音に入江の衛夢そ驚く  
 一枝  
 951 されはとて立も離れす舟よする湊にさはく村ちとり哉  
 朝雪 全  
 952 朝彦のかけかきくらし降雪は滝よにちる花と見えけり  
 夕雪 熙  
 953 鳥のねはねくらにやみてしはし猶くれぬや雪の光なるらん  
 夜雪 遠蔭  
 954 闇のよも月に成ぬとみるはかり窓<sup>の戸</sup>あかく積<sup>ツモ</sup>る雪哉  
 松雪 全  
 955 契こし末の松山さなからに浪になしてもつもるゆき哉  
 初雪 維足  
 956 契置し人のとひ来てみる迄はしはしつみてよ庭の初雪  
 野雪 有隣  
 957 人はとく思ひ絶てや絶ぬらんわくれは浅き野への白雪  
 関雪 竹寿  
 958 よるも猶つもれる雪の光にてあかまの関の名こそしるけれ  
 時鳥 有隣  
 959 人しらぬ山にななきそ時鳥都にはまつあたらし初ねを  
 冬香

960 匂はすは咲すたれか白雪に冬こもりする梅の初花

垣残雪

961 梅の花きて見よとてや我宿の垣ねの雪の友を待らん

梅風

962 花は猶枝にあり共梅かゝはさそふ風にや残らさるらん

柳風

963 春風はくまも残さす吹ものを猶かたよるは青柳の糸

了

(佐賀県立図書館所蔵図 991/911.1(2) 45-156)

### ③『万延元季詠草』

(表紙) 万延元季詠草(三)

設替館

春日望山

1 薄くこき霞のまゝに近くなり又遠くなる春の山のは

春風

2 青柳の糸くりかへす春風は袖寒からすなりにける哉

3 朝日さす軒のすたれをかゝくれは袖あたゝかに春風そふく

山家烟

4 山里に富にし物は薪にて烟はかりを賑ひにける

5 住捨し宿かとみれは山里の哀ま柴の煙たつなり

柳

6 のとかなる春の心をみせかほに打とけゝりな青柳のいと

7 青柳のこのめ春風朝な／＼いとのみとりやそへて吹らん

雉子

8 さいたつまなかずむ野へにおふ物をたれを恋てか雉子鳴らん

9 やき残す野へにも雪はなかりけり若なつめとや雉子鳴らん

10 霞たつ内にきゝすの声す也若なつむ子やのへをわくらん

春哀傷

11 見し人のたらぬもしらて桃の花打ゑむさへもかなしかりけり

12 心あてにあるかとみれはなき人の倅さへも霞む空かな

月前無常

13 はかなくも世を常なりと頼むかな夜ことにかくる月は見る／＼

年内立春

14 暮あえぬ年はいづくに残るらんまたきに春は立初にけり

元日

15 朝壺の光まはゆく見ゆる哉誰もき替し春のたもとは

16 諸人の祝ふ詞にさそはれてのとけき春や立初むらん

17 <sup>△けさは</sup>のとかにもきたる春哉昨日迄おしにし年も~~ゆき~~は<sup>△</sup>忘れて

18 中々に音せぬ風やけさよりの春をしらするたより成らん

19 春たつときけはいかなる心にて<sup>それとしくなく</sup>物のうれし~~ま~~かるらん

子日

20 松の経ん千年を遠くふりはえて子日の野へに遊ぶ袖哉

帰雁

一枝

21 咲花をおのか越ちの雪とみてしははとまれ春の雁かね

忠順

22 かく迄も人のしたふをしらねはや越ちをさして雁の行らん

有隣

23 帰る雁よるはかりたにとまれとや月をは春のすませさるらん

嘉保

24 帰る山かへさに越て行雁を越には花の使とや見ん

孝詮

25 雁かねは越ちをさしていそく共花の盛をしはしましたなん

全

26 ふりくらす雨に翅も打しめりなこりおしけに帰る雁かね

花守

27 皇国の花をや思ひおとすらん月雪をみて帰る雁かね

<sup>またしらぬさくらを思ひおとしてや</sup>

重遠

28 佐保姫の引とく帯と見ゆる哉霞の袖につゝくかりかね

貞通

29 哀わかししたふもしらて古郷にたか待とてか帰る雁かね

春山田

有隣

30 おり居つる春の山田をかへされて古郷<sup>帰る時</sup>にとや雁のたつらん

山家梅

孝詮

31 山住の庭のあら垣あれなからのとかに通ふ梅の下風

惜落花

全

32 咲はちる花の習はしりながら猶おしまるゝ山さくら哉

毎年見花

全

33 立帰りくる春ことに咲花の色香は深く成まさりけり

河款冬

全

34 春雨に峰の山吹水越て浪のあや織井手の玉川

名所鶯

全

35 かけしけき小倉の梅のねくらより昼も出すそ鶯の鳴

山花盛

花守

36 折つれて帰るをみれは山桜棊の道も咲つゝきけり

遠村鶏

全

37 霧深き山ちに鳥の聞ゆ也棊の里は夜や明ぬらん

沢若菜

嘉保

38 雪は猶ふる野の沢の沢水に春を見せたる初若菜哉

余寒雪

全

39 さえかへる嵐の末に雪見<sup>え</sup>て霞かねたるみよし野の山  
 海眺望 全  
 40 いかはかり追風吹らん見る内に行舟遠く成にけるかな  
 暁寢覚 全  
 41 ことなくて聞ものとしし暁の枕につたふくたかけの声  
 浦春月 重遠  
 42 名に高き清見の浦の月<sup>ゆ</sup>かけ春はなにとて霞む成らん  
 遠見花 全  
 43 はるかなる高ねの桜いたつらに見つとはかりや家つとにせん  
 春山田 有隣  
 44 残りつるすみれはあすもつみにこんしはしかへすな春の小山田  
 待花 一枝  
 45 移しうえし若木の桜ことさらにことしの花の待れける哉  
 熙  
 46 春の日の永きこゝろを心にていつ迄さかぬ桜なるらん  
 嘉保  
 47 梓弓春たち初し朝よりはな咲きなほといはぬひそなき  
 忠順  
 48 いたつらに花待とは春の日のます／＼長きこゝちこそすれ  
 満春  
 49 春霞たな引山のいつこよりことしの花はにほひ初らん  
 閑中春曙 嘉保  
 50 世の中の春にはさすかも<sup>れ</sup>なから霞にこもる宿の曙  
 樹陰早蕨 嘉保  
 51 山守かゆるさぬ花の下かけにもゆるわらひは折てけるかな  
 蛙声幽 全  
 52 庭の面に鳴は蛙かやり水の音にまきれて声もさためす

花下送日 全  
 53 かへるさの家路忘れて昨日といひけふと暮けり花の下かけ  
 花下日暮 全  
 54 咲匂ふ花のねくらの鶯にいさや今宵はあひやとりせん  
 松下躑躅 全  
 55 つゝし咲く松かけにのみすみそめの夕日さやかに残りける哉  
 朝尋花 熙  
 56 桜花尋る山の峰にまつにほひ出たる朝日かけかな  
 雨後苗代 全  
 57 朝日かけ立出て見れは宵のまの雨に色そふ小田の苗代  
 夜深夢覚 全  
 58 更る夜に残る灯火かゝけてもはかなくきゆる夢のおもかけ  
 旅人渡橋 全  
 59 残る日の影を頼てたひ人の猶渡りゆく勢田のなか橋  
 遠山春月 全  
 60 打わたす遠の群山むら／＼にしらむ雲間の春の夜の月  
 水辺蛩 有隣  
 61 影みえてもゆる蛩に滝川の岩間の浪やわき増るらん  
 寄神祇祝  
 62 ひとつにや代を守るらんいすゝ川内外の宮はへたてなからも  
 春日山神のてかひの鹿の毛を数に取てやよを守るらん  
 鶯知春  
 64 春をしる心はまけしおとらしと梅さくけさは鶯もなく  
 夷とものわつらはしきを患て  
 65 かゝる時守れとてこそ天つ神国つやしろはいはひ置つれ  
 弟子共に書てあたへける

66 くもりなき人の心の鏡にそ神の恵はかけうつしける

野虫

67 露ならは我身も草にやとりせんふり捨かたき野ちの鈴虫

月前萩

68 月に吹風はしつけき秋の夜にさわくや萩の心なるらん

二星待夕

69 たなはたの待<sup>契りし</sup>あけふはきたれともけふのくるゝやけふは待らん

闇夜虫

70 秋のゝの月なき闇もはた織の声のあやをは隠さゝりけり

水鶏

71 夏のよはさしてもいそく関の戸をいかに明けよとたゝく水鶏そ

螢

72 つれなくも出にし月かをとめ子か手にとる螢いまたたらぬを

雨後螢

73 夕立のくれて晴にしたまり水そこしらせて螢とふ也

叢中螢

74 草村にくちにしもとの古郷を思ひ出てや螢とふらん

竹裏螢

75 竹のうちにえしもかくやとかくや姫光る螢に昔をそ思ふ

螢火遮路

76 よきゆけはよきゆくさきをさへきりて人あなつりにとふ螢哉

川螢

77 山川のみな上さしてとふ螢幾のほりてあけんとすらん

螢火似灯

78 道なきに道ゆく人の灯火とみゆるや野への螢なるらん

草螢似露

79 草のはに光るはなそと問よれば露にあらすと螢とふ也

螢火似漁火

80 漁火の数をくはへて浦風に浪のよる／＼螢とふなり

河辺古柳

一枝

81 しからみと成し河辺のふる柳老の波をはふせきかねつゝ

橋堦菜

全

82 里の子はいたくなつみそ花すみれ雲雀の床のあれもこそすれ

暮山松風

全

83 山里の常也けりと思へともゆふへさひしき松風のおと

羈中山路

全

84 里ちかく成やしつらんつゝらをりくる人かけの見へ初にけり

花如雪

忠順

85 春なから雪のふるかと来て見れは高ねに咲ける桜也けり

桃花如錦

全

86 此比の桃の盛りは山姫のさらす錦の色とこそ見れ

苗代蛙

全

87 苗代の小田に蛙の出初て今より後はいかに鳴くらん

折花

一枝

88 こゝろなく折てける哉桜はなかさせと老はかくれぬものを

折花

定雄

89 桜はな手折て帰る山風に袖をぬらさぬ雪そふりける

折花

有隣

90 一枝を手折て帰る宿までは猶心せよ花の夕風

折花

忠順

91 一とせの皆春ならはいつもかく花折かさし遊び暮さん

折花

良知

92 家つとに手折ていさや帰らまし花の盛りを見ぬ人の為

折花

長矩

93 ちりはては惜むかひなし山風のさそはぬけふや折てかさらん  
 春夜 一枝  
 94 一時を千々の金にかふるとも猶おしからぬ春のよは哉  
 春獣 全  
 95 武蔵鎧さすかにあれし芦跡も心ひかるゝ春の若草  
 春雨 長矩  
 96 若草の野へのみとりも春雨のふりにしけふそ色増りける  
 春旅 全  
 97 梓弓春の山路を越て行く旅ねは花の陰に宿らん  
 春夕 良知  
 98 花散て今はさひしく永き日に待えてうれし入相の鐘  
 春鳥 全  
 99 朝またき春の山路をこえ行は思ひかけなき子規鳴也  
 春野 定雄  
 100 うら／＼と霞こめたる春の野の朝日にほふ鶯のこゑ  
 春草 全  
 101 打しめりふるともわかぬ春雨に緑深むる野への若草  
 春山 有隣  
 102 静なる山にては猶永き日を花たになくはいかてくらさん  
 春祝 全  
 103 いつとても楽しけれとも桜さく春こそ君か御代のみよなれ  
 夕雲 全  
 104 夕へ／＼かならず帰るしら雲のねくらや遠の高ね成らん  
 春恋 忠順  
 105 春雨のふるにつけても妹思ふわか恋草そ弥しけりゆく  
 新樹 忠順  
 106 月かけもうとくなる迄庭の面の若葉のかけそ茂り合ぬる

107 梅桜春は昔と成はてゝかほる若はに朝風そふく  
 有隣  
 108 しけりあふ若はか中にいろしろう薄もえきなる森の楠  
 雲間夏月 忠順  
 109 夕立のはれし雲間にもれ出る光り涼しき夏のはの月  
 螢火似灯 全  
 110 灯のかけかと見れは草のはにひとりとまりし螢也けり  
 依橘客来 有隣  
 111 忍ふらん昔しの袖は我ならてとはれにけりな宿の橘  
 袖上菖蒲 全  
 112 宮人の袖のあやめも立花におくれぬかそとかに匂ふ也  
 五月雨 忠順  
 113 かきくらしふるは習ひの思へともさてもわひしき五月雨の比  
 良知  
 114 五月雨の小やみし空の雲間よりひそかに洩るゝ夕月の影  
 貞長  
 115 水まさる川そひ柳うき沈み浪に乱るゝ五月雨の比  
 有隣  
 116 ふつくえにことく過こし怠りをいさめかほ成る五月雨の雨  
 熙  
 117 いつ晴れん限りもしらすたれこめて日数ふるやの軒の五月雨  
 嘉保  
 118 たきそふる今朝のうけゝのけふり迄打しめりゆく五月雨の空  
 新樹  
 119 やかてちる花よりは猶夏木立なかき緑りのめてらるゝ哉  
 山家時鳥 有隣

120 我山にきゝはふるせと時鳥とふ人のためけふはなかれん  
 扇不離手  
 121 夏の日は何を取手も物うきを扇はかりははなたさりけり  
 沢螢  
 122 沢水のかつみのかけにかつはみえかつはかくれて螢とふなり  
 島螢  
 123 島かけのくるゝ螢をみてよりやいさりの舟はかゝりたくらん  
 螢火照橋  
 124 川の上にとまる螢を杖にして闇にも橋をわたる里人  
 新竹  
 125 今しはし波な落しそ若竹はわが枝おもみふしやおれなん  
 新秋  
 126 目には露耳には風を改めてけさいちしるく秋はきにけり  
 一葉落知天下秋  
 127 昨日迄猶疑し秋風をけさは定めてちる一葉かな  
 山家時鳥  
 128 なれたにもなけ時鳥山里はとひこし人にもてなしもなし  
 田家時鳥  
 129 時鳥今はなかなん我門のむきの秋風ふきたちにけり  
 連日五月雨  
 130 五月雨に朽や果なん賤のおかみのをほす日は一日たになし  
 五月雨  
 131 散迄はやましと思ふくりの花長くもつゝく五月雨の空  
 五月雨  
 132 五月雨は晴てみするも口なしのくちぬかきりはいつはりにして  
 雨中瞿麦  
 133 撫子を雨のうつ日はをのか身をたゝかるゝよりくるしかりけり

134 玉くしけ明るに早き夏のよは八声の鳥も声残すらん  
 夏鳥  
 135 短よは明るを松のねくらにもけさねふたけに鳥なくなり  
 連日五月雨  
 136 かゝなへて幾日かふれる新<sup>五月雨に</sup>はりのつくはね<sup>雲かくれつゝ</sup>かくす五月雨の雲  
 水辺螢  
 137 くれぬれは池の浮草立はなれさそふ水ありてゆく螢かな  
 白雨晴  
 138 夕立の過行雲の早ければぬれぬ所もありて晴けり  
 雨後夏月  
 139 夕立の雲おさまりて照月に光る瓦の露の涼さ  
 さま／＼なる論を聞て  
 140 世の中は心々のことのはをいつれよしとかわれは答ん  
 夕立早過  
 141 走りゆく雲の足とき夕立にこ<sup>め</sup>かけは車<sup>下</sup>ましめらさりけり  
 142 夕立の過しなこりの雲にてこかけは今そ打しめりける  
 ある恨ありて  
 143 年々に人のそしりの増る哉我名の<sup>高</sup>ひろくなるにやあるらん  
 夕恋  
 144 さらにまた契り<sup>も</sup>をおかぬ夕へまで我にまたするさゝかにの糸  
 145 袖の上のひるのまきれのしつまりて恋しさかへる夕暮の露  
 扇  
 146 あつき日は時にあふきのにくけにも世に我のみと広かりにけり  
 雲

147 初めより雲に心はなかりけり行もとまるも風に任せて  
 春野  
 148 春日野の雪けの野へは焼捨し古根青みて春風そふく  
 舟中玩月  
 149 さす棹ののほり下りにしたかひて舟をはなれぬ月のさやけさ  
 立秋霧  
 150 ときはなるみとりの空もけふよりの初夕霧に秋やしるらん  
 七夕橋  
 151 秋立ていくかもあらぬ七夕の紅葉の橋や名のみなるらん  
 晩夏水  
 152 行水のとまりもあらず夏くれて涼しく成ぬかも川波  
 七夕霧  
 153 立初てまた薄くとも星合の中なへたてそ天の川霧  
 萩  
 154 山姫の秋の衣は裾野より染はしめたる萩の初花  
 鹿声添涕  
 155 聞はこそ涕もそふれ鹿のねをへたてはてゝよ夜はの浮霧  
 古郷七夕  
 156 古郷は人こそすまね七夕の祭りは絶ぬさゝかにの糸  
 田家秋  
 157 秋の田はみになりぬらし賤の男か引やなるこの音もたゆまず  
 立秋河  
 158 風ならぬ水にも秋や立田川岩こす浪の音のすゝしさ  
 夏夜  
 159 蚊遣火の煙のうすくなるまゝに更る軒はの風のすゝしさ  
 雲  
 160 むかつをも又飛越て行雲のとゝまる山やいつこなるらん

水鶏何方 照  
 161 小夜深き月に水鶏のおとするは誰か門の戸を叩くなるらん  
 曉遠情 全  
 162 寢覚するこの有明にしのふそよ今はむかしの須磨の月影  
 瞿麦常露 良知  
 163 おき渡す露もいろこく見ゆる哉妹か垣ねの床夏の花  
 松下納涼 全  
 164 夕立の名残すゝしき松かけは秋のこゑにや風のふくらん  
 山新樹 有隣  
 165 浅みとり色こく成ぬ夏山のしけるこ立をよそにしられて  
 名所鵜河 嘉保  
 166 やみしらぬ月の桂の川長はいつを時とやう舟さすらん  
 嶺照樹 全  
 167 さつ人のともしさすまも夏山のみねの火くしのかけそしら<sup>める</sup>る  
 採早苗 忠順  
 168 此秋もゆたかなれとて千町田にわれおくれしと早苗とる也  
 遠夕立 貞長  
 169 流れる水のにこりにしられけり遠山もとの夕立の雨  
 旅宿夢 全  
 170 うき旅と思はさりけり故里に行あひやすき夢を頼めは  
 郭公数声 貞長  
 171 此比はまつともなきを里なれて百千返り鳴く山ほとゝきす  
 樹上蟬 有隣  
 172 風絶て動くかれはもなかりけり梢の蟬の声はゆすれと  
 夕立過 全  
 173 道すからぬらす袂はさすかにて晴るはおしき夕立の雨  
 遠夕立 全

- 174 鳴神の<sup>声</sup>音をは<sup>の</sup>る<sup>み</sup>め<sup>く</sup>に音つれて人にまたする夕立の雲  
樹上蟬 嘉保
- 175 夏かけの青葉にくもる梢より打時雨たる蟬の諸声  
夕納涼 全
- 176 一つのまに秋や通ひて煙火のまたゝくはかり夕風そふく  
夏夜雨 全
- 177 東屋のまやの煙火なひかせて涼さ送る夏のよの雨  
樹上蟬 忠順
- 178 聞に猶暑をそえて梢より絶す落くる蟬のもろ声  
定雄
- 179 夕立ははれて梢をちる露に声すゝしくも蟬の鳴らん  
良知
- 180 ふる雨も晴て涼しき梢より声嬉しけに蟬の鳴らん  
依橋宿来 有隣
- 181 忍ふらん昔の袖は我ならてとはれにけりな宿の橘  
袖上菖蒲
- 182 宮人の袖のあやめも俤におくれぬ香そとかに匂ふ也
- 183 さ月待花橘にさきたちてあやめや袖のかに匂ふらん  
雲間夏月
- 184 夕立の晴し雲間の月かけや涼さ招く玉と見ゆらん  
寄松祝
- 185 岩たらむ大城の松は万代の君かすみかのしるし也けり  
偈
- 186 わか悟りわけはしらねと疑はすうたかはね共わけはわくらす  
述懷
- 187 十とせわか若かりせはと思ふ哉世は今よりそ忍ふもちすり

- 188 此ゆふへ雲にはかはる色もなしうきや恋する心なるらん  
夕恋 萩風
- 189 一つのよか安くぬるへく聞なれん夢おとろかす萩の上風  
家なきことをいたみて
- 190 一枝にことたる鳥もわか宿とかねて定めにぬれはなりけり  
樹上蟬 長虎
- 191 夏山の茂き梢に鳴く蟬の声のしくれそ涼しかりける  
貞長
- 192 久堅の天津空にやひゝくらん梢も高き蟬のもろ声  
籬夕顔 忠順
- 193 賤か屋のやれし籬も見えぬ迄咲かくしたる夕顔の花  
松風五月寒 定雄
- 194 夏の日も緑りの松の枝にふく風はかり杜涼しかりけれ  
五月雨晴 長虎
- 195 五月雨のはるゝ雲井の時鳥出にし月や珍しとなく  
窓前蛩 全
- 196 涼みすと端居しおれは窓近く風にふかれて蛩とひくる  
夕立雲 良知
- 197 見るうちに嶺れて走る雲の峰やかてやふらん夕立の空  
夜河篝火 全
- 198 山のはにかたふく月や松浦川鵜舟のかゝり見え初にけり  
蚊遣火 全
- 199 宿ことに蚊遣の煙り棚引てしはしくはくもる夕月のかけ  
聞時鳥 貞長
- 200 時鳥鳴くこゑのみはうは玉のくらき闇にもしるくそ有ける  
蚊遣火 全

201 夕まくれたつるけふりに軒ちかくすたく蚊の声遠さかり行  
     夏草露 全  
 202 朝な／＼露のしら玉ぬきとめて結ふ斗りに茂る夏草  
     海辺夏月 全  
 203 舟うけて見る程もなく更にけり難波の蘆のみしかよの月  
     夜河篝火 全  
 204 鶉飼舟焚つらねたる篝火にのほる河瀬は闇なかりけり  
     夕立雲 全  
 205 松かけの雫もいまた絶ぬまに遠さかり行夕立の雲  
     有隣  
 206 天が下いまた夏なる世の中にあやしや松の秋風の声  
     よの中はいつも 有隣  
 207 端居する袖口広くふきいりてはたへにとをる風の涼しさ  
 208 袖の上に夏のみるめを忍ひつゝ色なき風の秋通ふなり  
 209 涼きは秋の物とててらす日に忍ふか風の暮てふくらん  
 210 世の人のあつきうれへもときぬへし南の風のかほる日比は  
     水辺夏草  
 211 川風や涼しかるらん咲花も近けにみゆる峰の夏草  
 212 水にふく風は秋にや成ぬらん夕霧おもる峰の夏草  
 213 五月雨にみかさ増りし跡みえて濁りにしめる峰の夏草  
     山路蟬  
 214 梢より谷の早せの声するは山ちの蟬のさわく也けり

215 彦星は天の川風涼くもくるゝ待てや舟出すらん  
     七夕 有隣  
 216 この夕へたらひにくみし水よりも愛しく見ゆる星合の空  
     曉惜月 有隣  
 217 諸共に心合せておしむへき人は夜深き山のはの月  
     夜初雁 長虎  
 218 なかむれは空のけしきも秋見えてこよひそ渡る初雁の声  
     七夕 孝詮  
 219 いつのよに結ひ初けん天の川かはらて深き星の深き契は  
     貞長  
 220 天の川いかななかれて年ごとに星の逢瀬のかはらさるらん  
     維足  
 221 此夕雨はふりけり天の川わたらて星や袖ぬらすらん  
     立秋 孝詮  
 222 秋来ぬとゆふ斗りにや久かたの空に涼しき天の川風  
     新秋露 全  
 223 置初て秋をしらす白露そ心して吹け萩の上風  
     河上霧 全  
 224 夕霧のたへま／＼にあらわれて淀の河瀬を下る柴船  
     秋夕雨 維足  
 225 薄墨の夕をかけてふる夜寒覚ゆる秋の雨哉  
     山月明 治親  
 226 おく山の茂りし木々のたえ間よりもりてかけさす月のさやけさ  
     故郷萩 全  
 227 秋風も涼しく成りぬ古さとの庭の小萩も花ぞ咲くらん  
     虫声幽 貞長

228 なく虫のこゑも更りて聞ゆなり枕にわたる萩の上風  
 海辺擣衣 全  
 229 秋ふかくなるおの浦の蟹人も塩馴衣今やうつらん  
 野外草花 全  
 230 住人の有とも見へぬ秋の野に花のにしきを誰かおるらん  
 暮山鹿 一枝  
 231 夕霧のたつ田の山の棹鹿ははれぬ思ひをねにや鳴くらん  
 秋夕雨 貞長  
 232 さらてたに秋の夕へは涼しきに風さへさそふ雨そ身にしむ  
 新秋露 全  
 233 日くらしの鳴し涙や落つらんや<sup>め</sup>置そ<sup>にける</sup>秋の夕露  
 七夕 一枝  
 234 七夕は手向の糸の一筋に又の逢瀬を契る成るらん  
 有隣  
 235 心して月もとくいれ七夕のとしに一度忍ひあふよそ  
 全  
 236 いかならんきかまくほしのむつこともたらひの水にうつらましかは  
 全  
 237 たまさかにくれまつ星はいか斗り今日の一日の久しかるらん  
 良知  
 238 天の川浪くれそめて彦星の逢せうれしきつまむかへふね  
 山家水 有隣  
 239 住わふる我山里にとむ物はかけひに余る水<sup>にそ有ける</sup>  
 夕虫  
 240 よるをのみ秋とや虫は思ふらん夕くれよりそ鳴初めける  
 241 きり／＼すふけては余りかしかまし聞に程よき夕暮の声

朝顔  
 242 閨の内はまたくらきより咲出て人にまたれぬ朝顔の花  
 243 よをこめて咲朝顔の初花は露より外にたれかしらん  
 244 秋といへは長からぬよの明るまもおそしとやさく朝顔の花  
 245 置余る露重きまはさもあらてちりてしをるゝ朝顔の花  
 246 をくらきに咲初しよりみれは又盛ほとある朝顔の花  
 247 ほのくらき閨の戸あけて朝顔はよる咲物とけふみつる哉  
 248 さばかりに人めや忍ふ閨の戸の明ぬまにさく朝顔の花  
 249 はかなくもみゆる物から中々に露にしをれぬ朝顔の花  
 250 さばかりもむすへる露を朝顔の花の下紐いかてとくらん  
 山家嵐  
 251 の<sup>山里の夜は</sup>かれ<sup>こし</sup>山の嵐に絶てけり浮世に帰る夢のうき橋  
 252 物はみなわか心そとする時はよにも人にも何かもとめん  
 253 よしあしにかゝはらすして定めなく人の心は迷はさらまし  
 見月  
 254 <sup>はつかしな</sup>人<sup>み</sup>むかふ我身のおろかさも月の鏡<sup>に</sup>のかけ<sup>やうつらん</sup>に<sup>は</sup>すな

255 思ふ事月の鏡にうつりなはみる人<sup>の数</sup>にかけやかはらん  
 玉宝妙容大婦追悼  
 256 荻かえの露ははかなく消にけり玉の姿を月に残して  
 見月 嘉保  
 257 見る人の心すめとや久かたの月の鏡はみかき出らん  
 貞長  
 258 ともすれは月にも雲のかゝる哉空も浮世の内にや有らん  
 貞通  
 259 永き夜の思ひを何になくさめん照そふ月のかけなかりせは  
 一枝  
 260 風そよく軒はの荻のおとやみて露にしつまる月の影哉  
 庭萩 全  
 261 あれにける庭の籬は糸萩の露の結ふにまかせてそ見る  
 朝萩 全  
 262 小鷹人朝とくわけし跡見へて一筋なひく野への萩原  
 月前萩 貞長  
 263 此草のゆかり求て秋のよの月も宿かる野への萩原  
 萩隠径 全  
 264 分てゆく人にそことはしられけり萩に埋もる野への細道  
 萩移衣 全  
 265 いくはくの人の衣に移けん往かひ絶ぬ野路の秋はき  
 行路萩 全  
 266 道の辺にいくその袖はぬれしかと猶も色こき秋はきの花  
 故郷萩 全  
 267 秋萩の古枝に花は咲ぬれとむかし住にし人は見へこす  
 萩盛 全  
 268 白露も色かへけりな秋はきの枝を残さぬ花のさかりは

269 今よりは鹿の鳴音を聞ぬへしやゝ咲初る秋<sup>野への</sup>はきの花  
 萩始開 全  
 旅行翫萩 全  
 270 暮ぬ共さきへはゆかし秋萩の花をこよひの枕にはして  
 萩欲散 嘉保  
 271 棹鹿の鳴く音かなしき朝たよりうつろひ初つ萩か花つま  
 風前萩 全  
 272 白露にかたなひきせし萩かへのかへる斗の朝風そふく  
 折萩 全  
 273 野ち<sup>深く</sup>し<sup>置く</sup>けく<sup>置く</sup>白夕露に袖ぬれてにほふ真萩を折てける哉  
 荻花待人 全  
 274 独りのみみるか惜しさに秋萩の花の軒戸に人を待けり  
 萩散風 全  
 275 露のみそまかせし物を秋萩の花をも風のちらしける哉  
 野萩 貞通  
 276 立とまりしはし見よとや行袖をひくまの野への糸萩の花  
 雨中萩 全  
 277 きのでけふ降続たる雨の内に色もあせなて咲る秋萩  
 名所萩 全  
 278 棹鹿の妻こふ声のきこゆるはま野の萩原咲や初らん  
 夕萩 全  
 279 夕風の咲のまに／＼かたよりて乱にけりな糸萩のはな  
 萩露 全  
 280 萩の花咲初しより朝夕の露の光もそひてみゆらん  
 萩盛 有隣  
 281 昨日けふ鹿のね近し秋の野の萩の盛りに成やしつらん  
 萩露

282 小萩原花さくみれは秋の野の露も今こそ盛りなりけれ  
     朝萩  
 283 棹鹿の鳴にし野へやこゝならんみたれてみゆるけさの糸萩  
     夕萩  
 284 あすよりはうつろひやせん此夕露さへ深き萩のいろかな  
     野萩  
 285 人のみぬ野への秋萩いたつらにちるをおしとや鹿のなくらん  
     庭萩  
 286 朝な／＼ちりてもこれにさきのほる盛り久しき庭の萩かへ  
     故郷萩  
 287 柴の色はかはらて古郷にゆかりわすれぬ秋萩のはな  
     名所萩  
 288 名に高きゑそか錦をならひてや咲初めにけん宮きのゝ萩原  
     しるにきく  
     や雪ふらん萩も名高き  
 289 さくまゝにあとや絶らん糸萩の糸斗なる野への細道  
     萩隠径  
 290 むすふへきひまたに晴よ此比の雨に乱し庭の糸萩  
     雨中萩  
 291 折とれはまかきに置く露なから袖にこほるゝ秋萩の花  
     花欲散  
 292 心して露たにけさは軽くおけ散なんとする庭の秋萩  
     行路萩  
 293 草枕むすひてやみん糸萩の花咲く野路は旅ならねとも  
     隣家萩  
     貞長  
 294 こゆるとも誰かとかめん我宿をへたつ垣ほの秋萩の花  
     隣家萩  
     一枝

295 中垣のこなた迄こそなひきけれ隣へたてぬ秋萩の花  
     山家虫  
 296 有とたに人にしられぬ山里にたれを友伴有隣とか松虫のなく  
     旅宿虫  
 297 旅ねにも同心の友は有て明行空をまつ虫のなく  
     野虫  
 298 草よりも早く人めはかるゝ野にたれきけとてか虫の鳴らん  
     原虫  
 299 耳にみつ虫のなくねに浅ち原浅くはあらぬ秋を社きけ  
     夜虫  
 300 昼のまは何にいとまのなかるらんよるのみ虫のねにたてゝなく  
     深更虫  
 301 灯火にいるを追ひつる夫ならしよはの枕に近き虫のね  
     月前虫  
 302 更るとて聞捨かたき虫のねを心もあらぬ月そかたふく  
     寄庭虫  
 303 ねさめしてきけはよ深き露の内にむもるゝ虫の声ほか也  
     古郷虫  
 304 昔みし里はそこ共白露のふりにふりたる鈴虫のこゑ  
     庭虫  
 305 秋のよの更行まゝに我宿の庭を野になす虫の声哉  
     夕虫  
 306 夕日かけくたれはのほる草のはの露まつ虫や鳴初むらん  
     杜頭虫  
 307 なれも又願ひ有てや神垣にふりたてゝなく鈴虫の声  
     野径虫  
 308 夕間くれ同じ道ゆく賤のおに名をきゝてきくへの虫のね

籬中虫

309 のわきしてやれしまかきに鳴虫の内外へたてぬ声を聞哉

寝覚虫

310 秋更て独ねさめの長きよに鳴虫の名をかそへてそきく

雨夜虫

311 月くらき雨の雫のつく／＼ときけはわひしき虫の声哉

庵虫

312 こにこめて都の人や聞ぬらんあなかまのへの庵の虫のね

館舎虫

313 ねもやらず夜をは明して虫のねに聞やかゆらん朝政事

虫声所々

314 虫のねも悲しく成ぬ散残る野への小萩の所々に

虫声入琴

315 秋のよの更行露の玉琴に声合せたる中庭の松むし

聞虫

316 おもしろき声もいつしかさよ更て悲く成ぬ庭の虫のね

月前思

317 一とせの老をくはへてこそよりは月を宿せる袖の露けさ

月前鳥

318 月かけに門田の面をみ渡せは秋風吹て嶋のなくなり

月前木

319 月かけにみれはくらまの奥深き杉のこのまもあらは也けり

月前草

320 物思はぬ草の袂もいかなれは月には露にぬれ増るらん

月前露

321 秋のゝに月の涙のちる露は雲の袖にやつゝみかぬらん

月前水

322 池の面にうつせるかけのさやけきは月と共にや水も澄らん

月前獸

323 うは玉のよる出る日はあやしとやさやけき月に犬のほゆらん

月前雲

324 うき雲や過るたひ／＼みかくらんます／＼月のすむこゝちする

月前山

325 行先にたちふさかりてへたてゝも山のかひなく月や入るらん

月前霧

326 更行けは高ねの月の影すみて霧は禁の物となりけり

月前竹

327 庭の面に出て見よとや招くらん月かけのほる軒の呉竹

月前萩

328 庵人はよるの錦といはゝいへ月に色そふ秋萩の花

幽栖秋月

329 さひしさに馴にし宿もとふ人のあらはと思ふこの月夜哉

風前月

330 昔みし友は絶たる草の庵をいまた忘れぬ月やとふらん

風前月

331 さやかなる月より風や出ぬらん心の塵も払ひてそふく

風前月

332 心有て風は西ふく空の海にさてもなつまぬ月の舟かな

菊

333 さよ更て西吹風にかたふくは月のみふねやまきり行らん

菊

334 山人の折手に落し露よりや菊は千年の名に流けん

菊末開

335 霜をけとあせさるいろやたのむらん心永くも咲ぬ菊かな

菊

貞長

336 春秋の千草のはてに咲出て霜にあらそふ白菊の花

夜擣衣

全

337 秋寒み衣かりかねなく夜半にうつはいつこの砧成らむ

暮秋雨

全

338 暮やらぬ秋のうきよの神無月時雨の雨をさき立てけり

暮山霧

全

339 夕日影匂ふ紅葉もみるへきを霧立こめてくるゝ山本

菊

貞通

340 雪ならはまかきのみにはつもるらしと思へは庭の白菊の花

忠順

341 手にかけてわかそたてたる菊なればよその花より色増さらなん

紅葉浅

同

342 露霜のかくや薄きもみち葉は命斗の色にそ有りける

思

有隣

343 いつまてか耳に残して思ふらん梢を過し風の一こゑ

詠草を

344 すかたなきかたちをかける水茎に声なき声を残すことのは

詠草を

345 何をかも絶す取かへ引かへてわれにはもたぬ物思ふらん

吉武氏新宅をいはひて

346 ことしより又改めて宿のちよをやかそへそむらん

立かへし  
月前懷旧

347 思ひ出る昔は遠くへたゝれと猶めの前に月は澄けり

落葉

348 立田山唐紅にふる雪は嵐のさそふもみちなりけり

山辺日州の釜伝を祝て

349 金持になりこむ釜のやいかまのとかまてはらへ悪事さいなん

同人大黒躍込夢を祝ひて

350 次第／＼穀を取込此宿はこめの山辺やつみかさぬらん

紅葉

351 もみちするみれは名をたにしらぬ木も庭に移して植んとそ思ふ

352 みよしのは神代よりして咲花のちりつもりてや山となりけん

月前懷旧

353 ふるさとゝ聞はしつれときてみれは吉野は花の都なりけり

昔みし月も今より梓弓おしてはるかにしのふ夜はかな

354 我心竹につふてのから／＼とかくはかりにてみも骨もなし

よくきけは心の外に声もなしつふてもならず竹も音せず

355 しうる事出来る事のみ願ひなは自由自在の浮に成へし

冬月

356 なかむれは雪をもよほす空さへて月さへ雲に冬こもりせり

暁立春

357 君かよにあふを嬉しといそきてや暁深く春の立らん

溪余寒

360 打出し氷のひまも春寒みふたゝひとつる谷の下水

檜原霞

361 かすむ也檜原か奥も杣人の跡尋てや春のきつらん

杜霞

362 楠のち枝も幾千重隔つらん信田の森のかすむ此比

名所鶯

- 363 雪消ぬ飛火の野守出てきけけさそ初ねの鶯の声  
若菜
- 364 猶残る雪かとみれば白妙の袖ふりはへて若なつむ也  
草漸青
- 365 春の野に色増りゆく若草や道絶ぬへき初めなるらん  
里梅
- 366 冬こもる窓の朝風冴ながら咲や難はの里の梅かえ  
門柳
- 367 春風のはんしるへに兼てより植てそ待し門の青柳  
初花
- 368 あすあきてまたはなへてに成ぬへし人はけふとへ庭の初花  
朝花
- 369 見るとみし夢のこかけの花やこれけさもうつゝのこゝちこそせね  
峰花
- 370 朝日さす峰に匂へる色みれば雲とさくらはまきれさりけり  
島花
- 371 のとかなるすまの浦舟こくまゝに島隠れゆく花をしそ思ふ  
遅桜
- 372 散残るけふこそ人に見られれさきおくれにし桜なれとも  
峰卯花<sup>浜春月</sup>
- 373 まさこちのしらゝの浜の月かけは春しもかけやくもらさるらん  
湖帰雁
- 374 夕まくれかすむかたゝにかけ消てしかの浦浪帰る雁かね  
松藤
- 375 松のきる春の衣か紫のふしをみとりの袖にかさねて  
苗代

- 376 消てこしいつくの谷の雪ならん里に引たる苗代の水  
山吹
- 377 折かさす其間斗も貧しさを隠せこかねの山吹の花  
暮春
- 378 春くるゝ道はしらねとちる花の行へやそれと打みられつゝ  
残花
- 379 時わかぬ松にまきれて山桜遅くやさきしをくれてやちる  
峰卯花
- 380 夕立のみかさはいまた白浪の峰をあらひてさける卯花  
扇 一枝
- 381 捨られんつまでもしらてまたきより扇は秋の風さそひけり  
親芳
- 382 とるからに袂すゝしくおほゆるは秋や扇の内に立らん  
忠順
- 383 あつき日も扇をとれば久かたの空にしられぬ風そ涼しき  
簾
- 384 手になるゝ扇のつまにやとりけり空にしられぬ閨の秋風  
有隣
- 385 白妙の扇の風の涼きは雪の色よりふけはなるらし  
六月祓 一枝
- 386 みそき川さゝれの上を行水になかれぬとかはあらしと思ふ  
短夜月 親芳
- 387 すゝみすとしはし端居の程もなく傾きけりな短よの月  
庵五月雨 忠順
- 388 何を見てなくさめにせん幾日かもふりて淋しき庵の五月雨  
垣夕顔 簾
- 389 人を見ぬ賤か垣ねにあやしくも何よそふらん夕顔の花

窓前螢 有隣  
 390 山のはにかたふく月や入ぬらん窓の螢のかけそほのめく  
 御祓 簾  
 391 みそきするならの小川の夕風に暑も夏の日くらしそ鳴  
 扇 良知  
 392 手にならす扇の風のなかりせは夏の暑さをいかてしのかん  
 有行  
 393 堪かたき夏のあつさを秋になす扇の風そうれしかりける  
 有隣  
 394 高ねより月の光のすゝしさを吹おろしたるよはの秋風  
 月前雁  
 395 月にふく夜は秋風身にしめて衣かりかね鳴てきにけり  
 月前鹿  
 396 月かけのかたふく峰の霧の内に妻こふ鹿も声しめるなり  
 山路紅葉  
 397 立田路や色を深めて紅葉のかつちる露もかはくまそなき  
 398 いつかたも秋や悲き野には虫山には鹿の声たてゝなく  
 399 常世にも思ひたつらし秋のゝにかりを松むしなき初めけり  
 里擣衣  
 400 深草の里の夕霧立こめて人こそ見えね衣うつなり  
 待時鳥  
 401 山里のたよりきかすは時鳥いまたまたてそぬるへかりしを  
 浦時鳥  
 402 淡路嶋通ふ迄との関の戸に名のみやすまの山時鳥  
 遠時鳥

403 一声はよその里なる時鳥きかすといひて猶や待みん  
 瞿麦  
 404 宿ことに咲はすれ共手にかけてわか撫子を哀とそみる  
 岡辺早苗  
 405 同し時まきつるたねも日影さす岡への早苗ふし立にけり  
 樹陰照射  
 406 松かけに待よ幾よかともすらんあふにともしき峰の益らお  
 浦五月雨  
 407 幾日にかなるをのあまの五月雨にかつかぬ袖もひるひまそなき  
 鵜川簞  
 408 さすさをに乱るゝ鮎の行さきやさはくゝりのあたりなるらん  
 軒蘆橘  
 409 見えしその昔の夢は橘の軒はの風や夢にいるらん  
 旅夕立  
 410 夕立の過るを松の下かけに同旅ゆく友やゑつらん  
 野螢  
 411 今更に蕨ももえぬ夏の野を何のためゆく螢なるらん  
 梅  
 412 梅にふく風はたもとに猶さへて雪のかはれる枝かとそ見る  
 413 梅花咲そふまゝに朝な／＼かほり深むる庭の春風  
 414 吹としも覚ぬ袖に梅かゝのかほるや風のわたるなるらん  
 415 今朝よりもかをり深めて吹風は軒はの梅の咲やそふらん  
 416 咲そともまた白雪の梅かへに花のかしるき庭の朝風

春山家

417 山里の垣ねに草はもえなからかれし人めは春としもなし

昔住し家に行て

418 年を経て忘れやすらんわすれすは庭の桜よ昔かたらへ

庭春雨

419 うちしめりふる春雨にすみもあへすにこりも果ぬ庭のいけ水

旅宿春雨

420 旅枕ね覚めしつかにふくる夜の軒のしつくや春雨の空

幽栖秋月

421 草の庵の露の月かけやゝひえて人めさえこそうらかれにけれ

月前風

422 みるまゝに心のちりもはらふ也月より出て風や吹らん

寄松祝

423 山よりも高き齢にくらふれは千とせの松はおさなかりけり

424 千とせへん松のみとりも万代の君をうらやむ色にみへけり

425 行末のちよもたかはし松の名の十つゝ八の君かよはひは

月前風

426 さよ更て月のみ舟のかたふくは西吹風やまきり行らん

427 心ありて風は西ふく空の海にさてもなつまぬ月の舟哉

寄松祝

428 万代の君には何をたゝへみん松の齢もたゝ千とせのみ

429 万代の君とくらへてかそふれは松もわつかの千とせなりけり

430 常はなる松も千とせの限りあり君か万代何に契らん

曉鶯

431 あかつきのかねにや夢をさますらんねくらなからに鶯のなく

水郷春雨

432 ことしけき都のたつみ住侘てよを宇治川に霞む月哉

春雨

433 かくはかりすみよき御代を春のよの月は何とてかけくもるらん

柳露

434 露にさへしられぬはかり青柳のいとしのひて春風そふく

古郷春雨

435 古郷に月も昔しをしのひてや涙くみたる影とみゆらん

古郷春雨

436 山遠く霞て雨のふる里をとへはさひしくかはつ鳴く也

春月幽

437 かねの音も月もかすかに成にけり更行まゝに霞深めて

河上春月

438 かけうつす川せの浪はあらへとも猶すみやらぬ春のよの月

寄松祝

439 ちとせへて後に残れる君か代は松もいかてかかそへしるへき

440 限りなき君かよはひは千年へん松といふ共しらしと思ふ

連日若菜

441 昨日こそ出てつみしをけさみれは垣ねの若菜又もえにけり

年内立春

442 春のたつ空さりけなく降雪やくれあえぬ年の命成らん

若菜

443 けふにのみ限る若菜か春の野にあすもつむへくつみ残さなん

江上霞

444 夕霞み入江の舟のかちの音はつはらにきゝて見えぬ春哉

野鶯

445 春の野にあそふ糸もて鶯は梅の花笠ぬひて鳴也らん

山残雪

446 ふもとよりみてはけぬと思ふらん猶山かけに残る白雪

梅薫袖

447 木のもとに人の心はのこさせてかゆるか袖にとまる梅かゝ

春曉月

448 あけぬまはいまた霞まぬ月かけの曉深きあはれをそ見る

花如雪

449 一つのまにつもりし雪そ山桜ちる時にこそ降とみえけれ

花満山

450 さかぬ間はおもひの中もましりしを山にみちたる花盛哉

雨中花

451 待人を思ひ絶よと降もうし雨は花にもつらきのみかは

幽栖花

452 あるしなき宿かとみれば桜花咲日は人の声もしてけり

故克寿か家の花を見て

453 わすられぬ人の名のみをあるしにて宿もさひしき花を見る哉

述懷

有行

454 老にのみすゝみ行こそわひしけれ求る道はいまたえすして

455 よしといふ人あればこそそしらるれそしられもせぬ我そかなしき

半散

散たる桜の若葉を見て

456 散花もいまたなかはゝ残れるをまたぬ若はのなといそくらん

457 うつりゆく色をみするもうしとてや桜の若はさしかくすらん

458 散のこるこれたに風にみせしとや花を若はのさしかくすらん

459 散のこる花の色たにみん物を桜の若葉今しはしまて

送別

460 過後思へは早き年月も行えとみればはるけかりけり

461 君かゆく都の花にわれも又心はかりはたくへてそやる

462 なつかしき都の空の郭公君よくきゝてわれにきかせよ

花満山

463 山ことにもとみし山はなかりけりみなおしなへて花になりつゝ

464 こと／＼く桜の花に成はてゝ山こそなけれみよしのゝ山

水辺山吹

465 川岸にうへも植けり一本を二本に見る山ふきのかけ

了然殿追悼

466 八千代もといひしことのはいつかたに常なき風のふす捨にけん

躑躅

467 春雨にから紅の振出て咲や砌につゝしのはな

藤花

468 いかばかり藤のしなひの長ければ春より夏にかけて咲らん

469 藤かつら長きを花の命にて一とせなからかけてさかなん

春駒

470 荒駒のあらき心もやはらけて長閑にわたる野への春風

貞長崎詰送別

471 旅といへは別れそをしき行先も帰らん秋も遠からねとも  
神書を講せし時

472 たれも皆神となる身を持たからわれといやしくなす心かな  
薄暮卯花

473 夕日かけくるゝ垣ほの卯花は昼みしよりも色さやかなり  
了然殿追悼 秋風

474 夕されは声のかなしき秋風の涙や草の露と置らん

475 秋風はをのれそ露をちらしつゝ誰におふせて声のかなしき  
同 夏山

476 花散しなこりやしたふ夏山の木々のみとりの袖の露けさ  
同 春浦

477 袖の浦のかすめる浪やもくすひの消し烟のなこりなるらん  
同 衣

478 なき人の帰るを松にかゝりてもかひやなからん藤の衣は  
同 煙

479 なき人を思ひ出つゝしのふれは面かけ消ぬ夜はのとしひ  
ある人にかはりて

480 捨ててゝ世のわつらひはのかれても月と花とに身そいとまなき  
野春草

481 花もあれと青きを春の色そとてみるめ長閑きのへの若草  
岡雉子

482 岡のへにやけ野のかれてなくきは妹や恋らん子や思ふらん  
山吹露

簾

483 手にくめは下行水も匂ふ也咲こほれたる山吹の露

花満山

良知

484 みよしのは今こそ花の時なれや千本の桜咲も残らす  
苗代蛙 全

485 小雨ふる賤か門田の苗代に夕かけまたて鳴蛙かな  
野春草 全

486 やきすてし野への芝生も春雨のふる度ことに萌やそふらん  
花満山 簾

487 心あてに思ひこそやれ咲花の奥はるかなるみよしのゝ山  
長虎

488 さくら花咲る盛は足曳の山たちかくす雲かとそ見る  
帰雁稀 全

489 花みんとおくれやしけん春深き霞を分る雁の一声  
閑居友 全

490 松風の音のみなるゝ草の庵をとひくる人そ嬉しかりける  
花満山 嘉保

491 峰も尾も花と成りけり昨日かもそれとまかひし雲にまかへて  
春暁月 全

492 咲花はほの／＼しらむ木かくれに霞むもあはれ有明の月  
浦春月 全

493 梶の音も遠く霞て浦舟のほのかにみゆる春のよの月  
名所松 全

494 小塩山峰の松かへいつの世の子日にもれて立のひにけん  
花満山 一枝

495 滝つせの音より外はなかりけり花咲うつむみよし野ゝ山  
惜落花 全

496 長閑なる春に心のとまりて風のまに／＼花の散らん  
山家雨 全

497 淋しさの限り也けりよはなれし松の戸くらき夕暮の雨

花満山

貞長

498 咲みちし花の盛りは春なから降つむ雪とみよし野の山

松上藤

全

499 藤の花枝にかゝりて咲ころは松の緑も色かはりけり

旅宿夢

全

500 故郷の道も迷はす草枕結ふよことの夢の往来は

見山花

全

501 桜花今は盛りと成にけり雲のうつめる山と見るまで

海上霞

全

502 見るかうちに行ゑもしらす成にけり霞をわけしあまのつり舟

苗代蛙

全

503 種をろす苗代水のにこりにも声はかはらて蛙鳴くなり

岡雉

全

504 のかしを妹にしれとや焼野より岡にうつりて雉子鳴くらん

夕雲雀

全

505 諸鳥はねくらに帰る夕暮の雲にのこりてひはり鳴く也

花為春友

全

506 春されは淋しき事もなかりけり花をは庵の友と詠めて

花随風

全

507 山風のさそひ行とも桜はな／＼なき里に散りとまらなん

父を失ひて

有隣

508 思ふ親あるまは親に思はせてなくてやその子身を思ふらん

梓弓おらてはるかに今そしるわれをそたてし親のむかしを

509 上に居て下の心はしらねとも上の心は下よりそしる

野守の絵のさん

御代の春駒ははしるも野へのあそひなりけり

510 上に居て下の心はしらねとも上の心は下よりそしる

511 むちうたすつなかぬ恵み身におひて狂<sup>はる</sup>ふもたのし御代の春駒

寄車恋

512 住つかぬ恋こそうけれ小車のめくりあひては又わかれつゝ

513 あはすしてしなは車のめくるわの後のよ迄や恋にしつまん

514 なけかしよ思ひに走る車あれはたとへ恋ちは千里なりとも

新樹露

515 若楓匂へる色にはるしれて梢は秋と露やおくらん

薄暮卯花

忠順

516 夕くれの道もあらはに見ゆる迄咲あまりぬる里の卯花

薄暮卯花

長虎

517 夕されは庭のまかきにまたきより出る月かとまかふ卯花

卯花を柴の風木に折そへて夕やみしらす帰る山人

嘉保

518 卯花を柴の風木に折そへて夕やみしらす帰る山人

菖蒲

有隣

519 いかはかり引しあやめと隠沼の隠れし水もあらはれにけり

薄暮卯花

竹弘

520 夕月のかけのさすかとまかふ迄軒はの卯木花咲にけり

野露

有隣

521 立初し秋のしるしを頭はして置増りたるのへの朝露

立秋朝

有隣

522 秋浅み声をしのひてなくむしの涙や野への露となるらん

立秋朝

有隣

523 けさよりは露のしら玉敷島の大八島にや秋のたつらん

秋恋

有隣

524 秋されは忍ふにやすく成にけり恋する袖を露におふせて

立  
秋  
衣

525 袖は猶きのふのまゝの麻衣おなしあつさに秋や立らん

初秋風

526 我宿にけさ吹風の音きけは萩をたつねて秋やきつらん

初秋霧

527 みか月の光りもうすき夕霧や秋のきたりし命なるらん

初秋雲

528 秋のたつ高ねの雲や月ゆへの心にかゝるはしめなるらん

初秋風

529 秋きぬといひしはかりに桐のはをうこかし初る庭の朝風

530 野も山もけさ秋風の立初ていつこの露かまつちらすらん

531 水ならて行年浪の中つせにけふたつ秋の袖の涼しさ

532 写絵のこゝちせられて薄墨の夕霧こめし山本の里

533 いつもふく声には風のかはらねと秋ときけはやさひしかるらん

534 我袖に待つる物を秋風は萩のはよりそとひ初めける

535 きり／＼すな<sup>き</sup>か<sup>く</sup>する宿<sup>り</sup>となり  
にけり払ひ残せし庭の夏草

536 来て告る人はなけれと我宿は浅ちの露に秋をこそしれ

537 松のははいともわかぬ色なからまつ音かはる秋の初風

538 高砂の尾上の霧の立しより月はます／＼すみ増りけり

## 野露

539 けふみれは又きのふより咲そひて露おもけなるのへの萩原

540 わひ人の袖の物とそ思ひしを尾花もしほるのへの夕露

初秋

541 一葉ちる桐のは山のこのまより秋とはかりの夕月のかけ

七夕

542 天の川秋たつ浪に彦星のさす手涼きつまむかへ舟

初秋

543 い  
つ  
し  
か  
に  
袂  
す  
ゝ  
し  
く  
覚  
る  
は  
秋  
を  
や  
つ  
く  
る  
け  
さ  
の  
西  
風

## 野露

544 秋のゝにわけ入みれは百草のはことにのほる露の白玉

545 むすふとはすれとはかなく消にけりあたの草の露

初秋

546 昨日けふ秋になるとの浦はより絶<sup>かた</sup>てみ<sup>つ</sup>ゆる浪の浮霧<sup>え</sup>初

初秋

547 吹風の袂すゝしとみし夢のさむる朝けに秋はきにけり

初秋

548 秋きぬと軒けふはふの桐のに置露は置なからこそ共に散けれ

## 野露

549 露深き野ちの細道けさゆけは袂迄こそ濡そほちけれ

庭朝

550 朝な／＼朝いいさめて朝顔のさけるや庭のおしへなるらん

551 植られし恵しりてやむくふらん朝いいさむる朝顔のはな

552 我宿をたれにとへとか朝顔は朝またきより咲て待らん  
 553 見る人のありやなしやは白露に独よそほふ朝顔のはな  
 五月時鳥  
 554 なか待しき月はきたり時鳥今はあやめの手をなおしみそ  
 苦熟  
 555 さくるへき道はならへとかひもなしさてもあつさに心しなねは  
 野露 定雄  
 556 秋萩の枝もたはゝに夕へ／＼露置増る宮城野の原  
 長虎  
 557 秋きぬとたれよりきゝて宮きのゝ萩かえ重く露の置らん  
 深山花 有隣  
 558 人の見ぬ山の奥迄色に香にわたくしもなくさける花哉  
 大応寺にて  
 559 心なき心をかたる涼しきはき人ならてしるものはなし  
 野萩  
 560 人のみぬ野中にあたら咲花は庭の真萩に色をかきなん  
 梅雨 竹弘  
 561 晴よとて誰またさらん東屋の余り日をふる五月雨の北  
 夕立 嘉保  
 562 尾上には夕日残りて夕立の雨降過る山もとの里  
 松風 全  
 563 忘れては馴て聞つる松風を雨かと思ふよはも有けり  
 納涼 長虎  
 564 夕涼み檜の葉かけも立よれば夏に蛍も飛てきにけり  
 薄暮卯花 キヨシ 廉  
 565 卯花のさけるあたりは暮かねてとすれば昼とあやまたれけり

566 涼さを覚る比になりぬれはかたふきけりな夏のよの月  
 夏月 全  
 瞿麦  
 567 ませゆひておふしたてたるかひ有てうつくしく咲撫子の花  
 早苗 有隣  
 568 宿ことにゆひしていそく此比は暮る迄社さ苗取けれ  
 夏草 全  
 東車の野にしけりける中を  
 569 里人の本れつる道も迷ふ迄しけるゝ□□をのへの東車  
 きのふそ分し道さへもわするゝ斗  
 山旅 嘉保  
 570 箱ね山松の火かけのほのみえて暁深く行はたかねそ  
 名所山 有隣  
 571 つかれし日数をさへにつみそへて箱ねの山を高く登る  
 日数へしつれもつみて中中高く登る足からの山  
 閑中時鳥  
 572 時鳥よにはまきるゝ忍ひねもきゝはもらさぬ我庵かな  
 573 時鳥思ひかけなき忍ひねもわかいとまある宿にこそきけ  
 薄暮卯花 良知  
 574 我宿の垣のうの花咲しより入日の跡のくれそおそかる  
 水辺蛍 全  
 575 難は江の蘆の葉風にふかれてはもゆる蛍もすゝしかるらん  
 576 風ふけは池のうき草沼こえて消ぬひかりは蛍也けり  
 577 釣殿のした行水にかけうつる火かけを友もよる蛍かな  
 嘉保

夏竹 維足  
 578 夏竹のしけれる野へを来てみれば秋またて咲花も有けり  
 水辺蟹 一枝  
 579 うなゐらに打おとされて水草のかけにたゝよふ蟹涼しも  
 夏木 一枝  
 580 軒近き葉広くまかし茂りあひて昼さへ暗く成にける哉  
 夏夕 嘉保  
 581 かはほりの飛かふ松の梢より匂ひ初たる夕月のかけ  
 夏衣 全  
 582 ぬきかねし花の袂は昨日にてなるれば軽き夏衣哉  
 夏風 良知  
 583 雨晴しなこり涼き<sup>松かけ</sup>に秋の声ある夏の夕風  
 夏月 全  
 584 夕立の晴行空の清らかに洗ひあけたる月の涼さ  
 夏虫 簾  
 585 蓑虫も頼みし笠を落してやはうらにすかる五月雨の頃  
 夏雲 全  
 586 夏きてはこしの高ねにいとゝ又あやしき雲の峰そかさなる  
 水辺螢 全  
 587 夏のよは池のみ草に咲てちる花かと見えて螢とふ也  
 忠順  
 588 よる光る玉も<sup>と</sup>見れば<sup>池</sup>氷底にうつる螢のかけにそ有ける  
 夏野 全  
 589 行かひの絶ぬ道さへわかぬ迄日こと／＼にしける夏草  
 夏朝 全  
 590 見る夢も結ひはてなて明るよの夏のあしたそ起うかりける  
 水辺螢 長虎

591 茂りあふ柳のかけを行水に露かと<sup>見え</sup>散て<sup>散</sup>螢飛也  
 夏山 全  
 592 花<sup>と</sup>わひし春の山ちの跡絶て若はにしける夏木立哉  
 水辺螢 孝詮  
 593 消やらぬをのか思ひのくるしさに水したひてや螢とふらん  
 寢覚聞虫 有隣  
 594 宵のまはいまた扇を忘れねとね覺てきけは虫の鳴也  
 595 ねさめしてきけは枕に聞ゆ也なれもあくるやまつ虫の声  
 596 秋のよの長きね覺に虫のねを独かそへて聞そさひしき  
 597 ねさめして虫のねきけは秋のよの長き夜床そわひしかりける  
 598 我に迄夜深き夢をさまさせて虫も独はなかしとやなく  
 599 ねさめしてひそかにきけは松虫の宵に忍ひし声たてゝけり  
 600 侍人のくるよと見せて我夢をおとろかしたるくつはむしかな  
 601 秋のよのねさめの枕吹風になくねも涼し庭の鈴虫  
 602 里なから庭の籬の山かけに夢さます迄虫のなくなり  
 603 長きよの暁かけて聞ゆるは人のねさめやまつ虫の声  
 待月  
 604 よひ／＼にまたせておそき初めそと思へはかなしいさよひの月

605 よるひるは入相のかねをへたてにて夕日のまゝの夕月のかけ  
 見月  
 606 かたちあらは月やくもらんな人の空になしつゝむかふころに  
 暁月  
 607 ねさめしてふたゝひみれは長きよも暁月のかけしらむなり  
 傾月  
 608 見るか内は行共見えぬ月かけの山のは近くいつなりぬらん  
 入月  
 609 見る人はふけゆく時をわするれとわすれぬ月や山にいるらん  
 惜月  
 610 あすのよも又みんなものと思へとも猶をしまるゝ月のかけ哉  
 残月  
 611 朝顔の花ひら重く置露にしらみて残る庭の月かけ  
 山月  
 612 見る人のためにはすまぬ月ゆへに山の奥にもくもらさりけり  
 海月  
 613 舟とめし波まの月を浜ゆふの重ねて幾よみくまのゝ浦  
 川月  
 614 水といへはいさゝ小川の流まてたつねて宿る月の影かな  
 野月  
 615 月夜とてかはりし物はなけれども昼みしのへのこゝちこそせね  
 秋露滋  
 616 いつのまにおくにかあらん野への露ひまなくちるとめには見えつゝ  
 617 秋の野の露をはらひて吹風は又置迄をしはしましたなん  
 旅宿雨

618 あす越ん山ち思ふもわひしきを雨さへにふる旅まくらかな  
 鶏告曉  
 619 旅人は今や宿りを立つらん曉告る庭鳥のこゑ  
 寢覚聞虫  
 良知  
 620 永きよの老のねさめのつれ／＼を慰めてなく松虫の声  
 親芳  
 621 鳴く虫のおもふ心はしらねともね覚の床に哀とぞ聞  
 忠順  
 622 庭の面に鳴くやあまたのきり／＼すいつもね覚の床にこそ聞け  
 長虎  
 623 灯の影もかすかに更る夜のね覚の床に虫の鳴く也  
 待月  
 親芳  
 624 出るまつ此夕くれのいそかれて心とおそき山のはの月  
 傾月  
 忠順  
 625 いかはかりおしまれんとや山のは傾きかゝる月のさやけさ  
 浦月  
 長虎  
 626 すみわたる月の光りに難波江のよる波さへも数やみゆらん  
 有隣  
 627 さとりなく迷ひもしらぬわらはへの昼ねの夢そうつゝなりける  
 628 ある物は皆なき物と思ふともそのなき物をまことゝなみそ  
 629 世の中はあるも偽りなきも夢よしやありなししらてこそへめ  
 河月  
 630 かけうつす雲は流れて川水に独よとめる月ぞ澄ぬる  
 631 月かけはうつる流の水清み又一しほや澄増るらん

松間月

632 今しはし出るを松のこのまより露にうつりて月そきらめく

蚊遣

633 たき捨て夕涼みにや出ぬらんかやりの烟立もつゝかす

相原氏にて

634 灯はいつ消にけん月清き端ゐに時のうつる忘れて

635 みにしむといひつゝも猶月のため浮雲故に風そまたる<sup>はを</sup>れて<sup>はを</sup>

636 白玉を散とみゆるは秋のゝにみちたる露の光也けり

637 露深き野への尾花をわけゆけは水なき浪に袖ぬらしけり

638 夕露の野へは川ともみえなくにわくれは人の袖ぬらしけり

639 見るか内に野への草葉そたはむなる夕露さもや置増るらん

640 呉竹のよ深き窓を吹風に雨と聞えて露そこほるゝ

641 庭<sup>窓の</sup>のしらむは月の光にてまた夜は深き庭鳥の声

642 いつのまか身は老ぬらん暁の鳥の音おそきこゝちするまで

643 今はよに仕へぬ我を何故に暁告て鳥のなくらん

644 人にのみ暁起をいそかせて鳥はねくらにねなからそなく

645 うまいする夢の半の暁を鳥やつれなくおとろかすらん

646 国とめる里の栄へにあかつきの鳥の声迄賑ひにけり

647 暁は明るにいまた程あれば鳥のねきゝて又やねてまし

648 音やおそきさめしやときとまとふ哉鳥と夢とを老の暁

649 花さかぬ処はあれと秋のゝに露のおかさる草やなからん

650 秋といへは夜こと朝こと夕ことに置こそ増れ野へのしら露

651 消<sup>せす</sup>さらは流て川と成ぬへし秋のゝ深き朝ことのつゆ

652 さま／＼の花にもまして白玉のひとつ色なるや<sup>の</sup>ち<sup>の</sup>く<sup>の</sup>さ<sup>の</sup>露

653 暁の鳥のねはみなきゝなからうきよの夢はたれもさまさす

菊未開

654 朝な夕なみれ共またき庭の菊花待長月の花にもある哉

時雨

655 いつもふる雨と時雨はかはらねとぬるゝこのはは色つきにけり

貞長

656 風にちるこのはの音と聞えつゝもるは古屋の時雨也けり

道古

657 夜をこめて閨の板戸に音なふは我ねさめとふ時雨也けり

忠順

658 晴るかとみれは時雨の立かへりぬれし袂のかはくまそなき

659 山かけの柴やの軒に一とをり降て晴ゆく村時雨哉 長虎  
 660 かたへより月はさしいる窓の戸のひまをもちくる村時雨哉 親芳  
 661 立かへり又ふりくるや色かへぬ松をうらみの時雨なるらん 大夢  
 662 このはちる音にましりてはら／＼と軒はにそ／＼く村時雨哉 一枝  
 663 空寒き時雨の雲の絶まよりみる人もなき月や出らん 大夢  
 664 わたつみの浪間に見ゆる岩かねは庭の根さしやち尋成らん 貞長  
 665 さらてたに心ほそきを旅衣きては別る／＼人をしそ思ふ 全  
 666 沖つ風よせくる浪の荒磯に声もくたけて千鳥鳴也 全  
 667 朝なきにこきはなれ行舟人は沖の追手の風やしるらん 道古  
 668 降つもる浦わの雪は岩かねにくたくる浪と色もわかたす 全  
 669 色々<sup>様々</sup>の千草の花もおしなへてた／＼一色に霜枯にけり 親芳  
 670 嵐ふくよはの紅葉は散はて／＼木々に花咲けさの初霜 長虎  
 671 色替ぬみさをかはらて呉竹の幾ちひろなる陰となるらん 忠順  
 舟 全

672 世を渡る業なれはとや浮沈浪まに見ゆる沖の釣舟 長虎  
 673 水の上に落て色こき紅葉ははたれかさらせる錦なるらん 親芳  
 674 行秋のなこりと共にませの中にゆひとめられて残る白菊 貞長  
 675 山風のふけはまに／＼さそはれて行へしられぬ空の浮雲 道古  
 676 木からしにましる霰の音たて／＼聞もわひしきよはのさむしろ 有隣  
 677 絶まなき嵐をいたみ峰の松小松のま／＼や年をへぬらん 瓢の賛花心一名旅枕  
 678 時々にかはる月雪花心と／＼めすあそへこのたひまくら 雨中思花  
 679 晴る迄待る心のいそく哉花か雲かと峰のはるさめ 落花  
 680 柴人の折そへてくる枝もなし山にも花やのこらさるらん  
 681 時わかぬ松も春をや知ぬらん散くる花を風にかさなて  
 682 雪ならはこほれん物を桜花枝もたは／＼に咲おもりつ／＼  
 683 風ならは梢高くはのこさしをたか折のこすさくらなるらん  
 684 逢坂や関にとめても山風のさそへる花はすきの下道  
 685 打渡すそれは朝けの烟にもまかはぬ里の花のしらくも

686 折取てたれ帰るらん春風はちらさぬ花のくたる山みち  
 687 われよりもさきに折つる跡なれやちらぬ梢の花まはらなり  
 688 心あての峰はあすみんくれぬともよしやふもとの花の下ふし  
 689 咲ぬへき花くもりとそしられける雨にはならぬ此比の空  
     朝霞  
 690 横雲は早立別れいなは山峰の松かえけさかすむなり  
     早春雪  
 691 春立と思ひなしにや朝もよひきゝの雪さへ花とみゆらん  
     垣梅  
 692 中垣にゆひこめられし梅かえも咲物とてや花さきぬらん  
     朝鶯  
 693 おとろかは立もやせんと鶯の鳴や朝戸をあけそかねける  
     遊糸  
 694 おた巻のくるゝも遅き春の日にさてもあかすや遊ぶいとゆふ  
     帰雁  
 695 すみれさくのへに枕を雁かねはいさ今一夜とまりてもゆけ  
     閑居歳暮  
 696 うきよをはへたつまかきの山ちにもさはらて年や暮て行らん  
     古宅  
 697 哀にも打かたふきて古郷の軒はも物をおもひかほなる  
     庭松  
 698 限りある庭のかこひをいつこ迄ちとせの松は枝栄ふらん  
     苗代  
 699 幾町に引分ぬへき種ならん賤か門への小田の苗代

700 たねをかすその苗代はせはけれとこなたは広くかへす田そうき  
     春田  
     夕花  
 701 山からす帰るねくらや忘るらん猶くれやらぬ花の光りに  
     夕紅葉  
 702 暮にけりまたきとみしはいつのまに紅葉のかけを杉の下道  
     時雨  
 703 さそひくる風に近つく川水の音は時雨のきたるなりけり  
 704 風早み雲こそさきに晴にけれ時雨はいまた袖にちりつゝ  
     夜霰  
 705 ぬる玉の夢をむすひし緒を絶て霰乱るゝ音さはくなり  
     野径霜  
 706 ふみ分し草はかれ野も今はまた霜に跡ある道の一すち  
     寒草  
 707 其後の日数や幾日残りけんまくさにもれし霜の下草  
     薄暮時雨  
 708 過るまの時雨の雲にくれにけりいまたと思ふ入相のかね  
     冬月  
 709 見る人を松にや月のかゝるらん霜よも秋の心ならひに  
     芹  
 710 朝日さす野沢の水のうす氷危くふみて根芹つむ也  
     寒月  
 711 おほへとも柴の袖垣うすければ影もる月や庭にさゆらん  
     維足  
 712 狐なく枯野を広み霜さえてすこくもみゆる月の影哉  
     忠順

713 冬深み衣は幾へかさねても影猶寒き袖の上の月 長虎  
 714 里人のよるのゆきゝや寒からん袂に氷る冬のよの月かけ 道古  
 715 山風に庭の木のはも残りなく真砂にさゆる冬のよの月 維足  
 716 とふ人を松の板やのなくさめに音なふ物は時霰なりけり 長虎  
 717 狩人の朝とく出し跡みえて深くも野へにおける霜哉 有隣  
 718 さよ更てさはく板やの玉霰時雨の後も夢さましけり 旅宿夢  
 719 旅枕こゆへき山を思ひねは夢もやしらぬ道まとふらん 忠順  
 720 行さきの遠き旅にも夢ちには古郷にのみ帰るなりけり 道古  
 721 白浪のよるひるとなく浦舟の出入たひに千鳥鳴也 全  
 722 冬深みきゝの梢は枯果て雪けを含む峰の浮雲 有隣  
 723 一声をほとゝきすとは聞つれと見や□空に月のみそすむ 早春朝  
 724 いそかしく門をたゝきし風の音のけさしつまりて春はきにけり 山霞  
 725 打霞槓も檜原もみえわかす外山を春の色にこめつゝ 初春  
 726 我宿の氷のつらゝに朝日さし雫流れて春は来にけり

727 こそつみし雪は其まゝ置ながら野にも山にも春は来にけり 雪中春来  
 728 大井川紅葉のかけにさす舟はから紅のしたくゝるなり 名所紅葉  
 729 水くめは川辺の柳露散てくる秋しるきこの朝けかな 水辺初秋  
 730 紅葉ゝは池の心にしたかはて水はゆけともかけはなかれす 紅葉映水  
 731 入迄を秋のよ長くみつる哉山のは遠き軒の月かけ 見月  
 732 くれやらて出づるまゝにてる月をいつ入相のかねはつくらん 夕月  
 733 しらすたゝ白菊のみやめてつらんおとるといはぬ色も有しを 黄菊  
 734 さきたらすおくれぬ雁の一つらはたか教へをはみたささるらん 雁  
 735 大空にたゝよふ雲の山風に晴みくもりみふる時雨哉 時雨  
 736 時雨する空には冬のきつれとも秋をのこせる庭の白菊 残菊  
 737 行水に流れぬかけも有物をさそふ風にはちる紅葉哉 水辺落葉  
 738 我宿は山近ければ初雪のふり初しよりつみそめにけり 初雪  
 739 山かつか水くむとてや分つらん川を限りの谷のほそ道 山家路  
 朝霞

740 宵のまの時雨にしめる板ひさしけさの霰は音せさりけり  
 741 立出る日かけは晴て旅人の袖に時雨の野ちの朝露  
 742 今一重あやしき峰をたてそへてふるやいつこの夕立の雲  
 743 見渡せは梢まはらに立ならふ松やしるへの野ちの行末  
 冬至  
 744 峰にさへまた初雪もあらかねの古のしたには春やたつらん  
 行路初雪  
 745 立越る山風さへて旅人の袖にふりくるけふの初ゆき  
 長虎  
 746 めつらしくけふそはしめてふりつもる雪の袂は打も払はし  
 忠順  
 747 ふみわけし跡はつもらて道芝の花かと斗り見ゆる初雪  
 親芳  
 748 行袖に冬のけしきの今朝見へていと珍しくふれる初雪  
 良知  
 749 初雪のふるからをのを行時はさゆる袖とおほへさりけり  
 維足  
 750 玉鉾の道行袖にめつらしくけふふり初る雪は払はし  
 貞長  
 751 しくるかといそきし道に嬉しくもふりかわりたる袖の初雪  
 道古  
 752 分行はかれふの花と見るまでにさへてつもれる野ちのはつ雪  
 方秀  
 池水氷  
 753 池水にさらす柳のいとまでも今朝は氷にむすほふれけり  
 親芳

754 さ夜更て誰かたゝくと柴の戸を明れは落る木のは也けり  
 夜落葉  
 河千鳥  
 755 筏士も棹さしかねて川千鳥遠さかるねをしたひ聞らん  
 忠順  
 756 冬こもり火桶のもとにさけくめは更るもしらてしらむしのゝめ  
 暁炉火  
 757 いかはかり峰のふゝきやつよからん煙横きる小のゝ炭かま  
 峰炭竈  
 758 きのかきふ雪けの空のかきくもり光もうすき峰の月影  
 寒山月  
 759 山のはに日かけは入てつむ雪の光りそ残る夕くれの空  
 薄暮雲  
 760 今朝見れば霜そ置成しけり合松のみとりも色わかぬまで  
 松霜深  
 761 行袖をかさす迄にはなかりけりふるとはかりの野ちの初雪  
 行路初雪  
 762 けふ迄は猶も時雨のおもかけに空さためなく初雪そふる  
 松上霜  
 763 松のはにぬきとめられて有明の月の光りをのこす朝霜  
 月映水  
 764 峰高くのほるとみれは我宿のかけひの水に落る月かけ  
 落雁  
 765 先立ておろすまゝにやおろすらん独残らぬ雁の一つら  
 夕照  
 766 此里や雲の絶間に当るらゐまた夕日の暮残りけり  
 夜雨

767 村雨の音いそかしく覺にけり夢ちもぬらす袖いとふらし  
 歸船  
 768 歸りくる舟のほのかに聞ゆ也磯山本の入相のかね  
 松永氏所望に  
 769 終に身をつかひ殺すと愚かなる養ふための謀ことにて  
 しをりに所望にて  
 770 そのまゝに捨れは身迄すたる也覺すはよめ忘なは見よ  
 花房氏をいはひて  
 771 ~~斧のえのくつる覺ぬたのしみは~~ 柿にけり斧のえのくつる覺ぬたのしみは 仙人の七世は物か千代をもへぬへし  
 玉替の祝  
 772 ことしより神の玉苗植つれば宿の宝やしけりそふらん  
 773 世の中の富はこゝにやよりくらんこかねの玉の光したひて  
 774 さつかりし此親玉のうみ出すこかねの数や限りなからん  
 775 玉たれの神のさつくる此玉や富を守りのしるしなるらん  
 776 うま／＼と替て取たる玉のことしんしやうも又丸うなるへし  
 初春霞  
 777 春きつる命をみせてめにたつは外山の霞里の門松  
 春月  
 778 春のよのかすめる空は宵なからしらむや月の出しなるらん  
 玉替  
 779 此玉のさそひ集てよひ入るかねを今より飛たてゝまで  
 朝鶯  
 780 呉竹のよの間はさえし朝霜の打とけてなく鶯の声

折蕨  
 781 これ迄と思ひ捨ても歸るさに幾度折しわらひ成らん  
 河辺柳  
 782 川の瀬の浪のあやおる糸柳いつかけふかくならんとすらん  
 歸雁  
 783 山はまた残る雪さへ寒けきに契たかへす歸るかりかね  
 親芳  
 苗代  
 784 苗代の小田のしめ縄引つゝき絶ぬ貢の種まきにけり  
 簾  
 氷翁  
 785 若かへるかけうつしてやみかくらん氷にくもる池のかゝみは  
 維足  
 残雪  
 786 打かすみふもとは春に成ぬれと冬を残せる峰の白雪  
 全  
 克寿七回忌  
 787 都へと別れしまゝの俤を彼岸遠く猶したふ哉  
 有隣  
 788 俤も霞も空に又立ぬ思へは早し七とせの春  
 同時 春雨  
 789 思ひ出て空も昔やしのふらん打しめりたるけふの春雨  
 山家花  
 790 山里の春は桜をあるしにて都の人にとはれつるかな  
 791 とひにくる人もなければ山里は花に嬉き春としもなし  
 春鶯呼客  
 792 春きても花なき里のさひしさを人にとへとや鶯のなく  
 793 鶯は独なくねをおしとてや山桜戸に人をよふらん

794 春されは人にとへとて柴の戸を我宿かほに鶯のなく  
 795 柴の戸のあるしの心しりかほに人をはとへと鶯のなく  
 796 鶯のこてふににたる声なくは人にとはれん柴の庵かは  
 797 此宿にいかなる花の咲ぬらん門に人よふ鶯のこゑ  
 798 鶯の人く／＼と声す也此山里をたれかとふらん  
 799 鶯の人よふ春は心せんつねはとはれぬ柴のいほりも  
 800 鶯のよふ声なくは花さかぬ我宿いかて人にとはれん  
     松に朝日の画  
 801 松のはのみとりの色に色そへてあかねさし出る朝ひこのかけ  
     春鶯呼客  
 802 鶯のさそはさりせは山里の軒はの梅をたれかとままし  
     竹為友  
 803 くれ竹の内むなしきを友とみてならへともにぬ心はつかし  
     水辺柳  
 804 青柳のひたさぬ枝はさそはねと水の流れになひきつる哉  
     若木梅  
 805 ことしより咲初たりと鶯に告てふかなん梅の下かせ  
 806 此春はこそその古枝のしつえより若木の梅の咲そめにけり  
     如雲祝ひに  
 807 世のちりのかゝらぬ雲の袖の上も恵の露はうるほしにけり

808 きて見よと人をよふねににたる哉梅咲宿の鶯の声  
     鶯呼客  
 809 我宿の軒はの梅は散にしをたれをよふらん鶯の声  
 810 鶯の人をよふ<sup>声</sup>ねに鳴しより契らぬ物をわれは待哉  
     梅近袖香  
 811 ことさらにふれぬ袖迄うつりけり軒はに近く匂ふ梅かゝ  
     夜梅薰袖  
 812 逢とみし夢や軒はの梅ならんかた敷袖に残る移香  
     水辺柳  
 813 川水に棹さしのほる舟人のこゝろをつなく青柳の糸  
     忠順  
 814 水の面に釣する糸と見ゆる哉長くたれたる岸の青柳  
     維足  
 815 谷水に末ひたしけり山島のしたりを柳打なひきつゝ  
     良知  
 816 唐衣立田の川の糸柳うつる水までみとりなりけり  
     廉  
 817 水の面にかけてをうつして川岸の柳の髪やよそふ成らん  
     長虎  
 818 はつ瀬川きよき流にかけ見へて浪のあやおる青柳の糸  
     方秀  
 819 舟人やさしまよふらん青柳のかけに浅瀬もみとり深めて  
     道古  
 820 ふく風の絶間も波の綾なして水にうつれる青柳の糸  
     故郷梅  
     良知

821 むかし我すみにし里はあれぬれと梅はかはらす花咲にけり  
 依梅知春 全  
 822 世にうとき賤か門にも梅咲は春きにけりと今やしるらん  
 梅花浮水 親芳  
 823 川水にちりて浮へる梅の花流れの末やかほるなるらん  
 雨中梅 忠順  
 824 春雨の軒はに落る雫まてかほりにけりな庭の梅かへ  
 依梅待友 全  
 825 我宿は山里なれとさく梅の花みかてらにとふ人もかな  
 雪中梅 維足  
 826 風さへて雪猶消ぬ北まとの梅はいつかも春をしるらん  
 月前梅 廉  
 827 春のよのかすめる月はいとく又くもりやはてん軒の梅か  
 梅花遠薰 全  
 828 さらてたにかほる軒はの梅か香を幾里かけて送る春風  
 梅似雪 方秀  
 829 色は猶雪にそまかふ梅の花薰り斗を風にしらせて  
 梅薰夜 全  
 830 月さへも春はおほろにかすめとも薰りそしるき夜はの梅か  
 山家梅 方秀  
 831 世を捨て我山窓に咲梅は春をしれとや香に匂ふらん  
 梅香何方 長虎  
 832 梅の花いつくの里に咲初て夜深き宿に匂ひきぬらん  
 春鶯呼客 道古  
 833 春くれは賤か庵もうくみすのこゑをしるへに人のとひけり  
 良知  
 834 梅さきて鶯なけは我宿に常にはうとき人も来にけり

835 常うとき人もいつしかなるゝまて春の友呼庭のうくみす  
 親芳 廉  
 836 鶯の鳴ねのとかになりぬれはおもはぬ人もとひて来にけり  
 忠順  
 837 鶯のこゑによはれて山里の梅を尋て人の来にけり  
 長虎  
 838 鶯の鳴て誘は春の野にかすみをわけて我<sup>は</sup>来<sup>に</sup>けり  
 方秀  
 839 鶯のさへつるこゑに立出てみれはとひくる人もありけり  
 有隣  
 840 こゝかしこ人よふ声に聞ゆなり梅さく里の門の鶯  
 竹為友 長虎  
 841 くれ竹の直きこゝろを我も又学の窓の友と契らん  
 忠順  
 842 朝な夕なおのか心の友として馴てそ見つる庭の呉竹  
 廉  
 843 世の中に嬉しきふしもありやとて友とそ頼む窓のくれ竹  
 親芳  
 844 なれもまたわれを友とやしけるらん軒はに近くなるゝ呉竹  
 良知  
 845 すなをなる心を常の此君を我友にしてなるゝ朝夕  
 道古  
 846 起ふしに馴てあかねは窓の竹よくも替らぬ友と契らん  
 方秀  
 847 老ぬれは昔の友はなかりけり<sup>た</sup>これのみのまとのくれ竹  
 梅薰風 長虎

848 鶯の来鳴くもまたす春風に匂初たる庭の梅かへ  
 竹為友 有隣  
 849 しるや此竹のむなしき心にはまたなき友と頼み馴しを  
 850 友と見てことかたらへは竹も又そよとうなつく窓の夕風  
 851 交りに心むなしき竹なれとかはらぬ色はたのもしき哉  
 852 窓あけてわか朝夕の友とみる心を竹のふしなへたてそ  
 853 千代の内にいくらの友かかはるともわれをも数に竹<sub>本</sub>忘る<sub>な</sub>  
 春鶯呼客  
 854 声やめてしはしはいこへ鶯はよふとも人の袖し見えねは  
 855 散残る梅もありとや鶯の帰る人よふ春の山さと  
 856 道よりはやゝ遠けれと鶯のよふなる門に立やよらまし  
 857 風さそふその梅かゝはこゝなりとおしへかほなる門のうくひす  
 858 よふまゝに又たちよらは日やくれんこかけあまたの鶯のこゑ  
 竹為友  
 859 静なる庵の友とそ見る物を竹の葉風のなときはくらん  
 培養  
 860 小男鹿の八の耳よりきく物は牡丹に大こ松に梅たけ  
 御誕生日御祝  
 861 ことふきの命久しく此月のけふに千年もあはんとそ思ふ

如雲祝ひに  
 862 及はしな山と海とをたとへても高きいさをや深き恵みは  
 思花  
 863 人よりもさきにと思ふ山桜たよりをまたはをくれもやせん  
 待花 良知  
 864 世を捨て我身なれとも花をまつ心はかりは離れさりけり  
 維足  
 865 さけはちる物とする／＼桜花遅しといそく心待なり  
 長虎  
 866 春寒み花の遅きはことほりとしりつゝもまつ庭桜哉  
 忠順  
 867 日をへつゝ待程久し庭の面の花の下紐いつかとくらん  
 有隣  
 868 桜花盛り短き心には何とてさくをいそかさるらん  
 全  
 869 梅に來し人に契を結び置て散よりやかてまつさくら哉  
 廉  
 870 年ことに時をたかへす咲花を遅しとのみそ待なれにける  
 方秀  
 871 待わふる日比をせめてさかぬまの花共かゝれ峰の白雲  
 雨中落梅 簾  
 872 春雨のふるやの軒の雫さへ匂ひをそへてちる梅の花  
 夕春雨 全  
 873 春雨にぬれてこてふの長閑にも花なき宿に眠る夕暮  
 閑庭春雨 維足  
 874 淋しさの限りをいはゝ雨かすむ蓬か庭の夕へなるらん  
 雨中春草 有隣

875 若草はなひくはかりにのひにけり降春雨の露をおかせて  
     雨中柳 方秀  
 876 春雨に猶よりそへて白露の結ふにあまる青柳の糸  
     行路春雨 全  
 877 ぬるゝ共見えぬ斗の春雨に道行袖をしほりつる哉  
     雨中待友 全  
 878 待わひし人もやくと幾度か軒はの雨に袖ぬらしけり  
     磯松 全  
 879 打渡す磯へは波にへたてつゝみるめも遠く並ふ松原  
     夜春雨 長虎  
 880 花をみる人にさはりをあらせしと心ありてや夜はの春雨  
     雨中旅 全  
 881 旅人のけふのやとりを行くれていそく袂の雨そわひしき  
     門松 全  
 882 山近く家ゐしおれはおのつから生たる松を門にこそすれ  
     雨中鶯 忠順  
 883 打霞雨のふる日も鶯のなくねは更にくもらさりけり  
     待花 道古  
 884 春くれは梢かすめるみよしのいつかは花の雲と咲らん  
     全  
 885 心あてに待程長き春の日のあすかの花はいつかさくらん  
     御代替の祝 有行  
 886 ことしより又改めて君か代のやちよの数やかそへ初<sup>は</sup>らん<sup>や</sup>  
     御茶屋にて 有隣  
 887 花の雲わけゆくみれは乙女子か天の羽袖をふるかとそ思ふ  
 888 桜花君に見らるゝ嬉さの涙の雨も帰るまでまで

889 仙人の植し葉か桜花みれは命ものふこゝちする  
 890 いつくにか酔をは風の吹やりてくむ酒あかぬ花の下かけ  
 891 此春はちる共又の春もあり枝をな折そ花の山かせ  
 892 白雲のたなひくなかに声するや人の花みるあたりなるらん  
     同時 蕨  
 893 あすもつむ人の為とやけふ迄はみしかきわらひ折残すらん  
     猫  
 894 あれ鼠おれかとらちやあたかとりふ諫早またら猫の大猫  
     御本丸にて  
 895 木のもとに共にみんより嬉きはわれにと給ふ花のひとえた  
     御入都の賀  
 896 国にいる君をむかへて諸人の万代のこゑとゝろきの里  
 897 諸人の君をむかふるあた原の松原長く御代や栄へん  
 898 <sup>ときはなる</sup>神垣<sup>の</sup>松原川の流れこそ君か代長きためしはひけ  
 899 今よりは豊さかのほるひの国の君か光りや世をてらすらん  
 900 老しらぬ蓬か島の仙人も御代の限りはいかてかそへん  
 901 いかはかり又君か代は栄ふらん代々に栄へし跡を尋<sup>のまに</sup>ねて<sup>い</sup>  
 902 行末のちよもやちよも万代も君か心に任せてそへん

903 朝日山出る日かけもあらたなる御代の光りやそひて照らん  
 904 けふといへは時のつゝみも君かため万代よはふ声かとそきく  
 905 民草も君をむかへて祝ふ也いかに嬉き松原の神  
 906 けふはかり嬉き事はなかりけり万代ふへき君をむかへて  
 907 立のほる朝日の国をしりそめし君か光りをあふく嬉しさ  
 908 君か代の数にかそへて民草もみそむ万の貢つむらん  
 909 君か代は浜のまさこの岩となり天の羽袖のなて尽す迄  
 910 久かたの空の限りははかるとも君かやちよの果はしられし  
 911 君かよの果はしらしなわたつみの汐の八百重はゆき尽す共  
 912 鶴のちよ亀の万代遠けれと君かみよにはしかしと思ふ  
     高取次郎太郎 遠蔭  
 913 君かよの初めは今を始にて後のかきりはしられさりけり  
 914 川上のよとめか淵に住亀も御代の限りはしらしと思ふ  
 915 いにしへも遠くはあれとゆく末の君か御代こそはるかなりけれ  
 916 我君を国にむかふる嬉しさに市も田つらも人とよむなり

917 此まゝの心に千代もへてしかな君まちつけしけふのうれしさ  
 918 我君を国にむかふるけふにあひてうれしからさる人やなからん  
 919 人ことにみなうちゑみて見ゆる哉けふ国に入る君を待えて  
 920 あたらしき君をむかへて老の身も若きにかへてちする哉  
     又あらたまる  
 921 錦きて帰る君をはむかへつゝ嬉く名の初ほとゝきす  
     なかれも  
     有隣  
 922 伝へ来し代こと／＼にまきぬ此御代君いかに又榮ふらん  
     まきり  
 923 あらたまる御代のめくみに逢んとや老の命はなからへにけん  
     吉田良一郎 慈有  
 924 いかはかり榮えそふらん君か代は代々にあらたに又あらたにて  
 925 世の末になりてそ物はまさりけるさこそそふらめ君か榮へも  
 926 天地と長く久しく限りなくかはる時なく君はましませ  
 927 あらたなる君か恵の初風によるこひなひく国の民草  
 928 舟よするよもの夷もあふくらし御代あらたまる君か光は  
 929 賤のおも君をむかふる嬉しさに柴の垣ほやゆひてまつらん  
 930 国に入るけふをは待て卯の花も君かためとや咲て見すらん

931 雨さへや国を清めて洗ふらん御代あらたま君をまつとて  
 932 あらたま君の光は夷まで玉の浦よりてりわたるらし  
 933 いつこにかあふかさるへきことしより御代あらたま君か光を  
 934 <sup>△御代</sup>あらたま君の光は天か下およはぬ<sup>方や</sup>もあら<sup>さらん△</sup>しと思ふ  
 935 玉の浦によする夷の国遠く君かひかりやて<sup>磐根</sup>りわたるらん  
 936 昔より夷をてらす玉の浦の光りを君やみかきそゆらん  
 937 あらたま君の恵や頼むらん今迄人にくれたる身も  
 938 此上もいふへきあらはおしへてよ千代万代は君にたらねは  
 939 限りなき君か代にこそかそふらめ親子うまこの亀の齢も  
 940 さま／＼にいひは替ても君かよをいは<sup>詞</sup>ふは<sup>詞</sup>同し千年万代  
 941 君か代は峰の小松に十かへりの花も幾度さかんとすらん  
 942 またこれに風はくはへぬ草のはも君か光になひく御代哉  
 943 ときはなる松の千年も長けれと猶久しきは君か御代哉  
 944 諸人のたふとみあふき奉る御代の栄へや久しかるらん

945 <sup>△</sup>更にまた民の烟もたちそ<sup>や</sup>ひて<sup>あらたま</sup>君の恵になひき<sup>て△</sup>まむらん  
 946 ふし立てなひく早苗にみゆる哉君にしたかふ民の心は  
 947 今よりはいかてはつらんかきりなき御代の栄へも富も位も  
 948 君か今国しりそむることしこそ千代をかそへん初め也けれ  
 949 あたらしき御代の光やそふるらん天照神も空にまもりて  
 950 松原の神のみ末の君なれはときはかきはに御代そ栄えん  
 951 君か代を祝ふ心は皆人のいひあはせねとおなしかりけり  
 952 玉の浦に<sup>よす</sup>入るゑひすしか大舟に<sup>さ</sup>は<sup>わ</sup>け<sup>け</sup>る浪や君か代のかす  
 953 つちくれをなかさぬ雨の音さへもしつかなりける君かみよ哉  
 954 君か代は八百よろつとせこのまゝにかはる時なく尽せさるへし  
 955 我君を国にむかへて千町田の早苗迄こそなひきふしけれ  
 956 あたらしき君をは国にむかふとて風もちまたの塵はらふらし  
 957 国に入る君をはなれも松原に<sup>出</sup>む<sup>て</sup>かへて名<sup>か山</sup>のるほとゝきすかな

958 立のほる朝日と共におかむ哉けふ国に入る君かよそひを  
 959 あらたまる御代の恵みに今迄の富の上にも国やとむらん  
 960 国にけふ君をむかへて奉るみつきのよねにまかふ卯のはな  
 恭賀 長虎  
 961 末遠く幾ちよかけて君かよの深き恵を頼む民草  
 羽室平次左衛門 長包  
 962 八百かゆく浜の真砂を君かよの千代万代の枝にたくへん  
 963 民安く国もゆたかに君か代は行末遠く榮へそふらん  
 残花 道古  
 964 春過るとふ人はなき山里に残りし花の惜くも有哉  
 一枝死ける時藤をみて 有隣  
 965 紫に咲たるふしはかの国に君を迎し雲かとそみる  
 夕立雲 有隣  
 966 峰の上に峰を重ねてみゆる哉けふしも又や夕立の雲  
 水辺螢 忠順  
 967 終夜消も果なて水底の影面白くとふ螢かな  
 残花 親芳  
 968 梅かえや風のへたてと成ぬらん春は隠に残る桜は  
 山家夕雨 全  
 969 さらてしも夕へさひしき山窓に猶しめりゆく雨の音哉  
 海辺夏月 忠順  
 970 あひきすとぬれたるあまの袖の上に涼く宿る夏のよの月  
 残花 方秀  
 971 消残る雲かと見えて山かけに猶散やらぬ花の一本

972 なへてよに散ぬる後も深山には春を残して花咲にけり  
 長虎 忠順  
 973 世の人におしまるゝをや知ぬらん残りて匂ふ花の一本  
 池菖蒲 長虎  
 974 五月雨の葉末の露を匂はせて池のあやめに風渡る也  
 暮夏風 方秀  
 975 夏きぬと思ふはかりの心から袂すゝしく風の吹らん  
 採早苗 全  
 976 降雨にくるゝもしらすしつのめか笠うつむけて早苗取也  
 山夏月 景清  
 977 さらぬたに入方近き夏山のこの間に明る短よの月  
 庭新樹 忠順  
 978 庭の面の梢をくらく茂り合て月影うとく成増りけり  
 残花 貞長  
 979 桜色に染める袖はぬき替て思ひ捨にし花をみる哉  
 有隣  
 980 遅しとて恨し花は中々に散をくれたるけふそ嬉き  
 恭賀  
 981 国にけふ君を待えし嬉さやつむよろこひのはしめなるらん  
 982 あらたまりけふそ初めて国にいる君かよそひをおかむ嬉さ  
 983 今そしる。むかふかへて松かけのたもとに露の  
 君をむかへて松かけのたもとに露の 方秀  
 984 岩戸明し神の昔もかくや有し君をむかへておかむ嬉さ

- 985 道のへにふみ残す道のされし小草迄かたへのなひきふしてや君おかむらん
- 986 君かためみさきを払ふ朝風に草もなひきてふしおかむなり
- 987 万代の君をむかふるうれしさにたれもちとせの齡のふらし
- 988 君か代にあふ嬉さのほに出てむきもゆたけき色をみせけり
- 989 君かめに見ゆる限りはことやめて耳に名のりの声やみつらん  
良知
- 990 今よりの後の栄えも天地とともに久しき御代そめてたき  
残花 良知
- 991 夏きても山路は春の残りてや今を盛の花もみえけり  
恭賀 方秀
- 992 鶴亀もいかてかそへんことしより国しりそむる御代の限りは
- 993 天か下あなふひかぬ国やなかるらん月日にならふ御代の光りを  
生成
- 994 ことやめし草のうきはも岩も木も万代うたへわか君のため  
兼百武善右衛門寿
- 995 千年ふる松の葉枝の数よりも御代君かゆかこそ限りしらね  
親芳
- 996 ときはなる松のみとりもさらに又千代の色そ君か御代哉
- 997 生出しその若竹のゆことしより千代万代の色はこもれり  
松間月
- 998 松風のますれと落ぬまりなれや梢庭のに出る庭の月かけ

- 999 よしあしに迷へる雲のなかりせは月はもとよりくもるつきかは
- 1000 難はかたよしとあしとを白浪におもしろけにもうつる月哉  
故松平大和守様建中院殿一回忌 寄草花懷旧
- 1001 思ひ出る涙の露に咲にけりこそその秋みし秋萩の花  
七夕
- 1002 天の川流れて早く明るよもこよひはよとめ星合の空  
投機
- 1003 よしあしに迷ひし雲の消て社心の月は澄はしめけれ
- 1004 難はかた沖行舟はほをあけてよしとあしとの岸によするな
- 1005 よしといひあしといふ共難はえの蜚の偽りかまふへきかな  
三日月
- 1006 心あてに此あたりかと尋てそほのかにみつる三か月のかけ  
月前虫
- 1007 秋の野の虫はいつこか白露に宿れる月の声と杜きけ  
寄海祝
- 1008 君か代は国の外なるわたつみの浪も静におさまりにけり
- 1009 君かためかねてちとせの老の浪よせてやみする沖つ汐風
- 1010 そことなくすゝろありきに出みれは月よゝしとて虫も鳴也

羽室平次左衛門 長包  
吉田良一郎 慈有

1011 露にふす草に隠るゝ虫迄も声あらはして月になくなり  
 古郷萩  
 1012 古郷は生そふまゝの真萩原もとのまかきの内外たになし  
 雨夜灯  
 1013 かきくらしおやまぬ雨に宿の戸はたてゝもしめるよはの灯  
 秋夕雲  
 1014 こよひまつ月に心のかゝる哉向ふ高ねの夕くれの雲  
 漁舟火  
 1015 かつ隠れかつあらはれて浪のまに数さたまらぬ沖のいさり火  
 野秋望  
 1016 萩薄たなひく霧にくまとりて秋面白き野への色哉  
 名所滝  
 1017 音にのみ聞つる程はかけひともかけて思はぬ清水の滝  
 雨後月  
 1018 いとひつるわれな<sup>た</sup>めて<sup>や</sup>村雨の洗ひて清き月をみすらん  
 隣家鶏  
 1019 ひかしより夜は明そむる習ひとて鳴や隣の庭鳥の声  
 水郷月  
 1020 難はなる里のかやりにくもりしも今を秋とや月のすむらん  
 田家水  
 1021 川水をわか引小田に濁らせてすまぬ習と賤やくむらん  
 月前萩  
 1022 月清くみかきし露の白玉をぬきてかけたる糸萩のはな  
 擣衣何方  
 1023 遠近はふくとたゆむにかはりきて風に砧の音そ定めぬ  
 霜下菊花  
かきくらしおやまぬ雨に宿の戸はたてゝもしめるよはの灯

1024 置霜の白きはをのか色なれはうつろふとしも見えぬ菊哉  
 深夜見月  
 1025 寝覚ても猶明るまは永きよの夜深き月を起て見しかな  
 恭賀  
 1026 ことしよりかそへ初めて君か代の八千代の春に逢んとそ思ふ  
 1027 動きなき御代のためしに神代よりかなたて山はたて置にけん  
 月前虫  
 1028 おもしろき秋の野へ哉花に色虫に声あり月光あり  
 1029 月清きのへの糸萩糸薄たてぬきにしてはた織のなく  
 1030 野へにみつ月の光も虫のねもさやかにすめる秋のよは哉  
 1031 望月の光尽して照す夜は虫も声をやをしまさるらん  
 1032 月かけのみかきし露の玉に緒をぬくへき空やきり／＼すなく  
 1033 白露の手玉もゆらにふりたてゝ月に鳴也はた織のこゑ  
 1034 もしや共宵ならはこそいふへきを友待虫の月更てなく  
 1035 月みんと明て出れは門の外にわれ待虫は早くなく也  
 1036 海の上も道ある御代と百舟のまほをつらねて賑ひにけり  
 1037 君かよはかはらさるへしわたつみの千尋の底はたとへひる共

1038 わたの原静によする浪を見ておさまる国の風をしる哉  
 1039 うけいれて水をゑらはぬわたつみや恵ある代のためし成らん  
 1040 君かよは恵の露の落つもりつひに千尋の海となるまで  
 1041 君かよの果こそしらね大海も舟もてゆけは行尽せ共  
 1042 四方の海浪静にて黒舟のしらほも御代になひきてそ来る  
 1043 わたつみの波の花にやたくへまし君か栄へるときはなる世は  
     霧中初雁  
 1044 渡りくる数もよまれす薄墨の霧の中なる雁のたまつき  
     僅見恋  
 1045 我恋る心もあやし夫とたに見も定めぬを思ひさためて  
     雨後月  
 1046 雨はまた晴も定めぬ浮雲のひまを盗て出る月かな  
 1047 雨晴しはれてゆく雨の雫にかけの見え初て雲間の月そ軒にこほるゝ  
 1048 音たゆむ雨の雫の軒はより思はぬ月をほのみつるかな  
     紅葉織  
 1049 めくりくる時雨待てや下染の露にはうすき峰の紅葉ゝ  
     八月十五夜  
 1050 紅に染し葉月の望月はむへこそ赤く照り渡りけれ  
     鹿声近枕  
 1051 紅葉する秋は山こそ住うけれ枕の鹿に夢をさまして

1052 紅葉する山近ければ我庵の枕に鹿をきかぬ夜そなき  
     野外草花  
 1053 広き野もくまなく霜や置ぬらんなへてち草の花咲にけり  
     菊花盛久  
 1054 咲しより菊の白露置替て霜になる迄幾日へぬらん  
     霧中初雁  
 1055 夕くれの霧の上なる初雁は声の行ゑやゆくゑなるらん  
 1056 夕霧はへたつとすれと初雁の声の行ゑにゆくゑをそ見る  
     鹿声近枕  
 1057 我山の紅葉や色に成ぬらん枕に近く鹿の声する  
     恭賀  
 1058 いやましに御代も栄えの国に入る君を仰しけふの嬉さ  
 1059 置かゆる恵の露に民も皆家をうるほす君か御代かな  
 1060 君かしる松らの海につる鯛のたひらかにませ御代はちよまで  
 1061 君かよは夷外のうれひをしらぬひの国安くこそ治め初らめ  
 1062 治めこし跡を伝へてひの国の光をそふる君か御代かな  
 1063 ことしより民の心も安国としろしめすへき君か御代哉  
 1064 あらたまる君か恵に民草も今一しほの栄えそふらし  
 1065 民の戸の烟も君になひき合てます／＼御代や栄えそふらん

1066 民安く物たらひたる国なれはかねてそしるき君か万代  
 1067 あらたまる此君か代にしたかひてかはらぬ民も又栄ふらん  
 1068 民の戸君<sup>も</sup>あらたまる世につれてさらぬ昔に又や帰らん  
 1069 ことしより代をしろしめす我君の栄の国や栄えそふらん  
 都落葉  
 1070 落葉せし柳桜を見渡せは都の冬もさひしかりけり  
 朝氷  
 1071 袖ひちし人こそ見えね朝な／＼氷のむすふ山の井の水  
 簾  
 1072 心してふみなまろひそくめる井にこほれし水も氷る朝風  
 道古  
 1073 けさみれは夜はの嵐の落はをは池の氷の結ひとめけり  
 忠順  
 1074 みきはなる池は氷にとちはてゝあしたの水もくまれさりけり  
 良知  
 1075 千早ふる神や渡りしすはの海の氷をけさは人かよふなり  
 貞長  
 1076 浮ねせし鳥はいつちに行つらんひまなく氷るけさの池水  
 庭雪  
 有隣  
 1077 寒ければ塵も払はぬ怠りをかくしてうれし庭の白雪  
 初雪  
 道古  
 1078 かきくらしふれ共いまた冬枯の梢に軽きけさの初雪  
 夜霰  
 良知

1079 更るよにねさめてきけは窓の戸をしは／＼打や霰なるらん  
 野霜  
 全  
 1080 出てみるのへの千草は冬枯てけさ置霜の花そ咲ける  
 朝氷  
 長虎  
 1081 水鳥の通ひし跡のみゆる哉一筋消しけさのうすらひ  
 千鳥  
 全  
 1082 <sup>かけふくる小島の月に</sup>すまの浦うら風さえて更<sup>友よふ千鳥声きこゆ</sup>るよに所<sup>さ</sup>ため<sup>す</sup>千鳥なく也  
 松雪  
 全  
 1083 かつ落て松のしほまぬみとりをは見するや松雪の心なるらん  
 朝霜  
 忠順  
 1084 小春てふ日の光にはあたりても猶とけかたきけさの霜哉  
 竹霜  
 簾  
 1085 大方の草木はかれて竹のはの霜こそ千代の花とみえけれ  
 冬月  
 全  
 1086 さえくれし嵐の跡の川浪をしつめて宿る冬のよの月  
 朝氷  
 方秀  
 1087 朝な／＼とつる氷<sup>むすひて</sup>松風の音のみ残す山の滝つせ  
 寒夜  
 全  
 1088 冴えまさる嵐の音に終夜眠りもはてぬ閨のさむしろ  
 行路雪  
 全  
 1089 吹送る嵐につれて時の間に行きの跡をうつむしら雪  
 山雪  
 貞長  
 1090 雲晴ててる日の光さしなからつもりしまゝの峰のしら雪  
 朝霜  
 有隣  
 1091 けさも猶残りし菊と見えつるは籬の霜の白き也けり  
 1092 日かけさす森の朝霜打とけて又ねの床に鳩そ眠れる

1093 松原のこのまの朝日かけさして川へ伝ひに霜烟るなり  
           道古  
 1094 し of 原の小笹の上に置霜は朝日にひかる玉とこそ見れ  
 1095 朝日さす松の梢に置霜のとくるかけより露そ時雨る  
           勝彬  
 1096 松のはにさわきしよは of 風の音もむすひとめたるけさの霜哉  
           良知  
 1097 朝な／＼庭に置そふ霜寒み苔のみとりも色替りけり  
 1098 朝けたく宿の烟のたな引て軒は of 霜はとけ初にけり  
           方秀  
 1099 呉竹のよのまに<sup>は</sup>冴し風の音をしつめてむすふけさの霜哉  
           廉  
 1100 有明の光は消て影をのみあしたに残す霜の色哉  
           徳隣  
 1101 朝日さすかたへは消て我門の松かけはかり残る霜かな  
           長虎  
 1102 霜のおくあしたの原は秋にみし花よりも猶珍きかな  
           朝雪  
           有隣  
 1103 けさみれはつもりし庭の雪の色に又一しほの寒さをそそふ  
 1104 しつまりし嵐の後やつみつらんけさ<sup>そ</sup>見て<sup>そ</sup>しる庭の白雪  
           峰雪  
           廉  
 1105 ほの／＼と明行く峰の松原もよ of 間の雪に埋みはてけり  
           浦雪  
 1106 ふる雪の埋みはてにし浦舟に友よふ声そさひしかりける

1107 かきくらしふりつもりたる白雪をたかふみ分ん武蔵のゝ原  
           野雪  
           社頭雪  
           徳隣  
 1108 庵前の雪は払はし潔くつもるや神の心なるらん  
 1109 住吉の松の嵐は埋れて雪静なるあけの玉かき  
           山家雪  
 1110 降つもる雪もいとはしかねてより<sup>とさし</sup>明<sup>とさし</sup>なれたる谷の庵は  
           古郷雪  
           長虎  
 1111 雪の色は梢の花とみすれ共みる人もなし古郷の庭  
           野若な  
           有隣  
 1112 ふみ分し子日の跡を尋てや野への雪まの若なつむらん  
           帰雁  
 1113 古郷の<sup>と</sup>こよの花にまたれてや急て雁の帰りゆくらん  
           寄花祝  
 1114 数しらぬ齡の数に山桜花ひらことに千代をこめつゝ  
           長虎  
 1115 盛なる花もよろこふ色見えて君かちとせの春祝ふなり  
           野若菜  
           維足  
 1116 消残る雪たに見えずことしこそのとけきのへの若なつみけれ  
 1117 花かたみ手ことにさけし乙女らは若なつみにと野にや行らん  
           待花  
 1118 なからへてことしも春は待つつけつ今より待はさくらなりけり  
 1119 春来ぬと柳は眉を作りけり花の下紐早もとかなん  
           野若な  
           良知

- 1120 老らくも霞と空に立出て心を野へに若なつむらん  
方秀
- 1121 おのつかから春や知らん古年の雪の下にも野への若なは  
山霞 徳隣
- 1122 遠さかるこゝちこそすれ朝な／＼<sup>春を</sup>を深めてかすむ山のは  
梅鶯誘風
- 1123 里の名の梅津やいつこ立こめし霞匂へる春の朝かせ  
朝霞
- 1124 立のほる朝日のかけにあらはれて霞をもるゝみねの松原  
帰雁 忠順
- 1125 帰りゆく雁の別をおしみつゝ霞に消るかけしたふらん  
維足
- 1126 空冴てかすまぬ方を古郷の道の下とかりはゆくらん  
長虎
- 1127 帰る雁見送る方に心なく跡たちかくす春霞かな  
方秀
- 1128 行雁の声もほのかに聞ゆ也霞む外山の春の曙  
維足
- 夕春雨
- 1129 いつよりも淋しかりけり春雨のそほふる寺の入相のかね  
野春駒 忠順
- 1130 野へひろくあそへる春の若駒は嘶く声ものどけかりけり  
方秀
- 霞隔松
- 1131 ひゝにそふ緑の色もわかぬ迄霞たなひく峰の松かえ  
野雲雀
- 1132 久かたの空に声して春の野の霞を落る夕雲雀哉  
柳誘風
- 1133 春風のさそふまに／＼打とけてむすふひまなき青柳の糸

- 春夜月
- 1134 影霞む軒はの花のこのまより覺つかなくも匂ふ月哉  
山霞 有隣
- 1135 朝ほらけみ渡す野への横霞山をは空の物となしけり  
初花
- 1136 けさよりや花の春には成ぬらん庭の桜の花咲にけり  
山花初開
- 1137 山桜咲初めたる色ならしけふよりかゝる峰の薄雲  
花末盛
- 1138 なかはなる今こそはみめ桜花咲尽しなは散や初めん  
庭若草 長虎
- 1139 まかなくに何をたねとて春ことに蒔出ぬらん庭の若草  
余寒雪
- 1140 また咲ぬ花の散かと驚けはさえ帰りふる雪にそ有ける  
川辺柳
- 1141 川浪にあやを出して春ことに必織は青柳の糸
- 詠草 従文久三年冬
- 夜秋風
- 1142 七夕にかさん願の糸薄とくほに出せ野への秋風  
川留を
- 1143 大井川とまりし渡りけさ越てけふや昨日の道いそくらん  
旅宿嵐
- 1144 我ために払ふなさけのつらき哉旅ねの床の寒き嵐は  
病あつしかりしころ
- 1145 けふことにけふにはあらしと斗にけふに成まで思ひつるかな

峰に鹿立月すめり  
 1146 峰高く月をすませて秋風の吹おろしたるさをしかの声  
 雪中早梅  
 1147 待て見るあるしならすは白雪のふりまかへたる梅のはつ花  
 夕立早過  
 1148 夕立は過しなこりの雫にて今こそしめれ森の下かけ  
 武雄にて  
 1149 黒髪山のあらしのよるさえて朝霜白し白川の里  
 行路螢  
 1150 よきゆけはよきゆくさきにさへきりてあなつりかほに飛螢哉  
 月  
 1151 久かたの日につく光り神代より今もかはらぬ月のかけ哉  
 牡丹の陰に  
 1152 道ならぬ身は浮雲のとみに消てうるほすまなき宿の村雨  
 名所霞  
 1153 隅田川すむも濁るも見えぬ迄霞にけりな春雨の空  
 若菜夢  
 1154 年の内にことしの春は立初て野への若なは萌そひにけり  
 初聞鶯  
 1155 聞しより心のとけし鶯の初ねや人の春となるらん  
 梅花久芳  
 1156 さそひくるかほりも久し此春は梅の日数や野への春風  
 春祝  
 1157 春の日の長き御代をや祝ふらん賤迄小田を返す／＼も  
 人を待しこゝろ  
 1158 いなは山峰におふてふ松といへときかすや人は帰り来もせず  
 水辺柳

1159 川岸は水を汲にやさはらんむすひあけたる青柳の糸  
 1160 水ひきく峰高ければ青柳のいとく長くなりけり  
 山家松  
 1161 暦たになき山里の松なればふる年月もたれかかそへん  
 1162 門の外にたてる木の名の松とてもたれかはく山里の庵  
 待鶯  
 1163 まちてさく梅の心もしらすしていつまでなかぬ鶯の声  
 1164 かけひたす水のみとりや川つらの柳の糸は染はしむらん  
 1165 春雨の露やたまりて重るらんしはしなひかぬ青柳の糸  
 朝梅  
 1166 戸明れは朝日のかけにさき立て置にまつはる庭の梅か  
 朝梅  
 1167 みたれにしねくたの髪は青柳は朝風にこそくしけつりけれ  
 夕梅  
 1168 なかめあかぬ夕へのへてやしはしみん柳の糸をけふにつなきて  
 夕柳  
 1169 門の戸をさすかくるゝやおしむらん色をましたる梅の夕はへ  
 夜梅  
 1170 閨の戸をさしてぬる間は梅の花あたらかほりをちらさすもかな  
 夜柳  
 1171 乱にし柳の髪も見えぬ哉月の鏡のかけおほるにて  
 門梅  
 1172 過て行袖をとめて我宿を人にとはする門の梅かえ

門柳  
 1173 人ことに立よりそへて我門の柳の糸やなくなすらん  
 庭梅  
 1174 花さけは人のきて見る物ゆへに梅こそ庭を払はせにけれ  
 庭柳  
 1175 庭の面は柳の枝に払はせていとまありける朝清めかな  
 久しく病に臥て  
 1176 雪にふす軒はの竹は立にけり我をもおこせ庭の春風  
 勸孝  
 1177 思へ子よ其子の為に父母の心を尽すもゝかひとつも  
 岡雉  
 1178 夕日かけかたふきかゝる片岡の霞の奥にきゝすなくなり  
 1179 独ねんことをうしとや此夕へ岡の芝生にきゝすしはなく  
 1180 哀なり小雨そほふる岡のへにつまこふきしの夕くれの声  
 山家松  
 1181 雨もよの霞深むる岡のへにつまこひわひてきゝす鳴なり  
 山家松  
 1182 松にふく風たにとへと思ふ迄余りさひしき山かけの庵  
 1183 われをまた哀と思へ軒の松外に友なき山里の庵  
 1184 前しりへ同し木立の山里も庭なる松は庭めきにけり  
 1185 山里はめに見る限り松なれはむへ春秋もしらぬなるらん

1186 軒はより松立つゝく山里は庭の限りやわかれさるらん  
 1187 山里は貧しけれ共陰深き松の千代には富て見えけり  
 水辺柳  
 1188 ねくらとふ鳥の外に声もなし松かけくらくくるゝ山里  
 山家松  
 1189 若鮎や今上るらん川岸に柳も釣の糸たれてけり  
 山家松  
 1190 山里は物にまきれぬしつけさにいよ／＼高し松風の音  
 1191 静なるならひもしらて山里の松には風のなとさはくらん  
 1192 松さへも風にとはれて山里に我さひしさをしるものはなし  
 水辺柳  
 1193 かけてほすさほの川原の糸柳誰も下染し<sup>つる</sup>みとり成らん  
 貞通  
 1194 竜田川紅葉の錦引替て浪の綾織る青柳の糸  
 山家松  
 1195 山里の軒はの松を風とへはかけひの水の音そ答ふる  
 全  
 1196 行水の底にもかかけの動く也風に<sup>ふか</sup>乱るゝ岸の青柳  
 青柳の糸染かけて六田川<sup>かみとりの</sup>流るゝ水に色深むらん  
 山家松  
 1197 白雲のかゝる静き山里に音なふ物は門の松風  
 1198 人とはぬ我柴の戸の松かえは千代もかはらぬ友とこそそみめ

末次左衛門定基

1200 とふ人も絶てなかりし山<sup>の庵に迄</sup>住音なふ物は峰の松風

1201 中東下<sup>水の面に</sup>かけ深き青柳の糸よりかけて浪のあやおる池の春風

伊東良知

1202 さほ川の岸の柳はさほ姫の水をかゝみとけつる髪かも

1203 山里は松の嵐を聞馴て老の枕の夢もやふらす

1204 川水にあらひてほすとみゆる哉岸にかけたる青柳の糸

1205 我庵は山ふかけれは<sup>見なれつも</sup>軒は木も松より外に友とてはなし

1206 朝ねかみけつると見えて池水の鏡に向ふ岸の青柳

1207 深山木の中にもわき<sup>て</sup>したしきは影と頼める庭の松かえ

貞幹

1208 青柳のかけをやとしてさほ川の水の緑も色そへにけり

1209 老にたる我と松とは幾とせか此山里に住なれにけん

有敏

1210 堤なる柳の糸はほそけれとしはしはつなけ淀のかはふね

1211 宿近くなれてそむすふ松かけの千世の雫の山の井の水

1212 流れ<sup>るゝ</sup>影<sup>と見えにし影は</sup>木井川<sup>風になひく</sup>岸の柳は春風<sup>のうつる也けり</sup>そやぐ

南部俊蔵長虎

1213 軒はなる松の嵐にはらはせてよの鹿しらぬ山里の庵

水辺柳

1214 水底に風や寄岸影うつす浪にみたるゝ青柳のいと

1215 山里は物にまきれぬしつけさにいよ／＼高し

〔松風の音〕

1216 一 〔りそへて岸の柳の糸やのふらん

1217 長閑なる池の心は青柳のみたれぬ糸のかけに見えけり

1218 さほ川の岸の春風<sup>てふけ</sup>心<sup>青</sup>せて柳の糸<sup>や</sup>もつれ<sup>ん</sup>も<sup>す</sup>あ

1219 誰しかもよりて見さらん道のへの清水<sup>か</sup>ゆもとの青柳のいと

1220 六田川渡る春風のとかにて今やよるらん青柳のいと

1221 滝川の岸の柳の糸はあれとぬきもとゝめぬ浪のしら玉

1222 水の面に流るゝ春<sup>は</sup>も六田川柳の糸に<sup>むすひ</sup>ぬきとめなん

1223 山深み人<sup>の</sup>作<sup>と作に</sup>とぬさひしさは我松の戸の松やしるらん

1224 さひしさのわするゝひまを山里の夢なさましそ軒の松風

1225 すむやたれ山ふところの内にして又松にさへ木隠の宿

1226 いかなれは我身も松も老にけん年をしらさる山里にして

山家霜  
 1227 我庵は山ふところ<sup>に</sup>いたかれてねてもねられぬ霜の寒けさ  
 寄鼠祝  
 1228 さよ更てうつはり走る鼠迄君か齡を千代となく<sup>本</sup>  
 思花  
 1229 我心いつくの山に迷ふらん見もせぬ花を思ひやるとて  
 都霞  
 1230 都路の霞の袖は錦にて柳さくらを織出しけり  
 寄鶯祝  
 1231 鶯のそのなく声もよろこへり喬きにうつる君か栄へを  
 御花見にめされて  
 1232 立ならふ柳の糸につなかせて花の盛を長くなさん  
 御題  
 都霞  
 1233 行かひのしけき大路の塵よりや都の春はかすむなるらん  
 田辺柳  
 1234 <sup>いそかし</sup>暇の閑かへす田の面<sup>にくりかへし</sup>の春風<sup>これひまなき</sup>に柳も<sup>青柳の糸</sup>米をぐりながしけり  
 春月  
 1235 春のよの月は霞の衣もてつゝめる玉のこゝちこそすれ  
 竹不改色  
 1236 竹の子はみとせをへても改めぬみとりの色や父の道なる  
 寄鶯祝  
 1237 鶯もおなし常はに聞ゆなり松のちとせの春ことの声  
 田辺柳  
 1238 引渡す苗代水にかけみえてまつみとりなる青柳の糸  
 竹不改色  
 1239 うきふしに心かはらぬ色見せていさめかほなる窓のくれ竹  
 春月

1240 なかむれは我心にそわたる哉のとかにもなき朧夜の月  
 山家松  
 1241 山里も御代の恵に賑ひて庭の松迄枝作りせり  
 待花  
 生成  
 1242 こその春咲にし比を思出て昨日もけふも花をこそまて  
 貞幹  
 1243 春雨の軒<sup>のしつ</sup>もる音にねさめして明日はと花の待たれつる哉  
 影うつす池のさゝ浪  
 英世  
 1244 いとせめてわひしき物はいつしかと花待比の心地也けり  
 延春  
 1245 花見んと契りし友は度々にとへ共さかぬ山さくら哉  
 義清  
 1246 待かねて遠山かけを詠むれは雲をそ花の咲とまかへる  
 有隣  
 1247 待わひぬまたて花まつ道もあらは我に教よ春の山人  
 全  
 花初開  
 1248 待わひてけさ見る花の一ひらは千ひらの金もいかて及はん  
 生成  
 1249 とふ人も常にはあらぬ山里は花咲初て塵払ふなり  
 貞幹  
 1250 おきやらぬ閨のひまよりかほる也この朝東風に花や咲らん  
 義清  
 1251 いつしかと思ひし物をいと早も咲にけらしな今朝の初花  
 延春  
 1252 朝日さす窓をあくれは嬉しくも匂ひ初たる庭の初花  
 貞幹  
 花末遍  
 1253 同じ色に咲花なからとくおそきさくらや春の心なるらん

花盛 有隣  
 1254 ちるもあり咲もあれともなへて世の花の盛りはけふかとそ思ふ  
 庭花  
 1255 花のみはわか庭なるそよかりけるよそを羨世の習ひにも  
 1256 植置は庵の庭にも咲出であるしゑらはぬ花そ嬉しき  
 隣花  
 1257 ぬすむとや隣の人は思ふらん垣を出にし花そみつれと  
 山花  
 1258 山さくら雪にまかはゝよしや又散まもならへ消ぬ日数に  
 待花 有敏  
 1259 待人の心からにやよし野山花にまかへてかゝるしら雲  
 花初開 全  
 1260 今朝よりは花の下紐打とけて待し心も長閑也けり  
 花末遍 有隣  
 1261 とくおそき峰のあまたをわきかねて心そ迷ふ花の山路  
 峰霞  
 1262 ひゝにそふ霞や声をへたつらん遠さかり行峰の松風  
 1263 浮世にてさはく心にくらふれは山の嵐は静なりけり  
 山家松  
 1264 山里の心静に聞時は松のあらしもおもしろき哉  
 1265 所から千とせの松も山里の心静に万代やへん  
 梅花久芳  
 1266 おそくとき梢やつきてさそふらんかよひて久し風の梅かゝ  
 杜若

1267 かきつはた暮行春とくる夏の中をへたてゝ咲出にけり  
 山吹 有隣  
 1268 ちりぬともくちせさなんくちなしの色に咲たる山吹の花  
 須賀雄  
 1269 とひ通ふ蝶にも心おかれけり八重山吹の花やちらすと  
 貞幹  
 1270 いにしへにたかめて初て今に猶井手の山吹世に匂ふらん  
 藤 吉胤  
 1271 桃さくら散にしあとに春の色はやゝ立かへる花の色哉  
 須賀雄  
 1272 山松の梢にかゝる藤の花長や春のこゝろ成らん  
 貞幹  
 1273 藤の花風になひくは紫の波のこ高くかゝるとそ見る  
 延春  
 1274 松か枝によるとひるとや咲ぬらん長き短き藤波の花  
 義晴  
 1275 よし野山祭りし松の小枝までかゝりし靡く藤波の花  
 昌秀  
 1276 ちらぬまに春はなくれそ我宿の庭にはひたる藤波の花  
 有敏  
 1277 はいかゝる松の千とせに習てや長くも藤の花は咲らん  
 有隣  
 1278 藤の花咲かゝりたる松風は水なき枝に浪を立てけり  
 山吹 義晴  
 1279 わか宿の川へに咲し山吹は今朝ふく風に散乱けり  
 昌秀  
 1280 をしめともたかならはしそ山吹の春を見捨て散にける哉

1281 みよし野の花のしら雲かつ消てこかねかゝやく春の山吹 延春  
 吉胤  
 1282 此ころは立とまり見ぬ人もなし井手の渡の山吹の花 有敏  
 1283 山吹のいはぬ思も色に出て池の心にかけて移りけり 貞幹  
 暮春  
 1284 岩つゝしいはねと花の散ぬるや春のくれ行命成らん 須賀雄  
 1285 五百重山幾重もかくせ夕霞くれ行春の道まとふかに 義晴  
 1286 けふまてに春くれたりと山里の花もちり／＼みたれ飛也 延春  
 1287 鶯も春の別や惜らん軒ははなます終日もなく 昌秀  
 1288 咲花はちりはてぬまに此春のとゝまらなくに行そつたなき 吉胤  
 1289 花鳥も今は空しく成ぬれと尚をしまるゝ春の暮哉 有敏  
 1290 この春やくれて行らん咲藤の花もかつ／＼末と成つゝ 有隣  
 1291 花ちりし桜の若は青みつゝ春のくれ行色そ見へける 昌秀  
 残花  
 1292 残りなく散はてにける山里に又見る花のめつらしき哉 清雄  
 1293 里遠きみ山のおくの春<sup>と</sup>は風にしられぬ花も有胤 吉胤

1294 春風やふきもらしけん谷かけの若はかくれに残る桜は 貞幹  
 1295 心して風はふかなん山里は猶のこりたる花も有けり 延春  
 1296 散残る花にな咲そ山風は未だ見にこぬ人も有しを 義晴  
 1297 山ことに花はなけれと谷あひにわひしく咲る遅桜哉 吉胤  
 田蛙  
 1298 小山田もすたく蛙の諸声に春にきはしく成にける哉 清雄  
 1299 賤男か今朝引入し小山田の水よりさきに澄む蛙哉 昌秀  
 1300 すきかへす小田の水江水引は嬉しかほにも鳴蛙哉 貞幹  
 1301 春雨の臍に霞む小山田に声はくもらす鳴く蛙哉 延春  
 1302 声たてゝ鳴くや蛙は小山田に一しきりふる雨かとそ聞く 義晴  
 1303 雨降は荒田の西に水まして蛙なく也夢のねことに 清雄  
 雲雀  
 1304 おちく也雲井にあかる雲雀さへ妻と台の床はわすれす 吉胤  
 1305 草深き野末にすめる雲雀さへ雲ゐに近く鳴かはす也 昌秀  
 1306 霞立けふのひかりの長閑にて野へはるかにも雲雀鳴也 貞幹  
 1307 打霞む春のみ空に飛ひはりたゝおほろかの声のみそ聞

1308 長閑なる霞のおくに夕ひはり鳴なる声のかすか也けり 延春

1309 夕霞立にまかせてたつひはり行ゑもしらす遠く鳴也 義晴

1310 鶯のこえをしるへにみつる哉散残りたる山桜はな 有隣

1311 空高くあかるひはりは花ちらす風のすみかを尋てやなく 雲雀 全

1312 引入し小田の水江くち／＼に声をくらへて蛙なくなり 田蛙 全

1313 若草は短けれども大あらしの森のあら駒つなきとめけり 春猷 全

1314 むさし野のはてなくあをむ若草にたはれて遊ぶ春の友駒 長虎

1315 咲つゝ桃の林を来てみれば放ちし午もむれあそひつゝ 春香

1316 春雨のつく／＼とふる永日は手かひの駒も打ねふりつゝ 全

1317 何故にくるゝ春をはおしむらん花はふしまて散にし物を 暮春 有隣

1318 おしめともとまらて春のくれ行は散し花をやしたふ成らん 全

1319 花鳥のあかぬ別をしたふまに春もとまらて暮はてにけり 長虎

1320 鶯も老といふ名をおへるまで春はいたくも更にけるかな 春香

成富氏送別

有隣

1321 時しもあれ春のくれゆく比日又君さへわれに別れぬる哉

藤花盛 全

1322 藤のはなけふの盛は紫の雲か浪かとまかへてそ見る 初秋露

1323 涼しさの初の秋のいちしるく庭にしたゝる木々の朝露 萩露

1324 萩か枝は花と露とに打なひき風の吹にもうこかさりけり 月前花

1325 心あてにそれとはみねの花の色も朧月よの有明の空

(佐賀県立図書館所蔵図 991/911.1 45-153)

